

**みんなの森づくり活動
成果検証アンケート調査**

2020 年 3 月

公益財団法人 都市緑化機構

目 次

1. アンケート調査の内容	2
1) 調査課題・目的	2
2) 調査対象	2
3) 調査方法	2
4) アンケート構成	3
2. アンケート調査の結果	5
1) 活動実態の把握	5
① 活動目的	5
② 活動場所	6
③ 現在の活動状況	8
④ 収入	10
⑤ 関係・連携団体	13
⑥ 登録メンバー数	16
⑦ 中核メンバー数	17
⑧ 中核メンバーの年齢構成	18
⑨ 年間事業(予算規模)	19
⑩ 年間活動回数	20
⑪ 1回あたりの活動時間	21
⑫ 年間延べ参加者数	22
⑬ 参加者の内容	23
2) 「みんなの森づくり活動」による助成効果の把握	24
① 助成を受けて実施した活動期間中の成果	24
② 助成期間が終了してからの成果	26
3) 活動における課題意識の把握	27
4) 「次世代を育む環境づくりと人づくり」と活動の繋がりについて	29
① 「次世代を育む環境づくりと人づくり」と活動の繋がり	29
② 市民活動に対する助成で重視している点	31
5) 意見・感想について	32
3. 活動の持続性に関する分析結果	33
1) 関係・連携団体との関係性	33
2) 関係・連携団体の連携内容	35
3) 年齢構成	36
4) 事業規模	37
5) 年間延べ参加者数	38
6) 参加者	39
7) 社会環境の変化(活動開始年度別 活動目的)	40
4. アンケート結果の総括	41
1) 活動実態の把握	41
2) 「みんなの森づくり活動」による助成効果の把握	41
3) 活動における課題意識の把握	41
4) 活動と「次世代を育む環境づくりと人づくり」との繋がりを把握	42
5) 持続性のある活動の要因を把握	42
5. 自由回答意見	44
① 助成を受けて実施した活動期間中の成果について(活動を通じて実感した成果)	44
② 助成期間が終了してからの効果について(変化の理由や変化した事項について)	46
③ 専門家の指導や知見が必要だと思う具体的な事	50
④ その他、活動を継続する上で、見えてきた課題などについて	55
⑤ 「次世代を育む環境づくりと人づくり」と活動の繋がりについて(理由)	61
⑥ 「次世代を育む環境づくりと人づくり」に対して企業に求めること、 もしくは市民一人一人にできることについて	63
⑦ 主催者のサポートや関わりについて期待すること	65
⑧ ご意見、ご感想等	66
6. 参考資料	68
① アンケート調査依頼書	68
② アンケート票	69

1. アンケート調査の内容

1) 調査課題・目的

花王・みんなの森づくり活動は、本年（2019年）で20年目、来年2020年には20周年を迎え、全国で延べ500を超える緑をまもり育てる市民活動団体を支援することとなります。本調査は、20年の区切りを迎えるにあたり、その成果を確認するとともに、「みんなの森づくり活動」を新たな時代に即したものとし、より一層、緑のまちづくり、環境改善に貢献する取組みとするための検討材料を抽出し、次の時代への取組み課題を明らかにすることを目的とします。

【調査課題】

- ・ 活動実態の把握
- ・ 「みんなの森づくり活動」による助成効果の把握
- ・ 活動における課題意識の把握
- ・ 活動と「次世代を育む環境づくりと人づくり」との繋がりを把握
- ・ 持続性のある活動の要因を把握

2) 調査対象

アンケート調査対象は、これまで20年間に「みんなの森づくり活動」で支援してきた479団体を対象とします。

【調査対象の概要】

- ・ 調査対象： 「みんなの森づくり活動」で支援した479団体
うち、既に解散している団体及び複数回助成されている団体の重複分を除いた411通を送付した。そのうち、35通が宛先不明で返送されているため、計374団体へアンケート調査を実施した。
- ・ 属 性： 緑地の保全創出に携わる市民活動団体
- ・ 分 布： 全国

3) 調査方法

- ・ 調査方法： 郵送による調査票の配布・回収（合わせてe-mailでの配布回収）
- ・ 実施主体：（公財）都市緑化機構
- ・ 調査期間：
 - ・ アンケート票発送： 2019年12月20日
 - ・ アンケート票投函締め切り： 2020年1月14日
 - ・ 最終締め切り： 2020年2月17日
- ・ 回答数：207団体
- ・ 回答率：55.1%

4) アンケート構成

- I 活動実態の把握
- II 「みんなの森づくり活動」による助成効果の把握
- III 活動における課題意識の把握
- IV 活動と「次世代を育む環境づくりと人づくり」との繋がりを把握

上記4つの設問構成により、データ収集調査を行うことにより、20年という歳月の中で助成団体にどのような変化があるのか等、長期継続助成であるからこそデータ化できる事項をアンケート調査の考察に反映します。

このことにより、当アンケートの目標である「次の時代への取組み課題」をより客観的に抽出できるものと考ええます。

【アンケート項目】

調査課題	目的	ID	調査項目 1	ID	調査項目 2
I 活動実態の把握	活動団体の基本情報の実態を把握する	1-1.	活動団体名(助成を受けた時と変更がある場合は、当時の団体名)		
		1-2.	助成を受けた事業名(団体名と別の事業名がある場合)		
		1-3.	団体代表者氏名		
		1-4.	活動目的	1-4-1.	活動目的(記述)
				1-4-2.	活動目的(選択肢)
		1-5.	活動概要		
		1-6.	主な活動場所		活動場所 所有者 面積(m ²)
		1-7.	上記以外の活動場所		活動場所 所有者 面積(m ²)
		1-8.	活動開始時期(西暦で表記)		開始時期 終了時期
		1-10.	収入	1-10-1.	年会費(/人)
	助成による状況の変化を確認する。			-10-2-1.	年会費以外の主な収入の有無
				-10-2-2.	会費以外の主な収入
		1-11.	他団体との関わり	1-11-1.	関係・連携団体の種類(助成当時)
					関係・連携団体の種類(現在)
				1-11-2.	関係団体数(助成当時)
					関係団体数(現在)
				1-11-3.	関係・連携団体との関わり方(助成当時)
					関係・連携団体との関わり方(現在)
		1-12.	登録メンバー数		助成当時 現在
		1-13.	中核メンバー数		助成当時 現在
		1-14.	中核メンバーの年齢構成		助成当時 現在
		1-15.	年間事業(予算規模)(円)		助成当時 現在
		1-16.	年間活動回数(回)		助成当時 現在
		1-17.	活動時間(/1回)		
		1-18.	年間延べ参加者数		助成当時 現在
		1-19.	参加者の種類		助成当時 現在

調査課題	目的	ID	調査項目 1	ID	調査項目 2
Ⅱ 「みんなの森づくり活動」の助成効果の把握（量的効果・質的効果）	助成団体の活動にどのような効果があったのか把握する。	2-1.	活動期間中の成果	2-1-1.	助成効果
				2-1-2.	緑地の維持・保全
				2-1-3.	景観の保全・改善
				2-1-4.	生物多様性の保全
				2-1-5.	子ども達の学びの機会
				2-1-6.	介助など支援が必要な方の学びの場・交流の場の機会
				2-1-7.	社会参加の機会の増加
				2-1-8.	地域の賑わい増加
				2-1-9.	具体的な成果（記述）
		2-2.	助成期間後の成果	2-2-1.	年間活動計画の達成
				2-2-2.	地域からの認知度
				2-2-3.	事業規模（予算）の変化
				2-2-4.	年間延べ参加者数の変化
				2-2-5.	活動メンバー数の増減
				2-2-6.	活動内容の充実
				2-2-7.	交流団体数の変化
				2-2-8.	変化の理由やその他事項（記述）
Ⅲ 活動における課題意識の把握	課題を把握する。	3-1.	若手会員の導引方法・育成や世代交代の確立		
		3-2.	活動資金の確保		
		3-3.	活動場所の確保		
		3-4.	技術や知識の習得		
		3-5.	団体のマネジメント手法の習得		
		3-6.	他の団体や地域との連携		
		3-7.	他団体との交流の場		
		3-8.	活動に対する地域社会の理解・支持		
		3-9.	モチベーションの維持		
		3-10.	外部からの評価・認知度		
		3-11.	専門家の指導や知見		
		3-12.	専門家の指導や知見が必要だとする具体的な事（記述）		
		3-13.	見えてきた課題（記述）		
Ⅳ 活動と「次世代を育む環境づくりと人づくり」との繋がりを把握	「次世代を育む環境づくりと人づくり」という花王のコンセプトとの活動の繋がりを把握する。	4-1.	活動と「次世代を育む環境づくりと人づくり」との繋がりを把握	4-1-1.	活動と「次世代を育む環境づくりと人づくり」との繋がりを把握
				4-1-2.	そのように回答した理由
	「みんなの森づくり」活動への評価・要望を把握する。	4-2.	「次世代を育む環境づくりと人づくり」に対して企業に求めること、もしくは市民一人一人にできること		
		4-3.	「みんなの森づくり」活動への評価・要望	4-3-1.	市民活動に対する助成で重視している点
				4-3-2.	主催者のサポートや関わりについて期待すること
その他			意見や感想の自由記述		

2. アンケート調査の結果

1) 活動実態の把握

① 活動目的

団体の活動目的について複数回答で訊ねたところ、回答 207 件中、「イ.地域の環境改善」が 162 件(78.3%)と最も多く、次いで「キ.地域の美化、景観づくり」が 145 件(70.0%)、「カ.環境教育」が 143 件(69.1%)と高い値となりました。「イ.地域の環境改善」と「キ.地域の美化、景観づくり」と共に活動目的としている団体も 122 団体あり、この二つの目的が密接に関係していることがわかります。具体的な活動として、身近な道や、学校、公園での植樹を行う、街づくりに近いものから、森林保全、里山保全、棚田の保全など自然の中での活動までを含みますが、森林、里山、棚田等を地域の財産として守ることも、街づくりの一つと考える傾向が見られます。また、子どもを対象とした活動も多く、植樹、花壇づくり、収穫体験という身近な活動から、里山保全の体験学習というものまで幅広い活動が含まれています。また、「ケ.子育て支援・福祉」を目的とした活動も 39 件(18.8%)あり、教育や幅広い世代の交流、コミュニティづくり等、「人づくり」を対象とした活動も多数行われていることが明らかになりました。

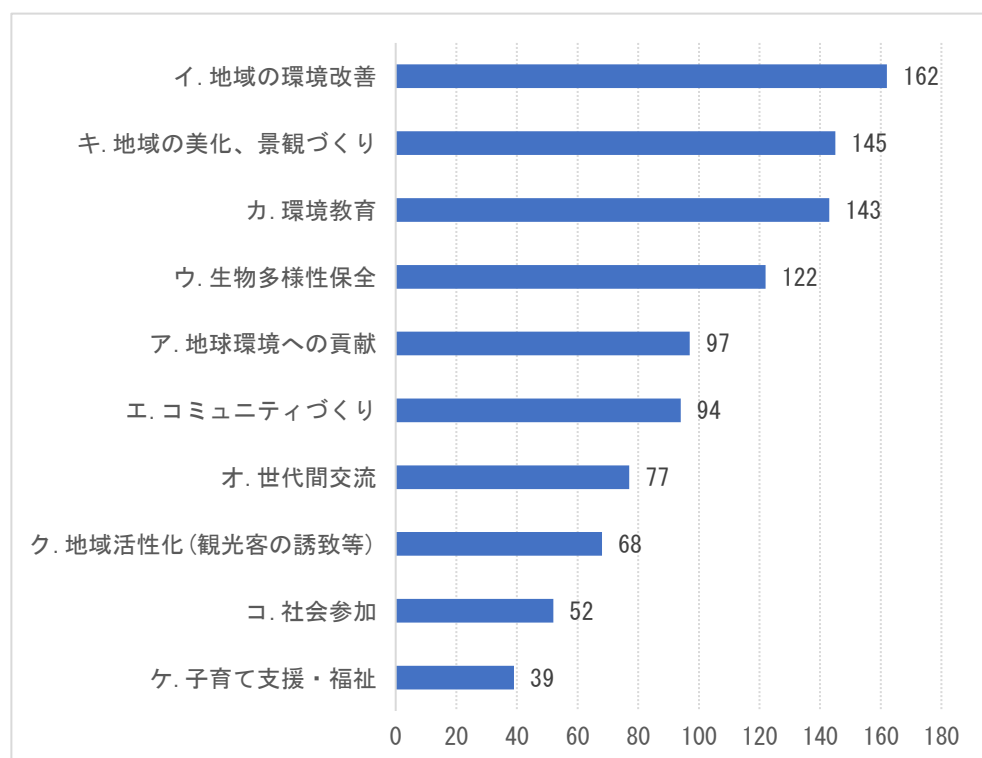


図 活動目的

② 活動場所

a. 活動場所の所有者について

活動場所の所有者としては、回答 207 件中「公共」の割合が最も多く 120 件 (58.0%) と 6 割弱を占めます。次に「個人」35 件 (16.9%)、「公共・個人」の共同所有が 18 件 (8.7%) と多く、公共もしくは個人の所有の割合が高いという結果となりました。「企業」は 5 件 (2.4%)、「公共・企業」が 4 件 (1.9%)、「個人・企業」が 1 件 (0.5%) と企業の所有も僅かながら存在することが明らかになりました。また、1 団体で 2 か所の活動場所を持つ団体は、207 件中、58 件で約 3 割に及ぶことが明らかになりました。

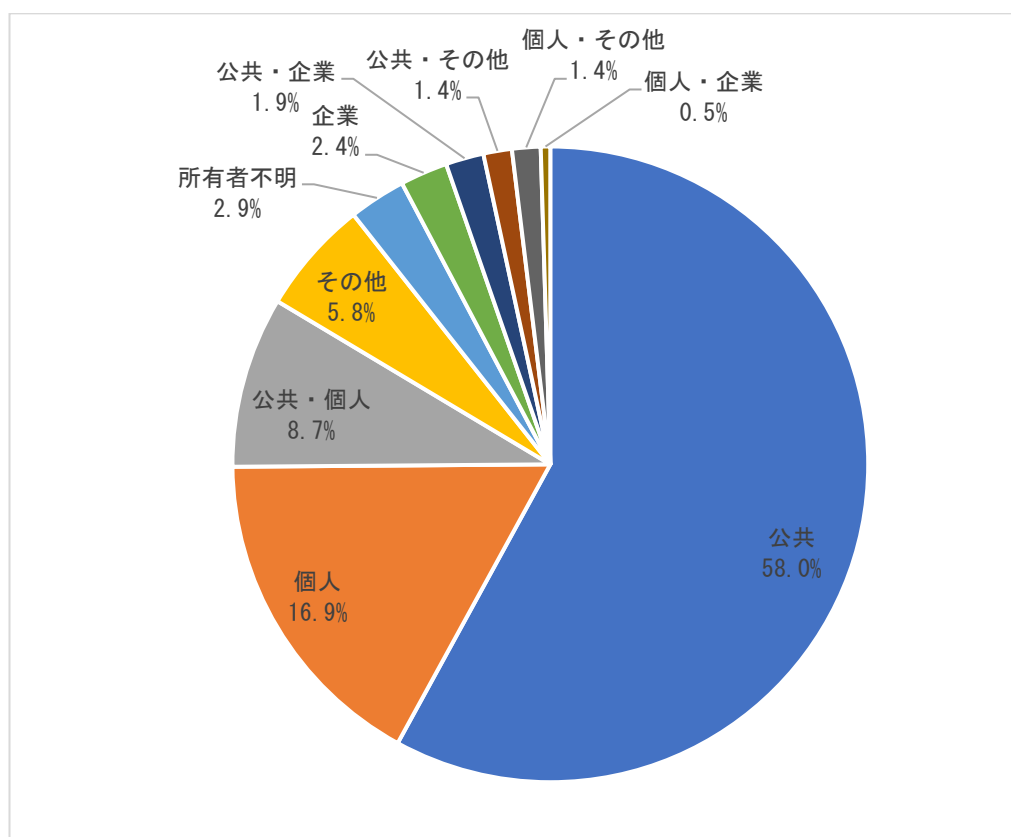


図 活動場所 所有者

b. 活動場所の面積規模

活動場所の面積としては、回答 207 件中、「1ha 未満」が 65 件(31.4%)と最も高く、次いで「1ha 以上 5ha 未満」が 60 件(29%)となりました。「5ha 未満」の面積で活動を行っている団体が全体の 6 割(60.4%)、「20ha 未満」の面積で活動を行っている団体は、全体の 8 割を占めています。

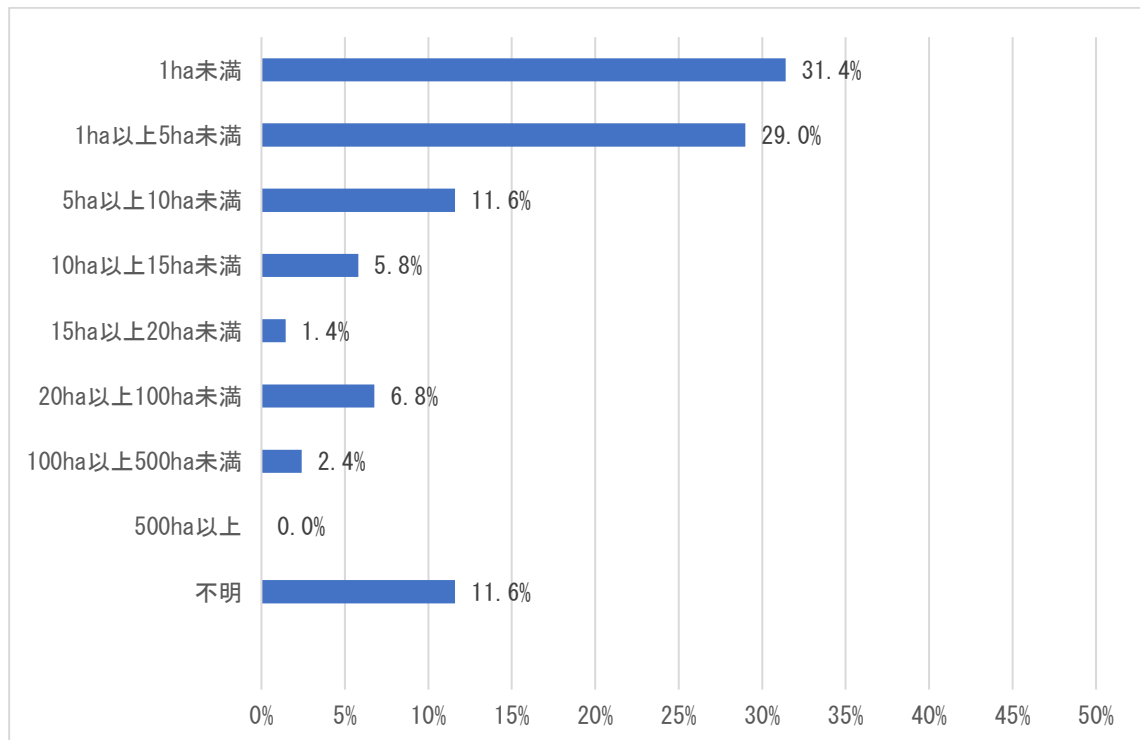


図 活動場所の面積規模

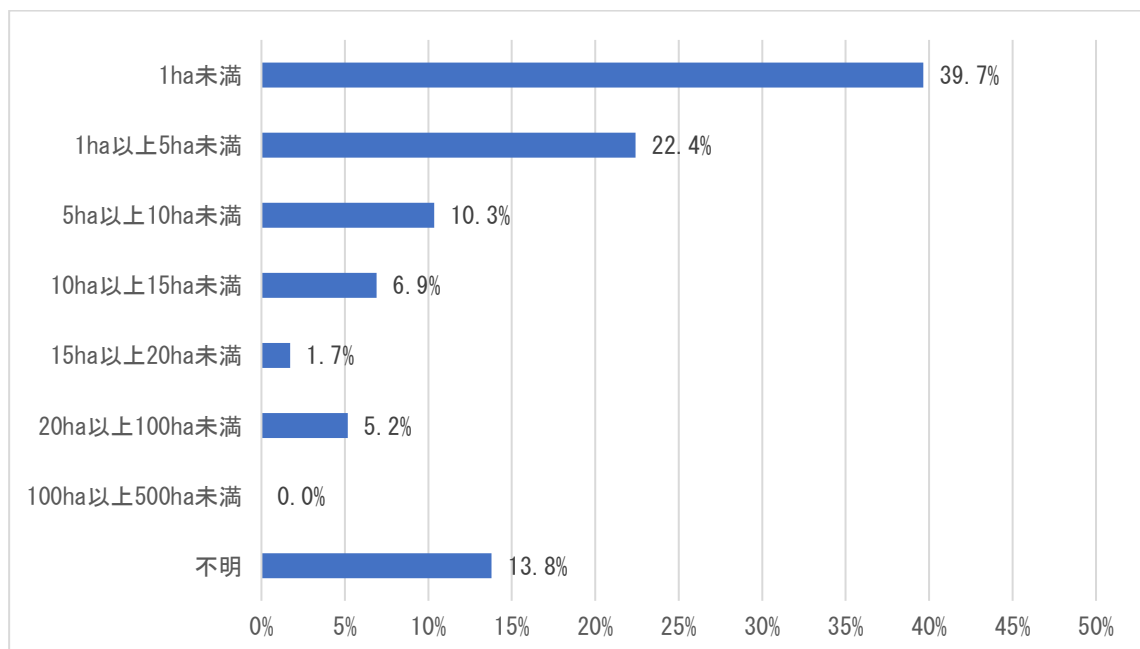


図 その他の活動場所の面積規模

③ 現在の活動状況

a. 活動の継続状況

有効回答 207 件のうち、現在も活動を継続しているとした団体は 190 団体（91.8%）であり、活動を中止または終了した団体は 17 件（8.2%）あります。活動を中止または終了した理由は、「活動メンバー（ボランティア）の高齢化」、「人材不足」、「指導者不足」、「イベントへの参加者数の減少」という人材に関するものや、資金面に関するもの、「植樹など目標のある活動で目標が達成したため」といった理由が挙げられます。しかしながら、約 9 割の団体が現在も活動を継続していることが明らかになりました。

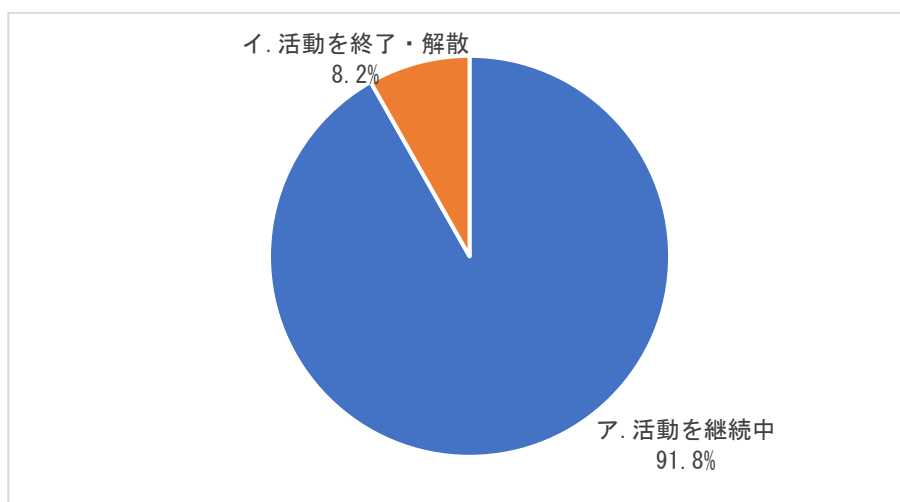


図 現在の活動状況

また、活動を終了・解散をした理由として、下記が挙げられています。

一覧 活動を終了・解散をした理由

活動目標が達成されたため。
期間限定の活動であったため。
活動の担当教員が学校から離任されたことで活動を終了・解散したため。
助成金補助が終了したため。
資金の確保、資金協力を得ることが難しいため。
これまでのボランティアが高齢化して活動ができないため。また、これに変わるボランティアの確保ができない。後継者難。
参加人員の減少のため。
指導者不足のため
NPO法人解散により活動を終了したため。
新組織を立ち上げ、さらなる活動をしているため。

b. 活動の開始時期

みんなの森づくりで支援する活動団体の活動開始年について訊ねたところ、2009 年が最も多く（16 団体）、2000 年から 2010 年の間に開始した団体が多いことが明らかになりました。しかし 2000 年以前に活動を開始した団体も 33 団体あり（1966 年開始も含む）、長期間、活動を継続している団体も存在することが明らかになりました。

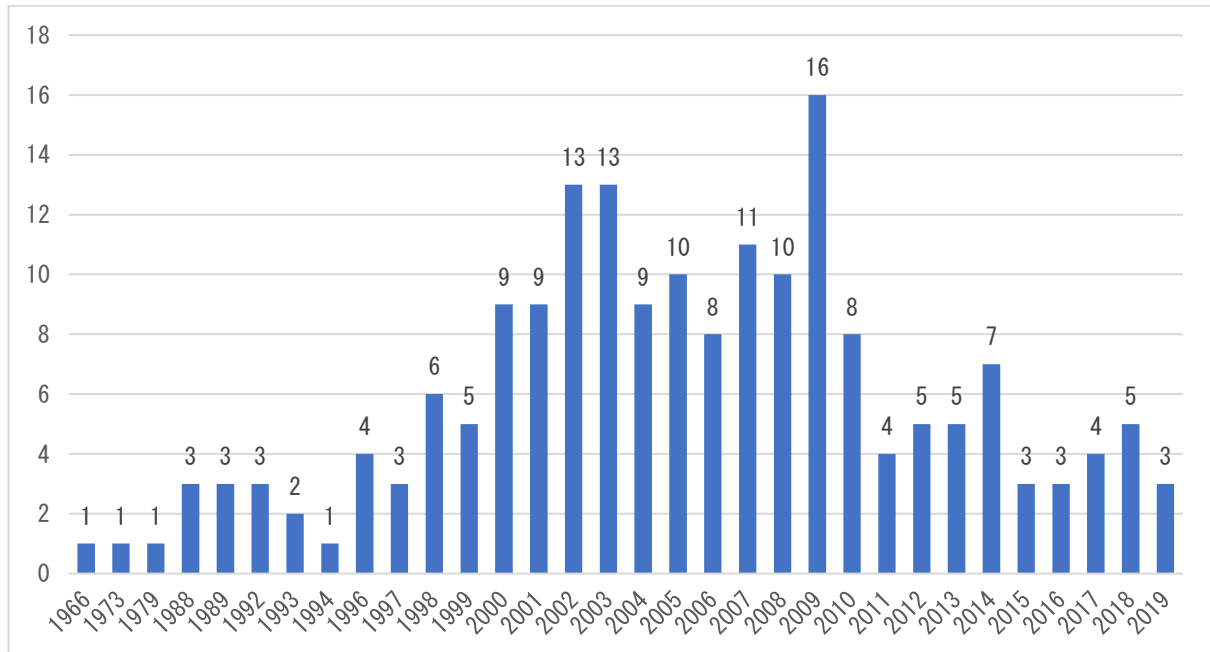


図 活動開始の年

④ 収入

a. 年会費

会員からの会費については、207 団体中「1000 円以上 2000 円未満」が 68 団体(32.9%)と最も多く、次いで「2000 円以上 3000 円未満」が 37 団体(17.9%)という結果となりました。また、「0 円(会費なし)」という団体も 33 団体(15.9%)あることが明らかになりました。支払いをしやすい金額に設定されていることが伺えます。

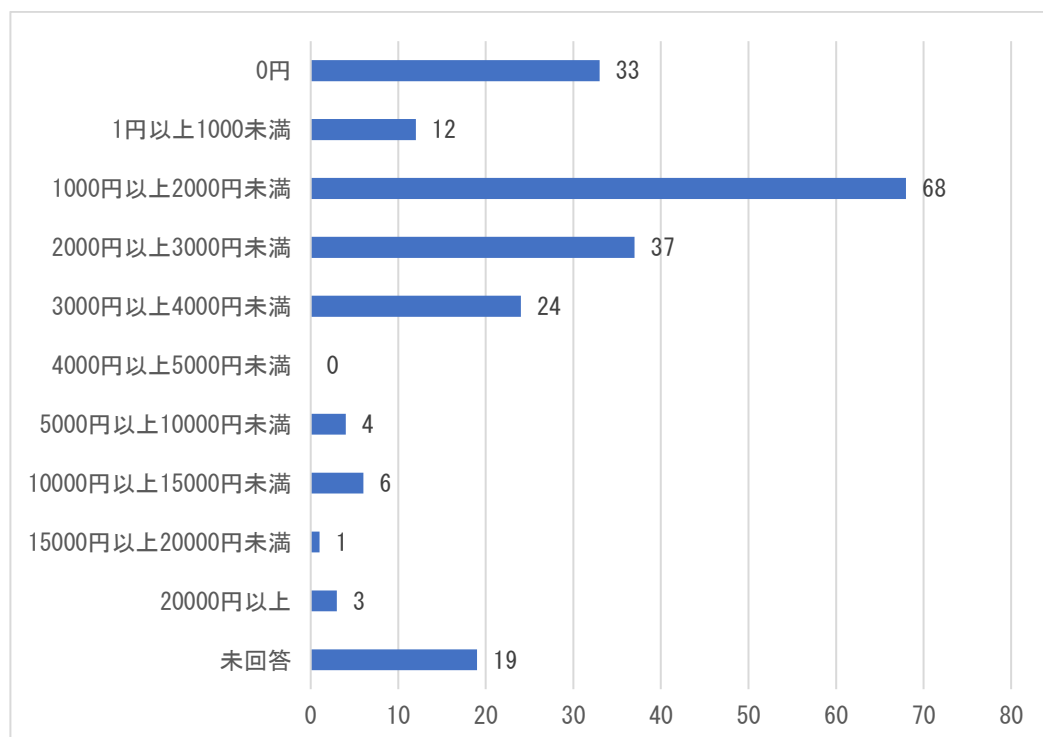


図 年会費

b. 会費以外の主な収入

207 団体のうち、約 8 割(165 件、79.7%)の団体が、会費以外の主な収入があると回答しました。また、会費以外の主な収入としては、助成金(公的助成金・民間助成金を含む)が最も多く、77 団体(37.2%)ですが、自主財源を持つ団体も 77 団体あり、その内訳は、42 団体(20.3%)が事業収入(イベント参加費・謝礼金等)、18 団体(8.7%)が物販、17 団体(8.2%)が指定管理等の事業委託という結果となりました。

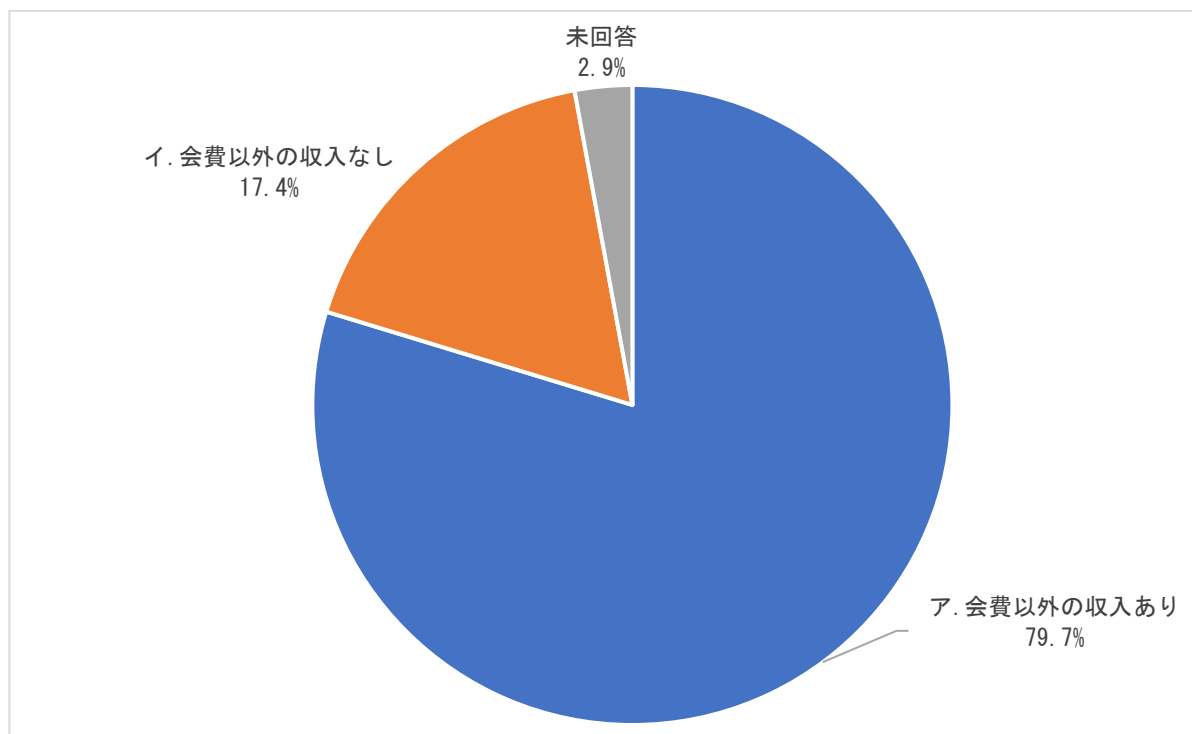


図 会費以外の収入の有無

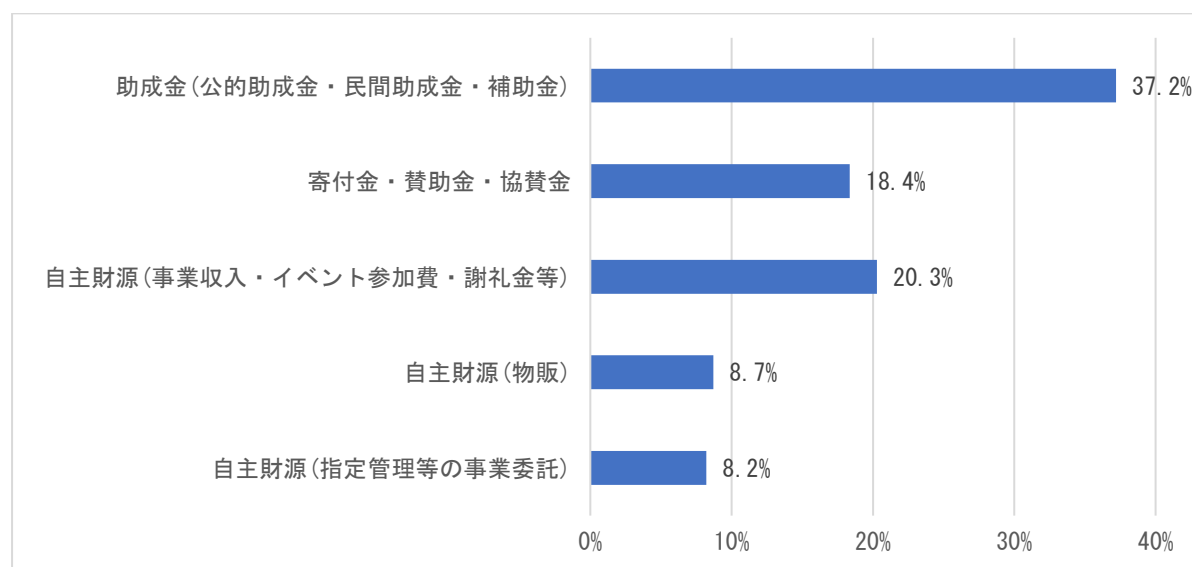


図 会費以外の主な収入源

会費以外の主な収入の金額は、10万円以下が83件(42.8%)で最も多く、次いで「10万円以上50万円以下」が61件(31.4%)であり、全体の7割以上(74.2%)が50万円以下の収入ということが明らかになりました。一方で、500万円以上も15件あることも明らかになりました。そのうち5件は、指定管理等の事業委託をしている団体、6件が自主的に事業をしている団体であり、補助金や寄付金のみの団体より収入が多いことが伺えます。

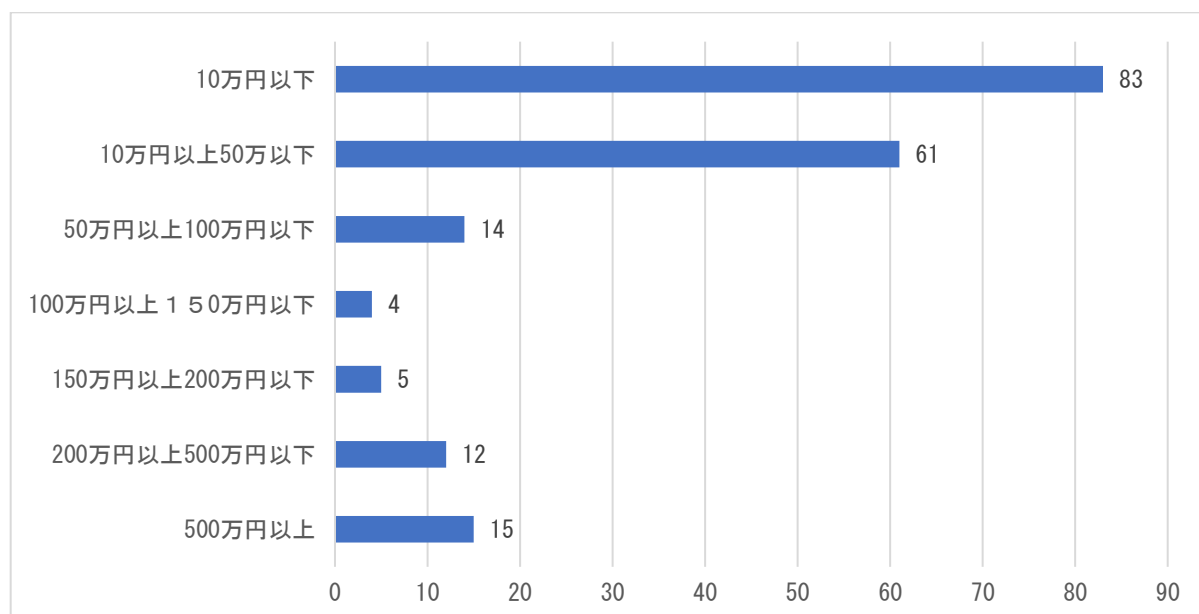


図 会費以外の主な収入額

⑤ 関係・連携団体

a. 関係・連携団体の種類

助成当時、現在共に公共機関(市役所等)が、関係・連携団体として最も多く(助成当時：168 件・現在：172 件)、次いで他 NPO 等市民団体が多い傾向が明らかになりました。次に教育機関(幼稚園～中学校)となっていることから、子どもに働きかけをしている団体も多いことがわかりました。また、全ての項目において助成当時より現在の方が高い数値となっていることから、助成当時よりも関係・連携する団体が増加した傾向があることが明らかになりました。

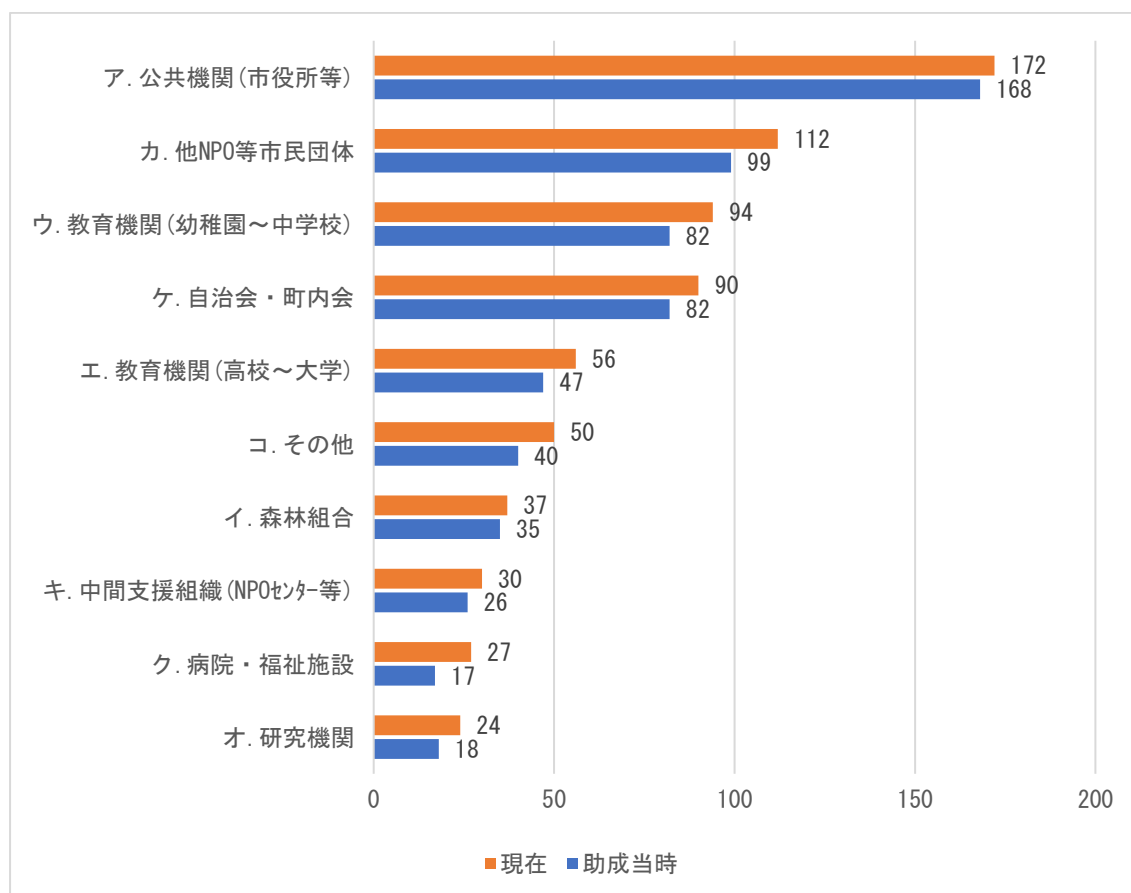


図 関係・連携団体の種類

b. 関係・連携団体の変化

207 件中、「増減なし」が 81 件(39.1%)と最も多く、次いで「1～5 の増加」が 59 件(28.5%)という結果になりました。関係・連携する団体が増加した件数は、全体で 82 件(39.6%)と約 4 割であり、関係・連携する団体が減少した件数は全体で 32 件(15.5%)と、減少した団体より、増加した団体の方が多いことが明らかになりました。100 以上増加した団体は、一つはプレーパーク活動をしており、未就園児の預かり事業、森のようちえん事業、放課後の子供の居場所づくり事業と事業が拡大傾向にあることが理由としてあげられます。もう一つの団体は、緑あふれる都市をつくることを目的とし、地域住民組織（各地区市民委員会）、各種緑化団体、経済界、報道関係、関係官公庁の代表者等、趣旨に賛同される団体や人と、幅広く共に活動していることが理由として考えられます。

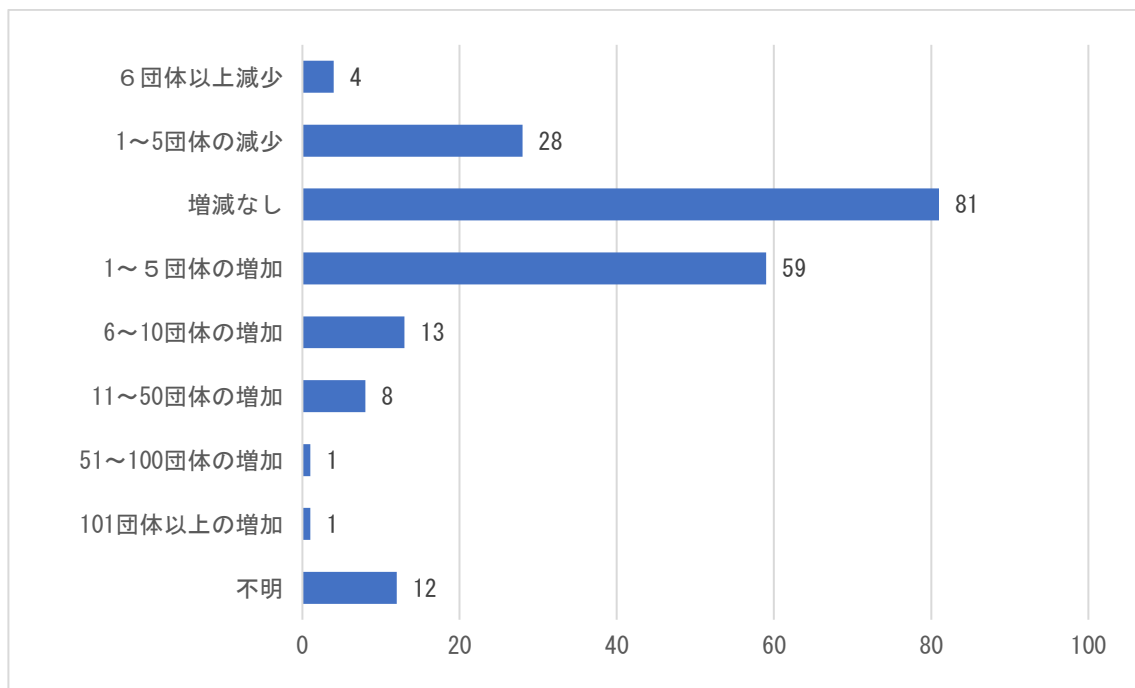


図 関係・連携団体の増減

c. 関係・連携団体との関わり方

関係・連携団体との関わり方について、複数回答にて訊ねたところ、助成当時および現在ともに、「カ.イベント協力(開催運営・参加)」が最も多く(助成当時 139 件・現在 147 件)、次いで「ク.維持管理活動への協力」が多く挙げられています(助成当時 107 件・現在 119 件)。このことから、イベントやボランティア作業時の人数確保を目的とした関わり方をする団体が多いことがわかりました。また、全ての団体で、助成当時より現在の方が、関わり方の割合が高いことから、関係・連携する団体数を増やすだけでなく、関わり方も多岐にわたってきていることが伺えます。

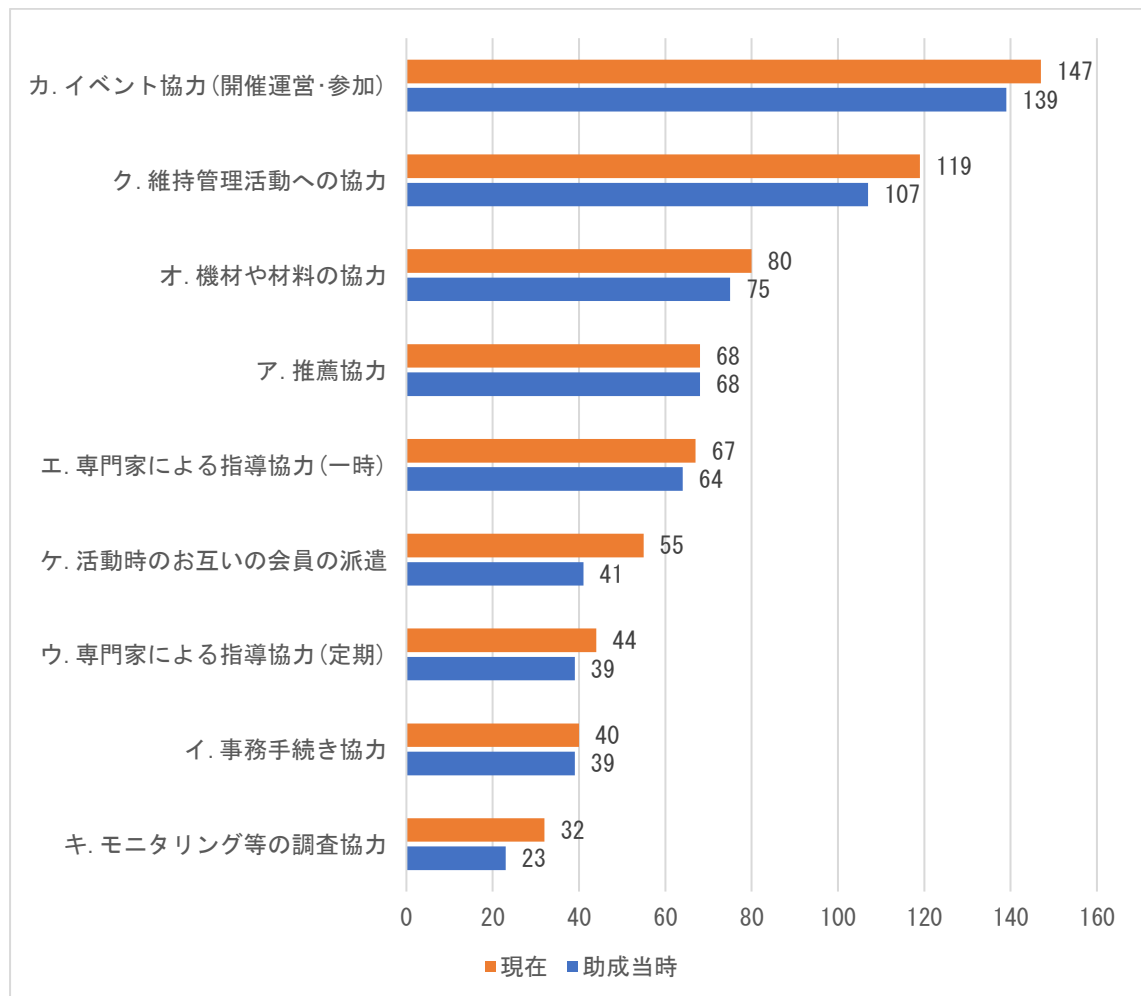


図 関係・連携団体の関わり方

⑥ 登録メンバー数

各団体の登録メンバー数については、「10人以上50人未満」と回答した団体が114団体(現在)、106団体(助成当時)と共に最も多く、50%を占めるという結果となりました。次いで「50人以上100人未満」が39団体(現在)、47団体(助成当時)となり、登録メンバーは、「100人以下」の団体が80%弱を占めるという結果となりました。一方で「1000人以上」のメンバーを登録している団体も1団体あることが明らかになりました。

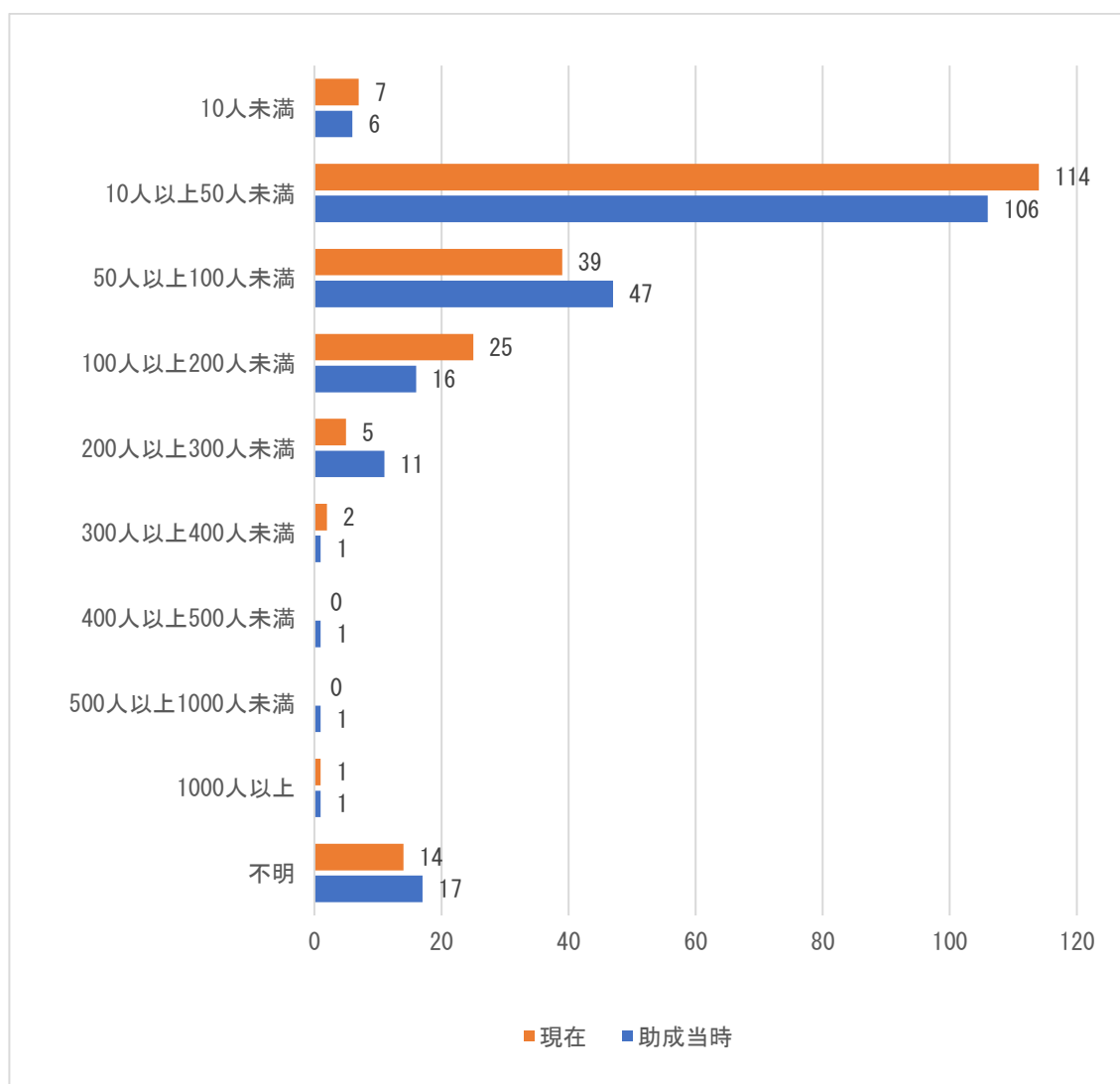


図 登録メンバー数

⑦ 中核メンバー数

中核メンバー数については、助成当時は「10人以上20人未満」の団体が67団体(32.4%)と最も多く、現在は「10人未満」の団体が75団体(36.2%)と最も多い結果となりました。登録メンバー数と比較し、中心となって活動をしているメンバーは少ないことが明らかとなりました。その中で500人以上と大きな値のグループを見ると、植樹、保全協働事業、保全支援事業、環境調査事業、普及啓発事業、市民活動団体支援事業など既に幅広く実施している団体でありました。

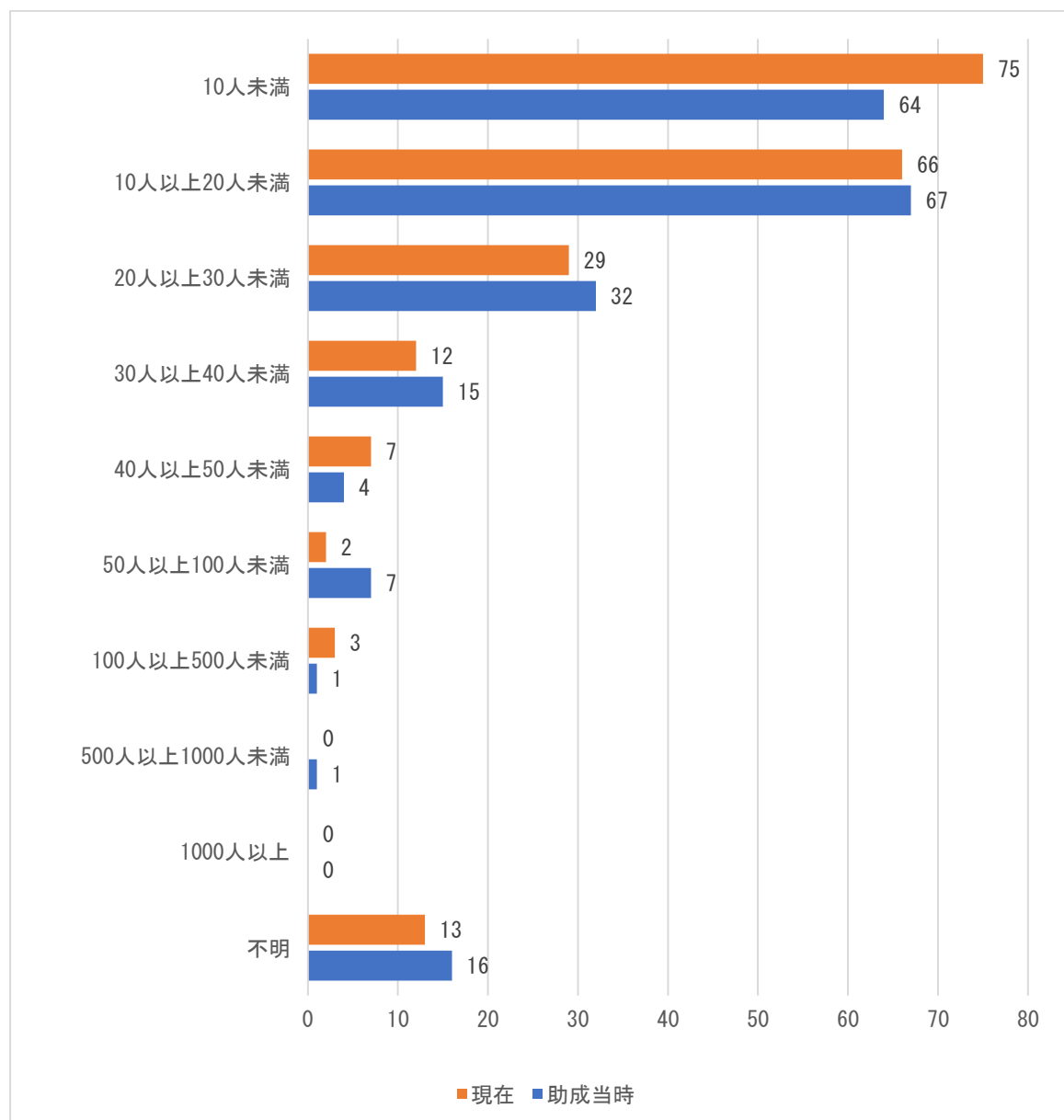


図 中核メンバー数

⑧ 中核メンバーの年齢構成

中核メンバーの年齢構成について、40代以下のメンバーは、「一人もない」団体が助成当時 99 団体、現在は 112 団体と増えており、また、「10 人以上 50 人未満」の団体は助成当時に比べ減少しています。よって、40 代以下の若い世代の参加が減少していることが伺えます。しかし、現在、40 代以上が「50 人以上 100 人未満」の団体が 3 団体、「100 人以上」の団体も 1 団体あり、若い世代を増やしている団体も存在していることも明らかになりました。また、「10 人以上 50 人未満」の人数を助成当時と現在を比較してみると「40 代以下」、「50 代」、「60 代」では団体数が減少しているのに対し、「70 代」「80 代以上」では、団体の数が増えており、世代交代が行われず、高齢化していることが伺えます。

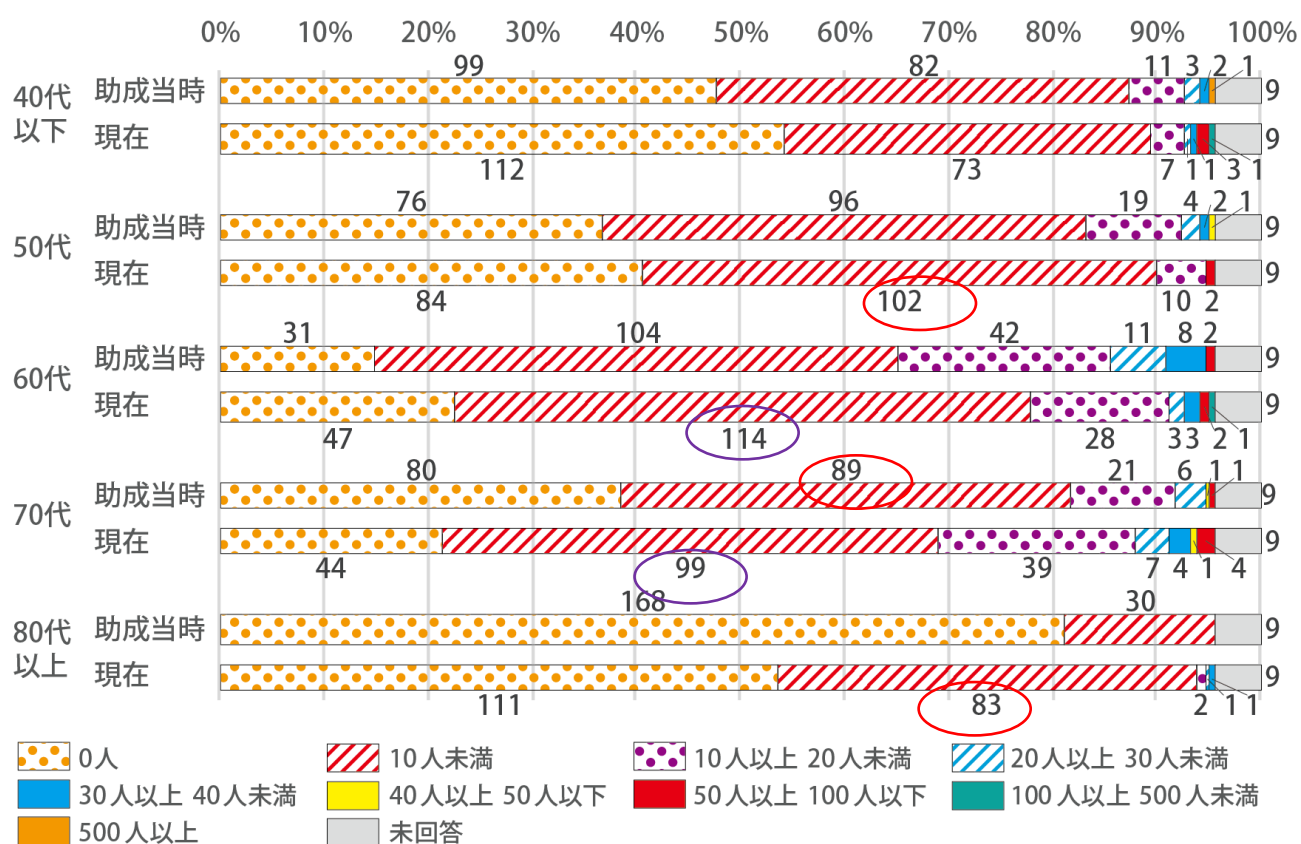


図 中核メンバーの年齢構成

⑨ 年間事業(予算規模)

年間事業(予算規模)については、助成当時においては、「100万円以上200万円未満」が32団体、現在においては、「10万円未満」が28団体で最も多い結果となりました。助成当時と比較し、現在の方が「10万円未満」の団体が増加している一方で、「500万円以上」も5団体増えています。現在「1億円以上」となっている団体もありますが、事業の中には里山の公園管理委託費を含んでおり、団体の活動メンバーが高齢化する中、他NPOや大学との連携を進めたことで活動への参加者も増え、事業規模も大きく変化してきたとの声を把握できました。

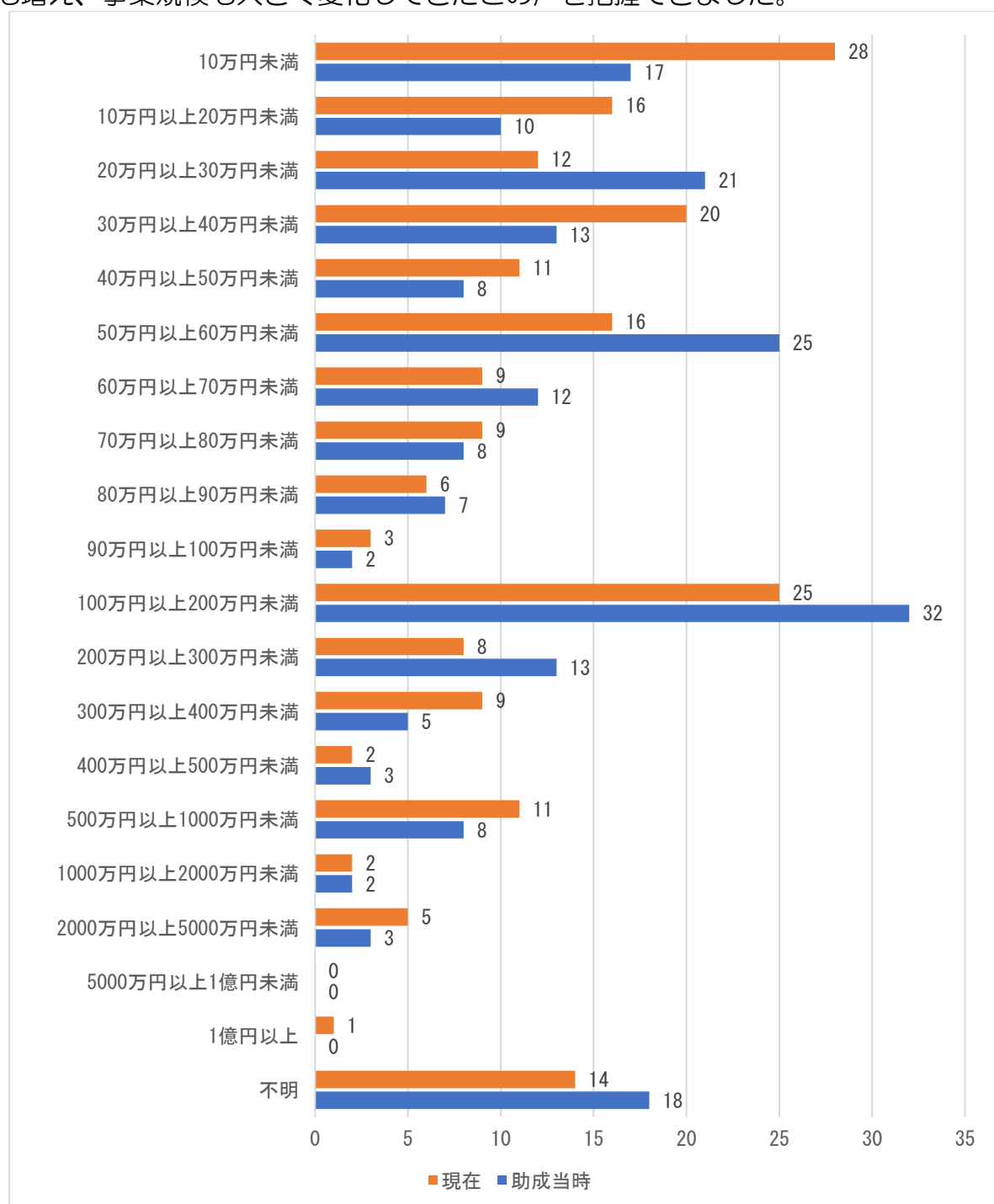


図 年間事業(予算規模)

⑩ 年間活動回数

年間活動回数としては、「0 回以上 30 回未満」までの合計が、助成当時 100 団体(48.3%)、現在 102 団体(49.3%)とほぼ 50%近くを占めています。その一方で、「100 回以上」活動する団体も、助成当時 25 団体、現在 30 団体あり(「300 回以上」活動を行っている団体も、助成当時 1 件、現在 2 件)、ほぼ日常的に活動する団体もあることが明らかになりました。現在 300 回以上活動を行っているうちの 1 つの団体は、事業規模が大きく変化をしたことがわかりました。もう 1 つの団体は、行政、企業、保育園等との連携が強いことがわかりました。これら 2 団体に関しては、活動回数に加え活動メンバーや参加者も増加していることから、全体的に活動が活発化していることが伺えます。

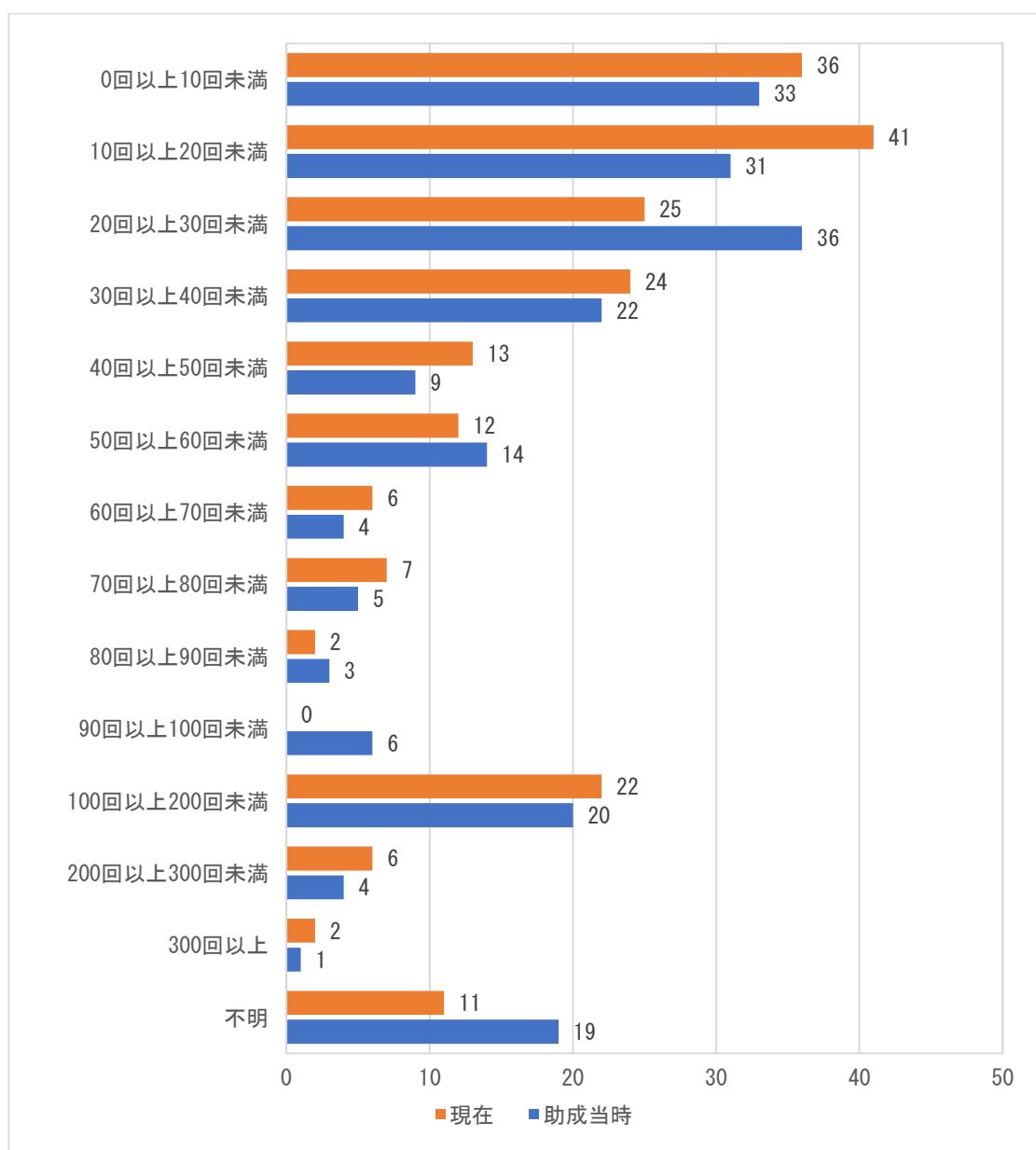


図 年間活動回数

⑪ 1回あたりの活動時間

1 回当たりの活動時間は、「3 時間以上 4 時間未満」と回答した団体が、207 件中 58 件(28%)と最も多い結果となりました。「8 時間以上」の作業をする団体も 7 件ありますが、「3 時間以上 7 時間未満」の団体数を合計すると 139 件(67.1%)となり、約 7 割の団体が半日程度の活動をしていることがわかりました。

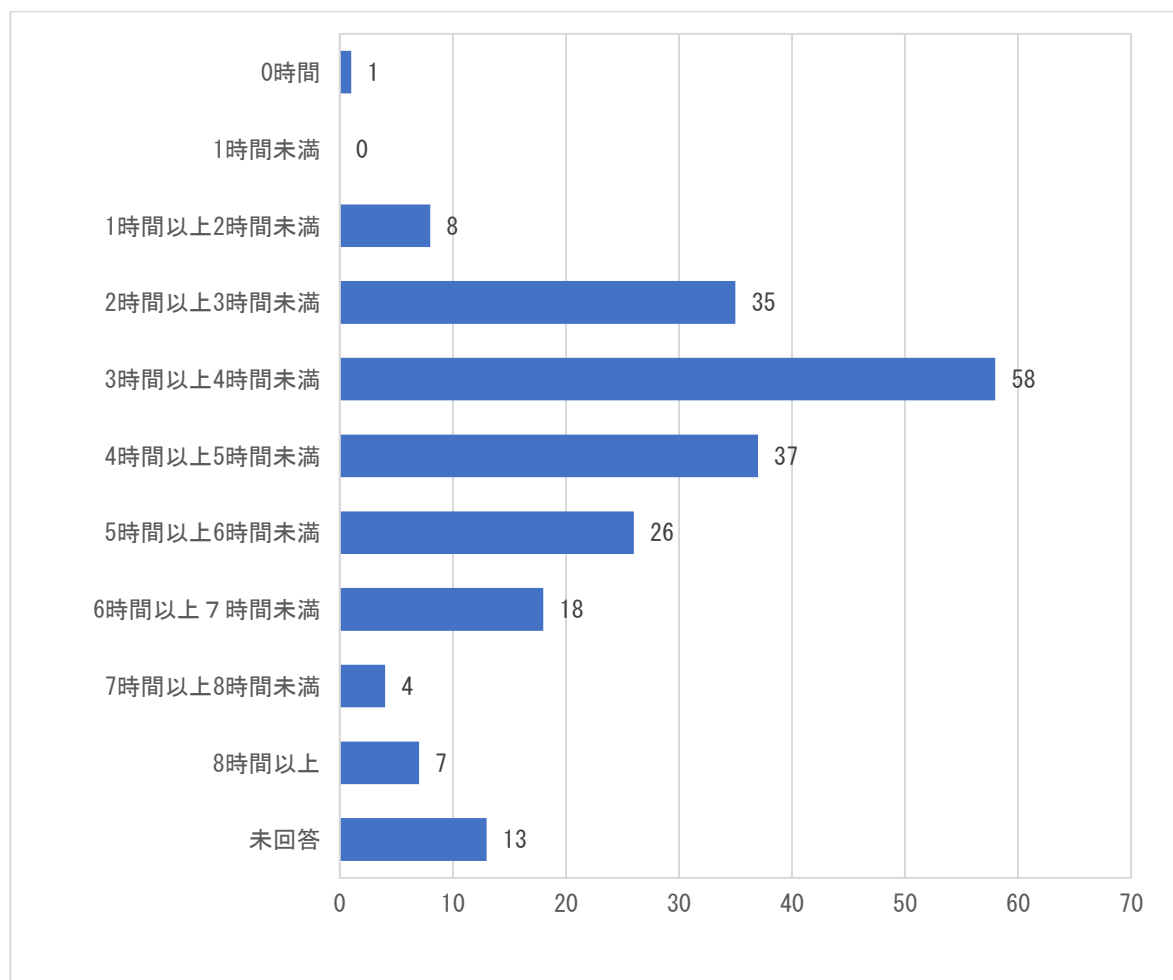


図 1 回あたりの活動時間

⑫ 年間延べ参加者数

年間延べ参加者数については、「500 人以上 600 人未満」の団体が、助成当時 48 団体、現在 34 団体と最も多い結果となりました。助成当時と比べ 14 団体減少し、「100 人未満」の団体は、助成当時 17 団体、現在 29 団体と増加傾向にあるという結果になりました。また、助成当時と現在の年間延べ参加者数を比較したところ、1000 人以上増加した団体が 13 団体もありましたが、全体としては、約半数が増加、約半数が減少もしくは増減なし、という結果となりました。

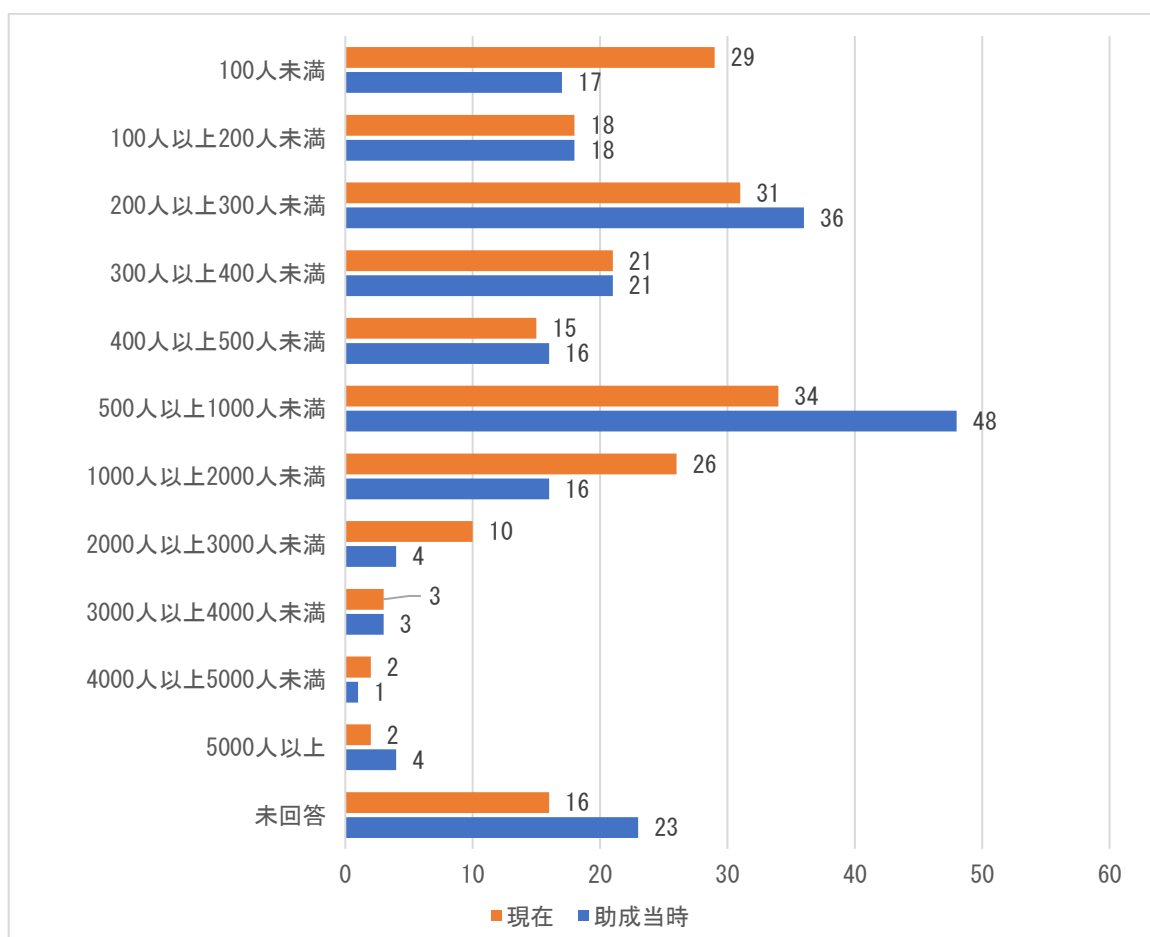


図 年間延べ活動参加者数

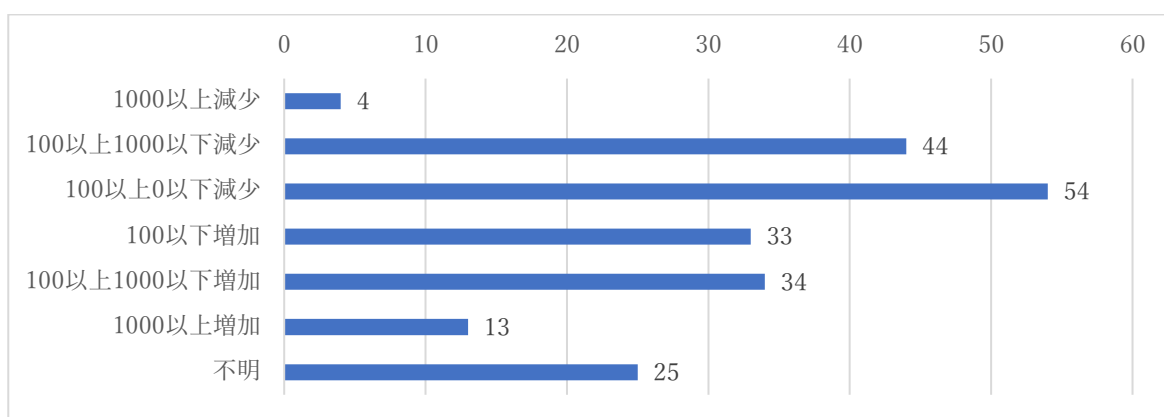


図 年間延べ参加者数の増減

⑬ 参加者の内容

参加者の属性については、「60 歳以上」が参加していると回答した団体が、助成当時 87%、現在 89.9%あり、ほとんどの団体に 60 歳以上の方の参加が見られることがわかります。また「小学生以下（0～12 歳）」の参加も助成当時 59.9%、現在 58.9%と約 6 割の団体で見られることがわかりました。参加者の内容としては、助成当時と現在とあまり違いがないという結果になりました。

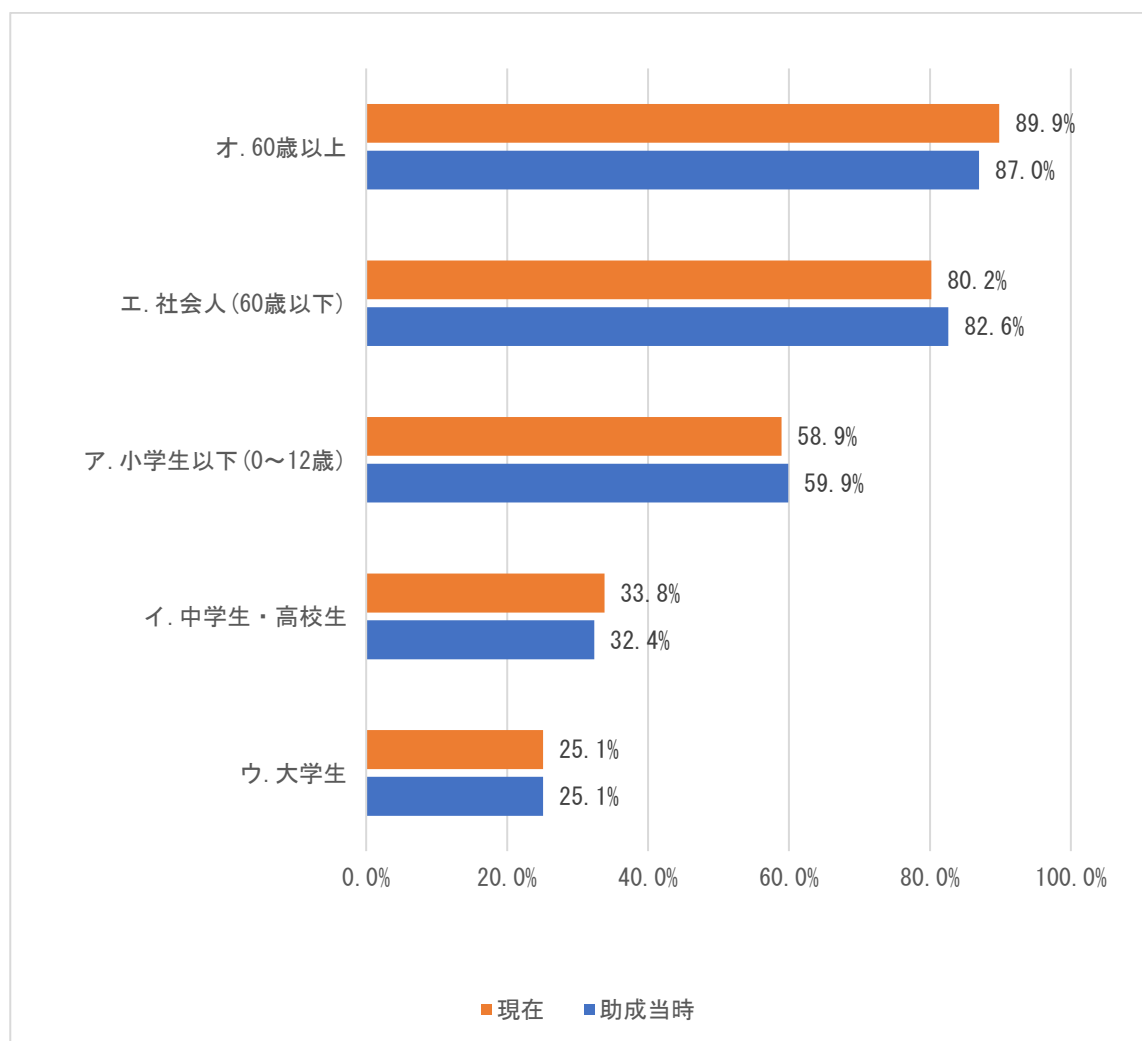


図 参加者の内容

2)「みんなの森づくり活動」による助成効果の把握

① 助成を受けて実施した活動期間中の成果

助成期間中に実施した活動の成果について、「2-1-1.活動全般を通じて、助成の成果を実感している」に対する肯定的意見(当てはまる、やや当てはまる)が 95.2%であり、全般的に助成の成果を実感している団体が多いことが明らかになりました。具体的な設問としては、「2-1-2.緑地の維持・保全等に貢献できた」(93.2%)、「2-1-3.景観の保全・改善に貢献できた」(87.4%)、「2-1-5.子ども達の学びの機会をつくることのできた」(78.8%)とそれぞれの肯定的意見(当てはまる、やや当てはまる)が7割以上という結果になりました。

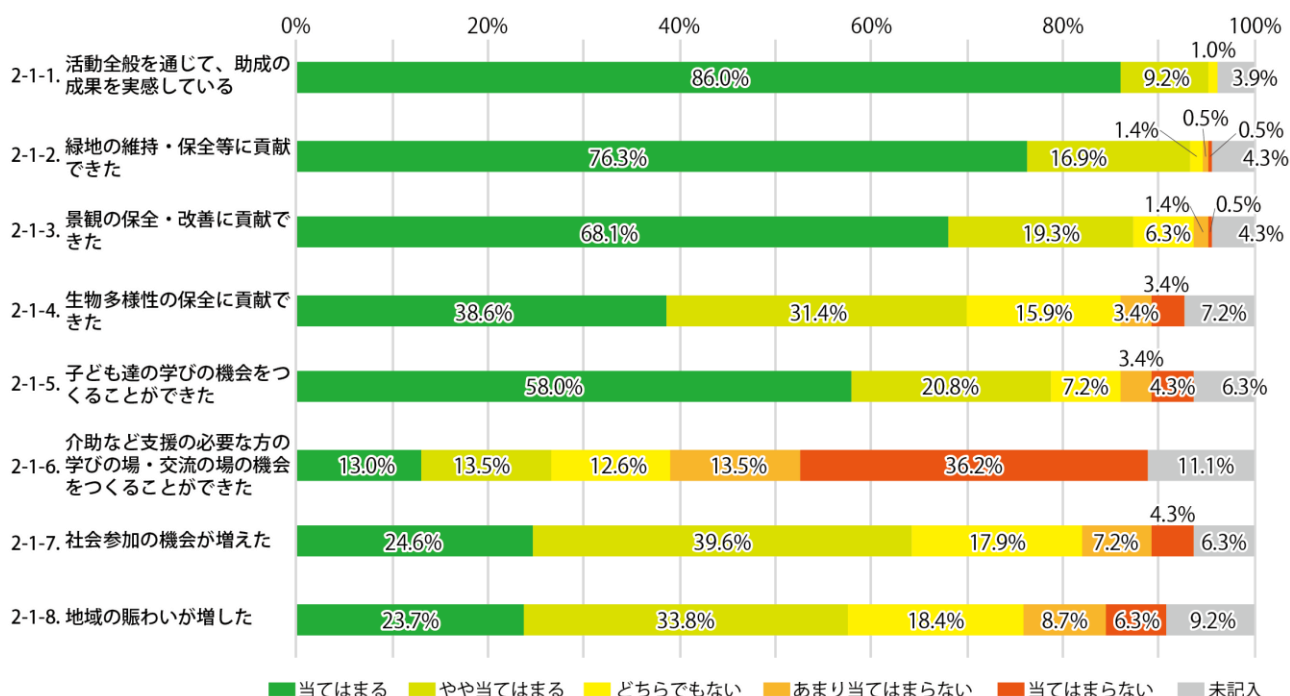


図 助成の効果(活動期間中)

【記述回答】

記述回答では、「助成金の活用に関する事」、「団体や活動についての認知度の向上(広報活動の充実)に関する事」の2つの内容が多く見られました。

助成金の活用に関する事では、助成金により、「活動初期の活動を軌道に乗せることができた」、「購入した道具類などにより活動の基盤を作ることができた」、「作業を効率的に行うことが可能となった」、「多くの参加者が参加するイベントを実施することができた」、「専門家を呼ぶことができた」等の感謝の気持ちを伝える意見が多く見られました。

また、「団体や活動についての認知度の向上(広報活動の充実)に関する事」では、「新聞・テレビ等に取り上げられた」、「賞をいただいた」との意見が複数あり、それにより、知名度があがり、行政から信頼を得て仕事を委託された、活動への参加者が増えたとの成果について回答した団体も複数ありました。

「2-1-2.緑地の維持・保全等に貢献できた」に関しては、「里山の範囲が拡大できた」、「里山の活用が進んだ」、「里山への入山者が増えた」という声がありました。

「2-1-3.景観の保全・改善に貢献できた」に関しては、「美しい里山景観ができた」、「荒廃した森が美しい森へと変わった」、「桜などの植樹により景観がよくなった」、「棚田の景観が守られた」、との声がありました。

「2-1-4.生物多様性の保全に貢献できた」に関しては、「貴重種が復活した」、「樹林が多様化した」、「動植物の種類や個体数が増えた」等の声がありました。

「2-1-5.子ども達の学びの機会をつくることができた」に関しては、「小学校の環境学習の場として提供できた」、「小学校へ出前授業に行くことが増えた」、「放課後学童の一環として参加してもらうようになった」、といった学校と連携した活動に関することや、「保育園、幼稚園、子育て団体等の多くの子ども達の自然との触れ合いを増やすことができた」、という声がありました。

「2-1-6.介助など支援の必要な方の学びの場・交流の場の機会をつくることができた」では、「各種老人施設、グループホーム、心身障害者等の福祉施設等の方との触れ合いの場として活用できた」、「障がいを持つ方との交流が増えた」、との声がありました。

「2-1-7.社会参加の機会が増えた」に関しては、「市町村からの活動依頼が増えた」、「メンバーが増えた」等の声がありました。

「2-1-8.地域の賑わいが増した」に関しては、「活動の場が新たな集いの機会となり、地域内外の方々とのコミュニケーションが増えた」との声が多く見られました。

② 助成期間が終了してからの成果

助成期間が終了してからの成果について、「2-2-1.助成後も活動の年間計画を立て、計画的に進めている」(82.6%)、「2-2-2.助成前に比べ、地域からの認知度が上がった」(76.8%)、「2-2-6.助成の後、活動内容が充実した」(72.4%)という項目で、肯定的意見(当てはまる、やや当てはまる)が7割以上という結果になり、助成期間が終了した後も助成の成果が見られる団体が多いことが明らかになりました。一方で、「2-2-4.助成後、年間延べ参加者数は増加傾向にある」(44.4%)、「2-2-5.助成後、活動メンバー数は、増加傾向にある」(36.2%)という項目で肯定的意見が少ないことから、助成の有無にかかわらず、参加者数、活動メンバー数を増やすことに課題があることが伺えました。

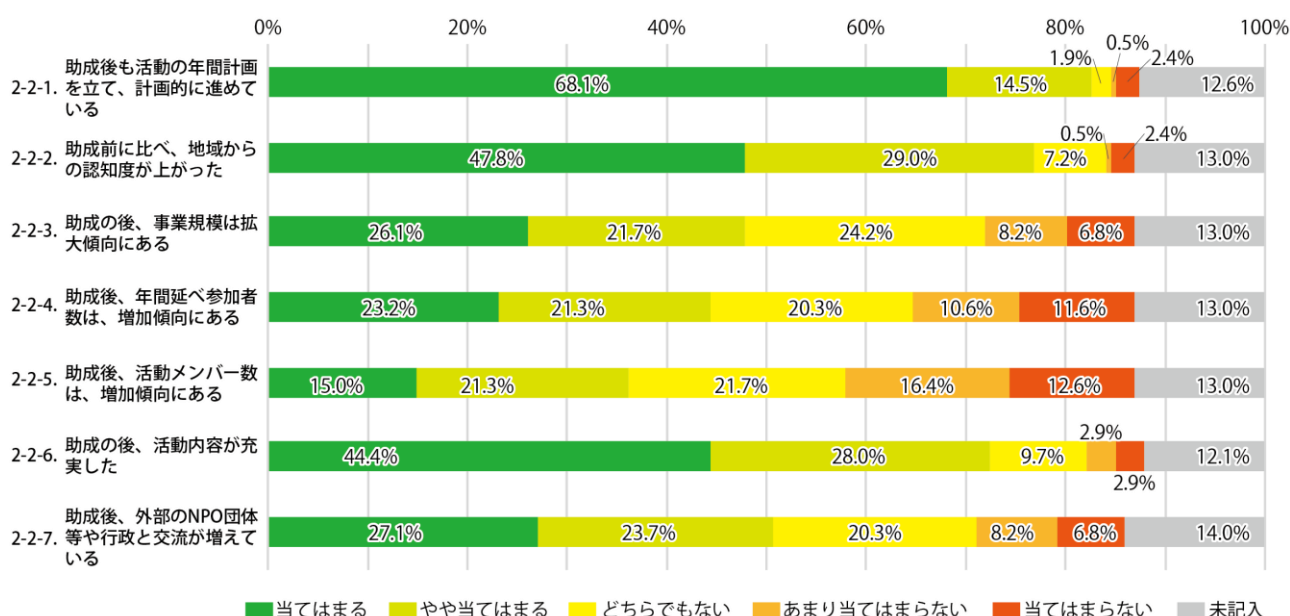


図 助成の成果(活動終了後)

【記述回答】

記述回答では、「2-2-2.助成前に比べ、地域からの認知度が上がった」という項目に関する内容が多く伺うことができ、その理由として、「助成金を受けたことで新聞・テレビ等に取り上げられ、認知度が上がった」という団体や、「継続的に活動を行うことで、その結果として認知度が上がった」という団体がありました。また、「2-2-7.助成後、外部の NPO 団体等や行政と交流が増えている」といった内容の回答も多く、「認知度が上がることで信頼されるようになり、協力や支援が増えた」、という団体が多数見られました。しかしながら、助成期間中に比べ、助成後においては、活動メンバーの高齢化や若手不足、資金不足等の課題を記載した回答も多く、「2-2-3.助成の後、事業規模は拡大傾向にある」(47.8%)、「2-2-4.助成後、年間延べ参加者数は、増加傾向にある」(44.4%)、「2-2-5.助成後、活動メンバー数は、増加傾向にある」(36.2%)に対する肯定的意見(当てはまる、やや当てはまる)が少ない理由となっていることが明らかになりました。

3) 活動における課題意識の把握

活動における課題意識については、「3-1.今後の活動において、若手会員の導入方法・育成および世代交代は、課題である」に「当てはまる、やや当てはまる」と回答した団体が最も多く、全体の92.8%を占める結果となりました。次いで「3-2.今後の活動において、活動資金の確保は、課題である」に、「当てはまる、やや当てはまる」と86.5%が回答しました。活動場所の確保についての課題意識は低い結果となりましたが、それ以外の課題については、半分以上の団体で課題と認識していることが明らかになりました。

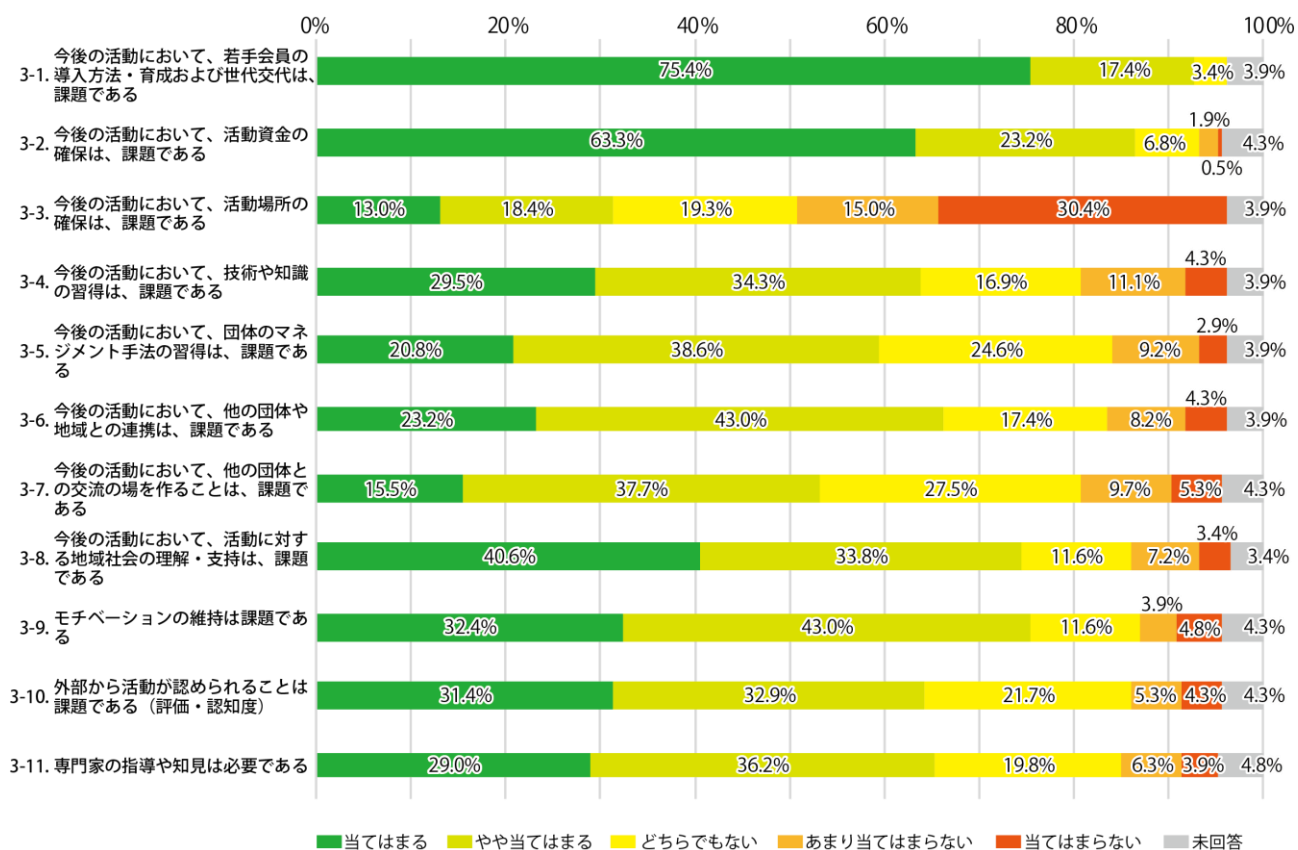


図 活動における課題意識

【記述回答】

「専門家の指導や知見が必要だと思う具体的な事がありましたらお書きください。」という設問に対する記述回答では、多くの団体が専門家の指導や知見が必要と答えています。森林管理、樹木管理、動植物に関する知識、道具の使用技術に関する知識等活動に関することから、団体を運営していく上でのマネジメントの手法や今後の活動方針等、幅広い専門性を必要とする意見がありました。中には、この助成におけるネットワークによる文献・情報や講師派遣などの協力を得たい、という意見もありました。一方、「組織の中に専門家がいる」、「外部の専門家に依頼している」、「定期的に樹木医に依頼している」、「行政の指導を定期的に受けている」、と既に専門知識を元に活動をしている団体もありました。一部、専属の専門家の高齢化や専門家の意見を重視することにより地域性が失われることを懸念する意見もありました。

また、「その他、活動を継続する上で、見えてきた課題などがあればご記述ください。」という設問に対する記述回答では、グラフが示す通り、「今後の活動において、若手会員の導入方法・育成および世代交代は、課題である」という内容が多く見られ、若手がボランティアに興味を示さない、興味があっても時間的、資金的余裕がない、その若手会員の導入方法・育成方法がわからない、若手会員が参加せず世代交代が進まない、高齢化が進む、人手不足になる、技術や知識の継承ができない、継続した活動が行えない、といった課題の連鎖が伺えました。

次いで「活動資金の確保」について言及されている意見も多くありましたが、限られた「人・物・金」、「時間」をどうマネジメントするか、という「マネジメント手法の習得」に関する意見も同時に伺えました。また、人手不足、資金不足を解決することとして、「他の団体や地域との連携」を課題と上げている団体も複数ありました。

4)「次世代を育む環境づくりと人づくり」と活動の繋がりについて

①「次世代を育む環境づくりと人づくり」と活動の繋がり

これまでの活動が、「次世代を育む環境づくりと人づくり」に繋がっているかについて、「当てはまる」と回答した団体が、64.7%と一番多く、次いで「やや当てはまる」が21.3%、合わせて86%の団体が繋がっていると認識していることが明らかになりました。

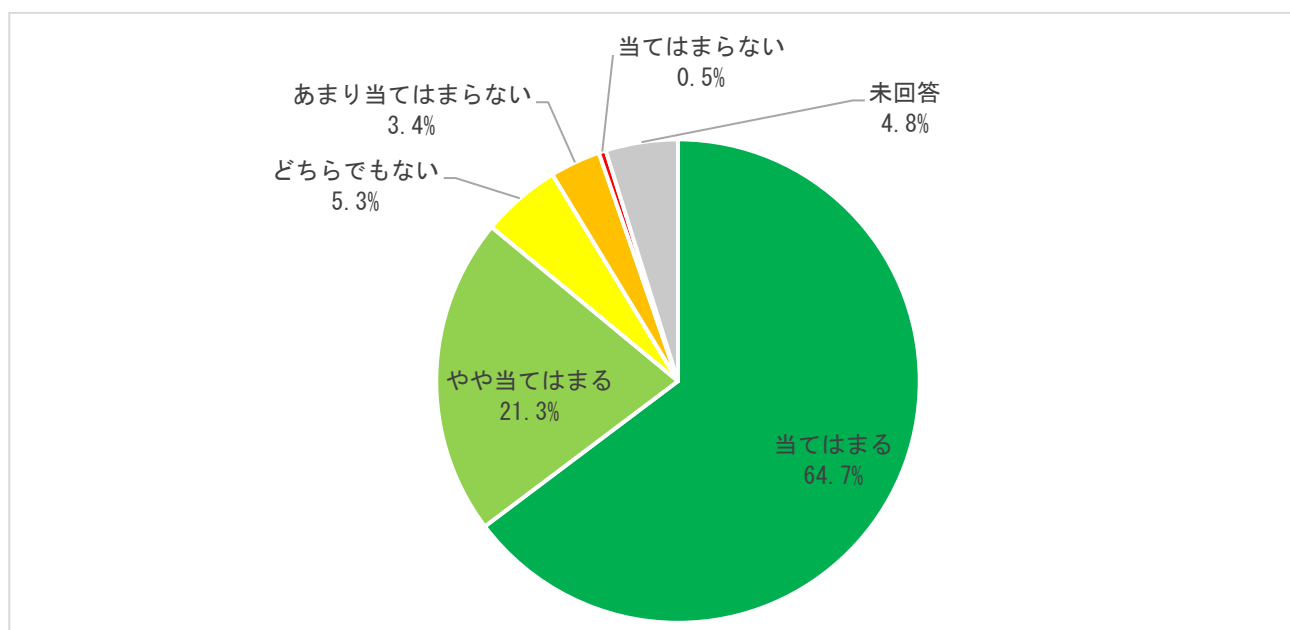


図 「次世代を育む環境づくりと人づくり」との繋がり

【記述回答】

回答理由の記述回答では、「当てはまる」と回答した団体においては、「子ども達が活動（イベントへの参加、活動への参加）をしているため、次世代の育成となっている」、という回答が最も多く見られました。また、「森の維持管理・再生、里山づくりは、継続的に次世代に活動を引き継いでいく必要があるので、継続的な活動が環境づくり・人づくりに繋がる」と答えた団体も多く見られました。具体的には、「生命の大切さ、生物多様性、自らの存在意義を感じることが可能となる」、「子ども達が、自然を大事にする大人になる」という内容が挙げられていました。一方で、「やや当てはまらない」「当てはまらない」と答えた団体は、子どもを対象とした活動を行っていないところが多く、「地域の子供が減少している」、「活動メンバーの高齢化が進んでおり、世代交代の問題がある」という課題を抱えているという内容の記述が見られました。

また、「次世代を育む環境づくりと人づくり」に対して企業に求めること、もしくは市民一人一人にできることは何だと思いませんか。」という設問においては、企業に求めることとして、「企業に対して継続的な資金援助を求める」という声が最も多く見られました。また、「助成するだけでなく、活動の成果、実態を見に来

てもらいたい」、「このテーマの重要性を企業から発信して欲しい」、「企業の社員に活動に参加してもらいたい」、「社員（働く世代）がこのような活動ができる制度を整えて欲しい」、という意見も複数見られました。一方で、今回の助成に関しては、感謝の声が多くありました。

市民一人一人にできることについては、「身近にある里山環境に興味・関心を持つ」、「自然を大切にする気持ちを持つ」、「自分ができることは何かを考え実践する、若しくは寄付をする」、という意見が多く見られました。また、次世代を担う子ども達に関する意見も多く、「子どもの時から身近な自然環境に触れる機会を持ち、意識を高めることや、小中学校やイベント等での環境教育を行うこと等が大切」という声が複数ありました。

② 市民活動に対する助成で重視している点

市民活動に対する助成で重視している点については、「ア.金額」が 95 団体で最も多く、次いで「イ.助成期間」が 91 団体という結果となりました。

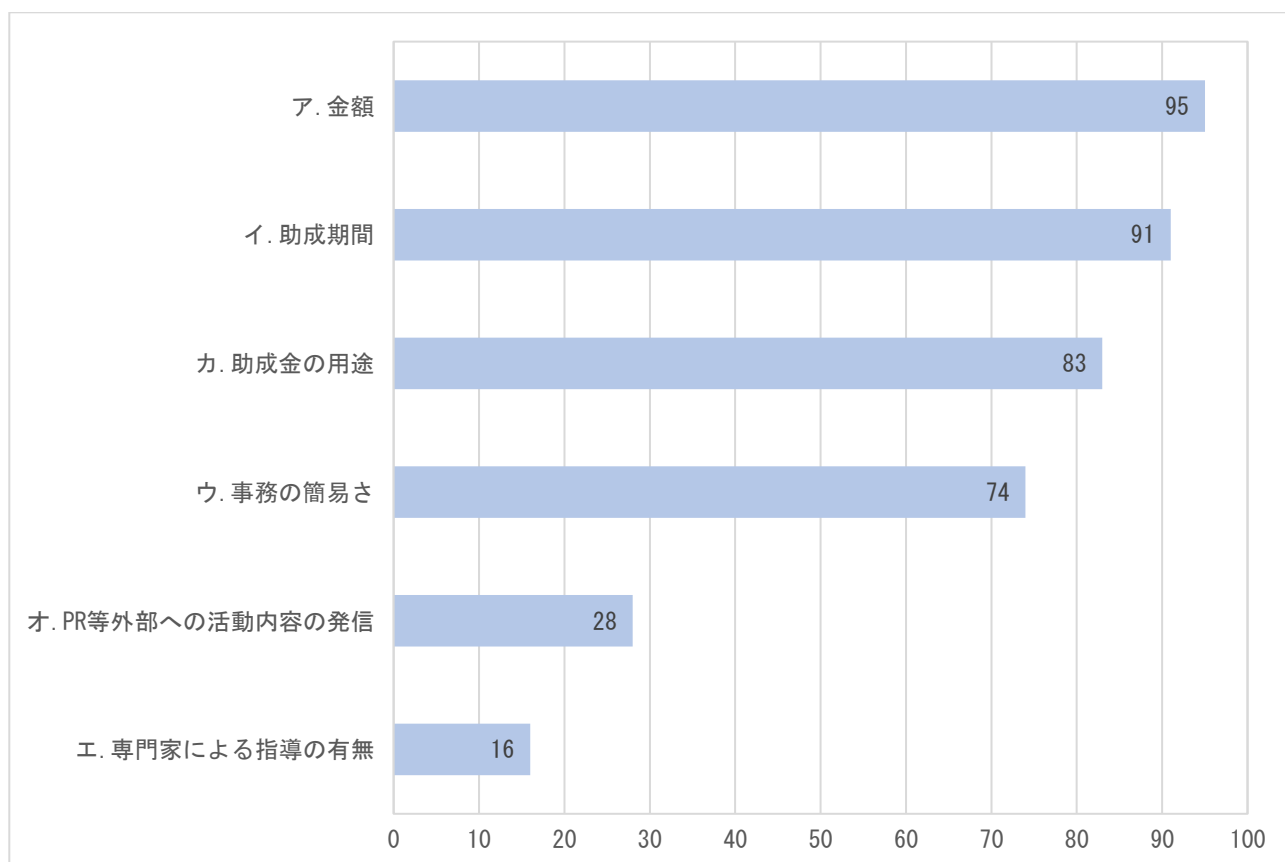


図 市民活動に対する助成で重視している点

【記述回答】

「主催者のサポートや関わりについて期待することはありますか。」という設問については、上記グラフが示すように、「助成期間」に関する意見が多く、短期間ではなく、長期間、継続的な支援を望む声が多く見られました。次いで、「助成金の用途」に関して、伐採の外部委託費、管理費、整備費、イベント費用、親睦会の経費、公園の維持管理費、大型機材購入費(軽トラなど)、人件費など、現在制限のある費用についても使用できるように検討をお願いしたいとの意見がありました。またこれらの取り組みの大切さや各団体の認知度を高めるため、この助成制度については、各団体の活動や成果について、ホームページ等でもっと広報してもらいたいとの声も複数見られました。

5) 意見・感想について

【記述回答】

意見・感想においては、この助成に対して感謝する意見が多く見られる中、助成の継続を求める声、これまでの設問の中で見られた改善点などについて再度言及している声もありました。また、アンケート自体に対する意見では、助成から年数が経っている団体においては、当時の担当者の不在やデータがない等の理由で回答が困難であったというものが多く、助成から年数が経っていない団体については、助成当時と現在の比較内容に差が生じないという内容のものが複数見られました。

3. 活動の持続性に関する分析結果

どのような団体が、活動を積極的に展開し、持続的であるかという視点から分析を行いました。

- ・対象：5年以上活動し、現在も活動を継続している団体
- ・定義：
 - ①年間述べ参加人数が設立時と変わらないか増えている団体
 - ②助成期間終了後の成果の設問で「当てはまる、やや当てはまる」と回答した団体

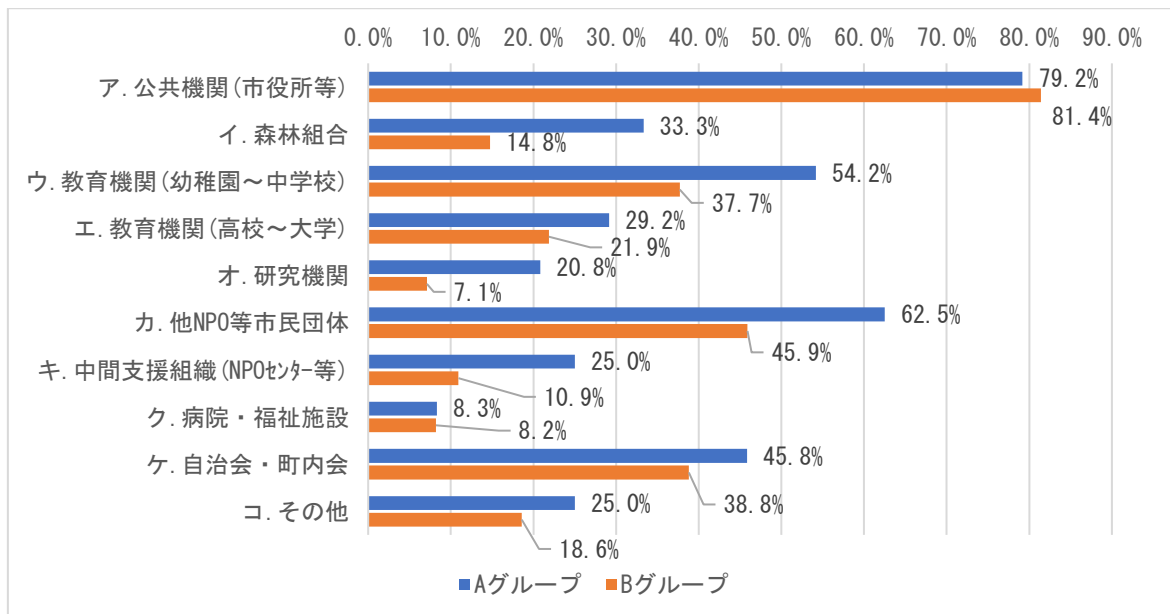
以上の定義で持続性のある団体を抽出したところ、24 団体となりました。

以下、文章やグラフにおいては、持続性のある団体を A グループ、それ以外を B グループとします。

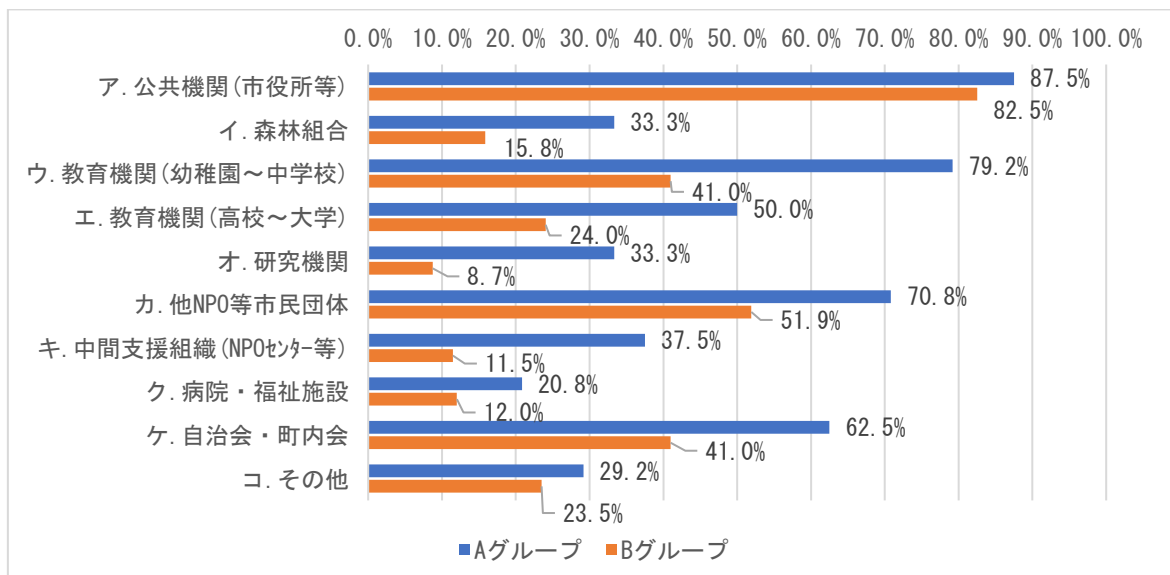
1) 関係・連携団体との関係性

A グループ、B グループで比較すると、助成当時、現在ともに A グループの方が、多岐にわたる種類の関連・連携団体と繋がっていることが明らかになりました。市役所等の公共機関においては、どちらのグループとも 8 割程度の団体は連携を取っていますが、教育機関や他 NPO 団体との連携については、A グループの方が多くの割合で連携していることから、持続的に活動していくためには、多岐にわたる組織との連携が重要であると考えられます。

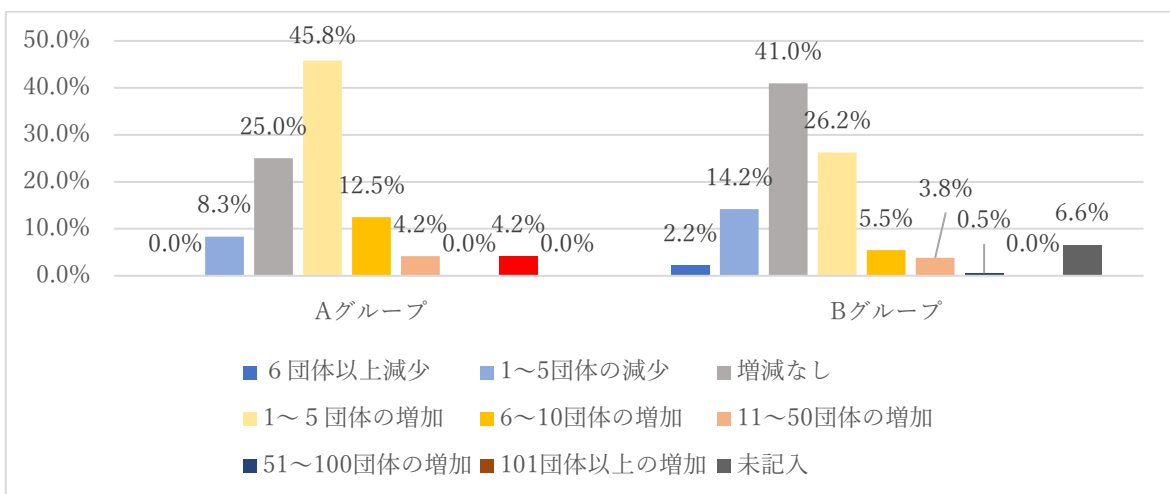
また、助成当時と現在の関係・連携団体の数の推移についても、A グループにおいては、5割以上の団体で、関連・連携団体が増加しており、Bグループより増加の割合が高い結果になりました。それにより、他組織との連携を増やすことと活動の持続性は関連していると考えられます。



図：関係・連携団体(助成当時)



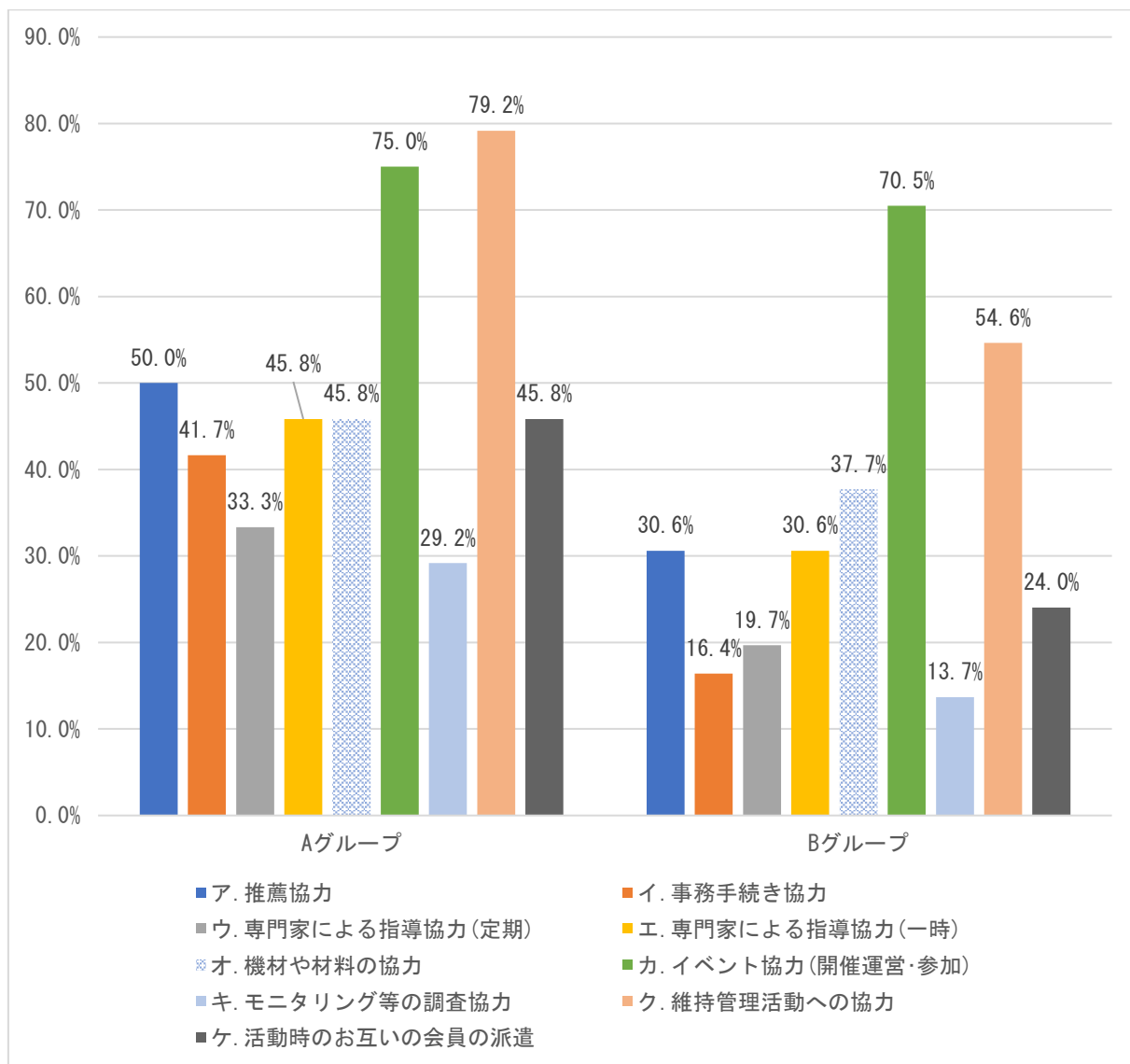
図：関係・連携団体(現在)



図：関係・連携団体数の増減数

2) 関係・連携団体の連携内容

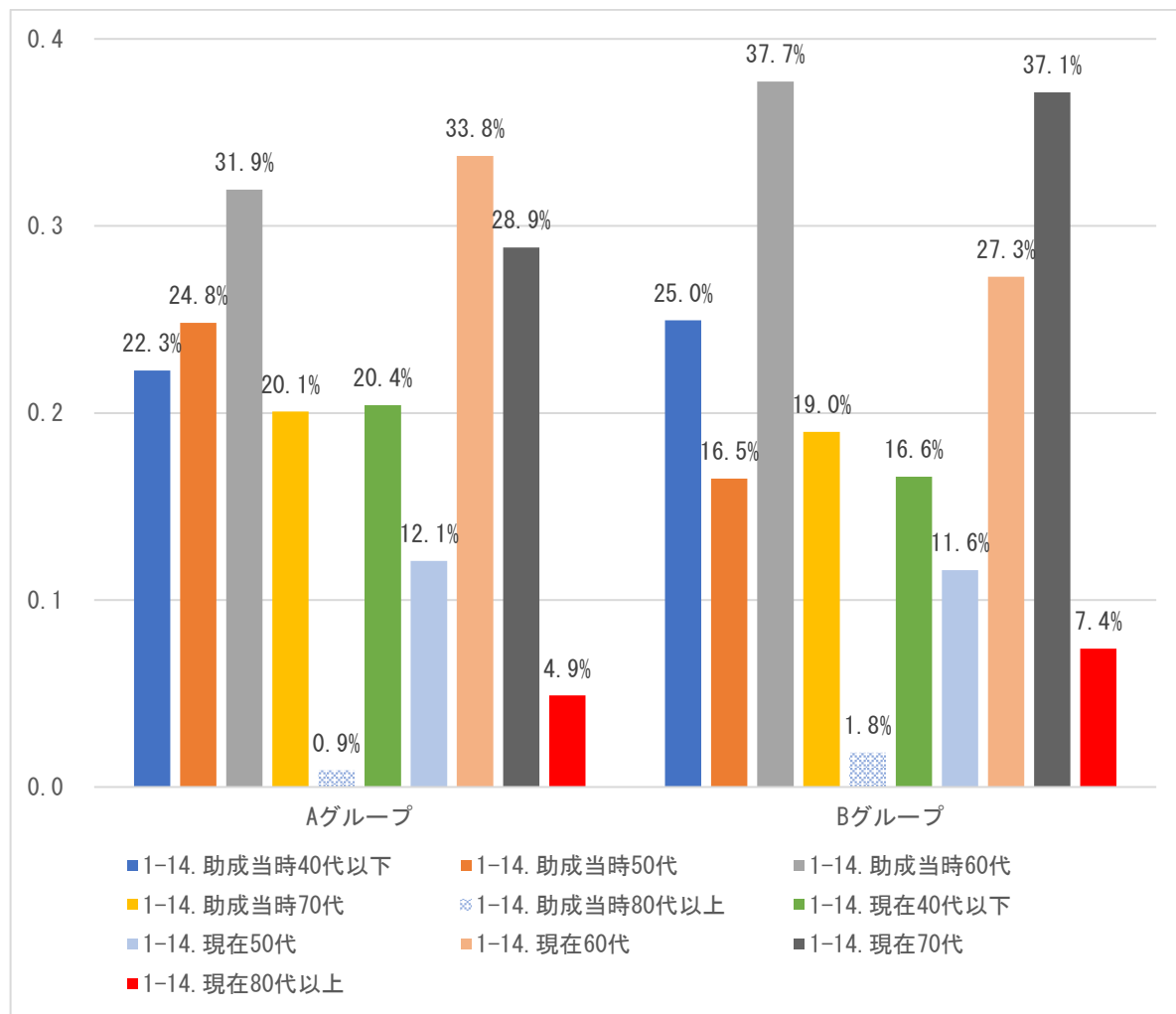
関係・連携団体の連携では、AグループとBグループを比較すると、Aグループの方が全体的に連携している項目が多いことがわかりました。共に「カ.イベント協力（開催運営・参加）」、「ク.維持管理活動への協力」が高い値ですが、BグループよりAグループの方が、「イ.事務手続き」、「ク.維持管理活動への協力」、「ケ.活動時のお互いの会員の派遣」を行っている割合が20%以上多い結果となりました。



図：関係・連携団体の連携内容（現在）

3) 年齢構成

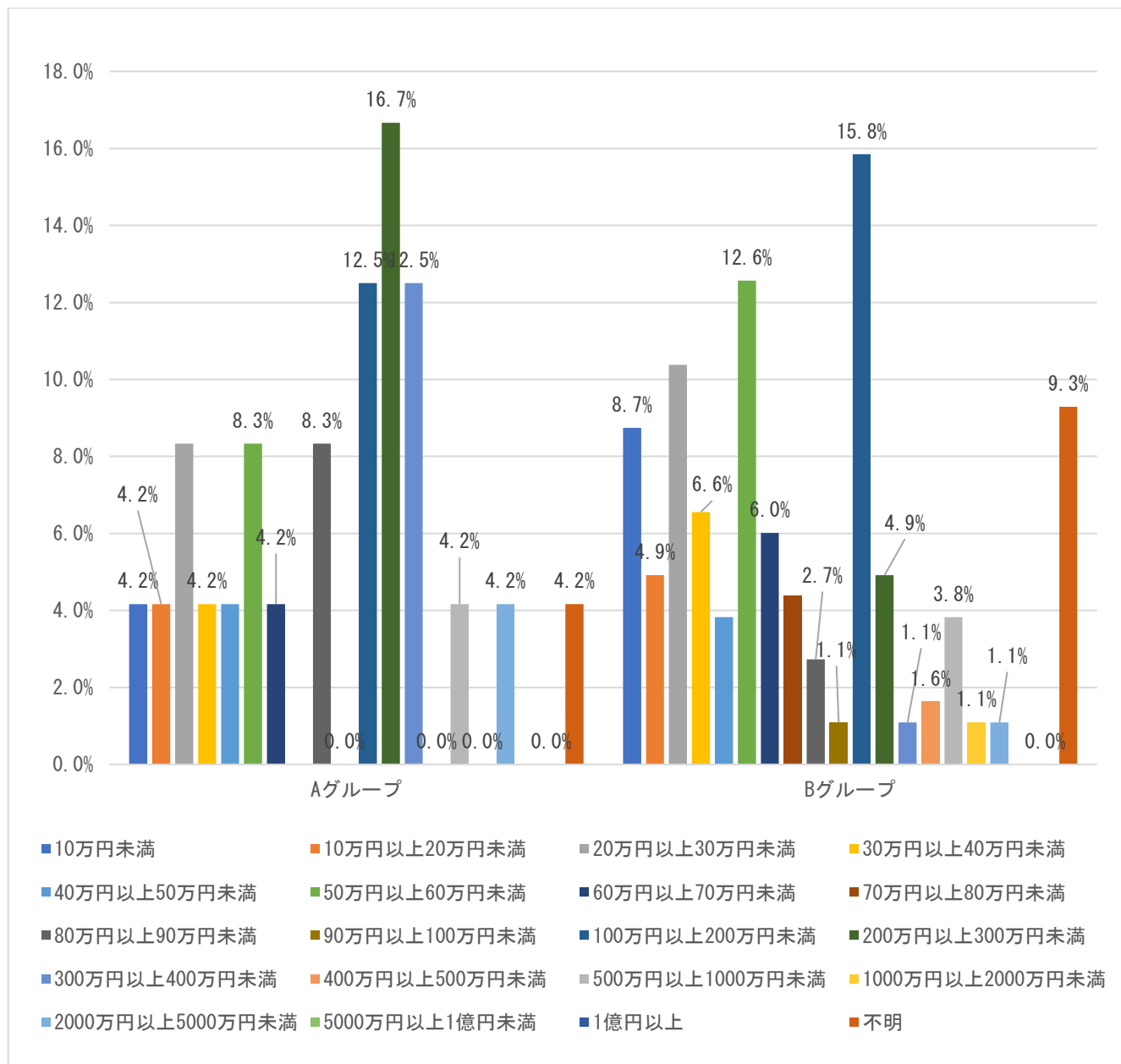
現在の各年代の総数の割合で、AグループとBグループを比較すると、現在の40代以下のメンバーは、Aグループ20.4%、Bグループ16.6%、50代メンバーは、Aグループ12.1%、Bグループ11.6%、60代メンバーは、Aグループ33.8%、Bグループ27.3%と、若い世代では、若干Aグループの方が高い値となっています。一方、現在の70代メンバーは、Aグループ28.9%、Bグループ37.1%、80代以上は、Aグループ4.9%、Bグループ7.4%と、Bグループの方が高い値となっています。Bグループでより高齢化が進んでいることが伺えます。



図：年齢構成（現在）

4) 事業規模

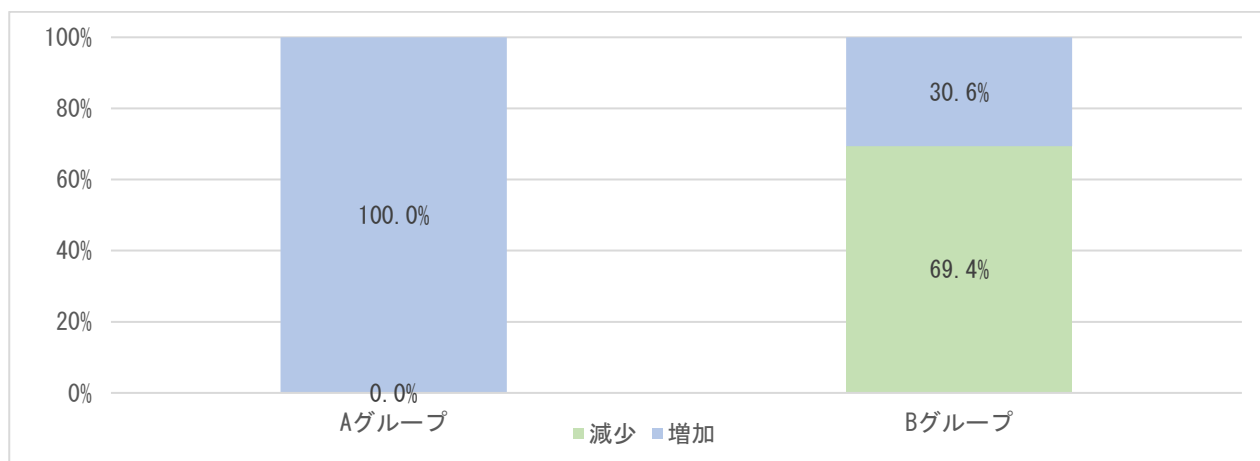
現在の事業規模を A グループ、B グループで比較すると、A グループは、100 万円以上の団体の割合が高く (A グループ 50%、B グループ 29.5%)、B グループは 100 万円以下の団体の割合が高い (A グループ 45.8%、B グループ 61.2%) ことがわかりました。



図：事業規模

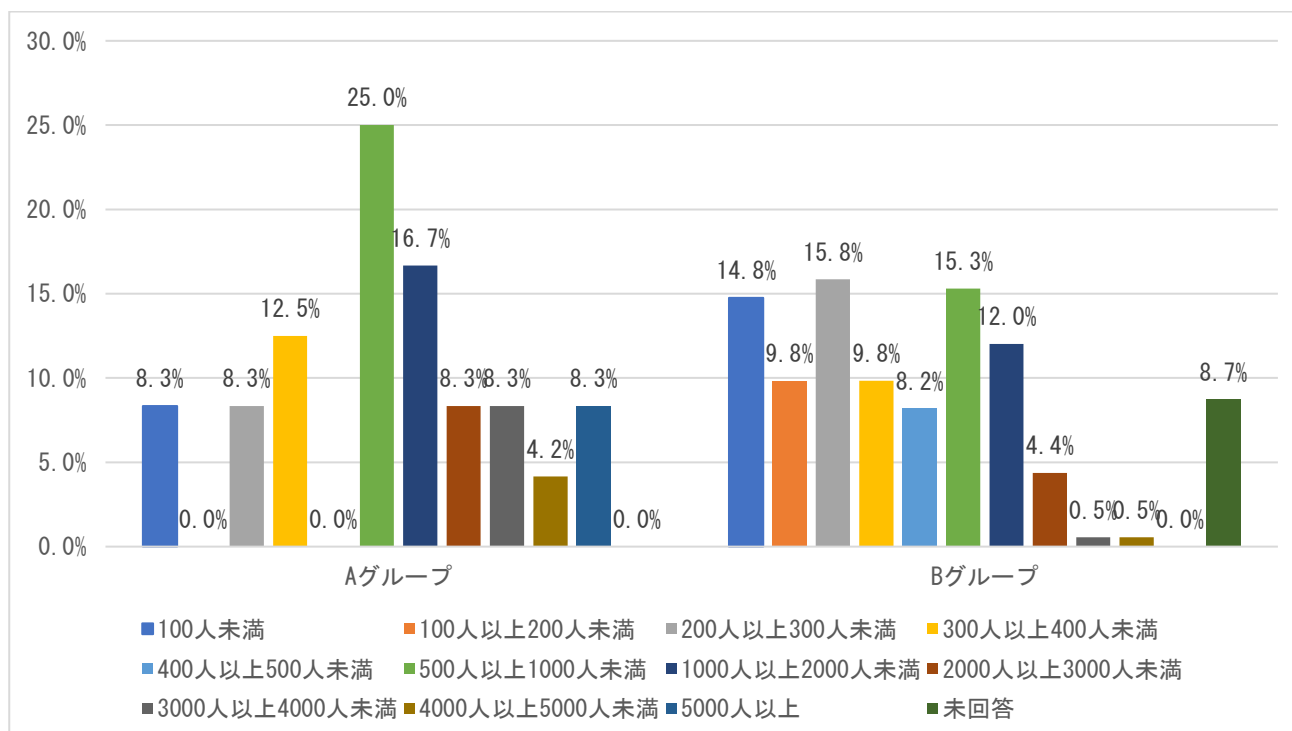
5) 年間延べ参加者数

年間延べ参加者数について、A グループと B グループで比較した結果、A グループでは全ての団体で増加していたのに対し、B グループでは、約 7 割が減少という結果となりました。年間延べ参加者数の増減が、活動の継続性に寄与していることが伺えます。



図：延べ参加者数（増減）

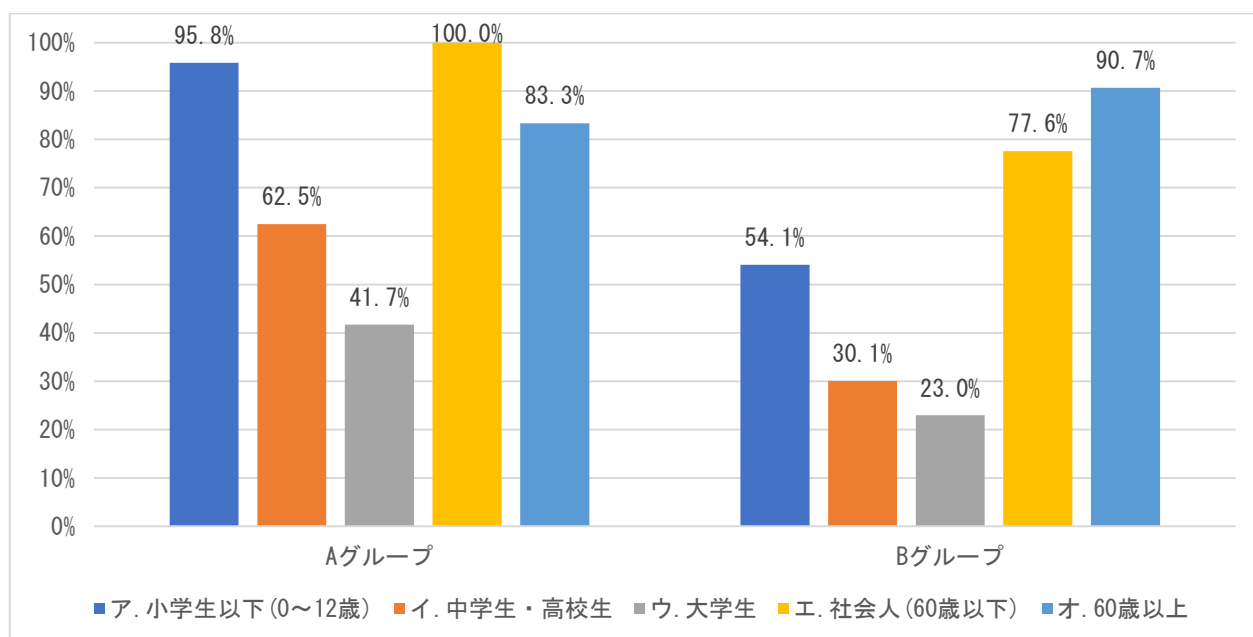
また、現在の年間延べ参加者数の規模を比較したところ、A グループは B グループよりも延べ参加者数が多い団体が多く、B グループは 300 人未満の団体が多いという結果となりました。よって、延べ参加者数に関しても、活動の継続性に寄与していることが伺えます。



図：延べ参加者数（現在）

6) 参加者

参加者について2つのグループを比較したところ、Aグループにおいて大学生以下の参加が多いのが顕著であり、Bグループの約2倍の団体で「ウ.大学生」以下の子供達が参加しているという結果となりました。特に、「ア.小学生」はほぼ全ての団体で参加していることがわかります。また、即戦力となる「エ.社会人(60歳以下)」もAグループでは、全ての団体で参加が見られます。一方、Bグループでは、「ア.小学生以下(0~12歳)」の参加は、約半分の団体でのみ行われています。これにより、大学生以下の子ども、即戦力となる社会人の参加が、活動の持続性に寄与しているということが伺えます。



図：参加者（現在）

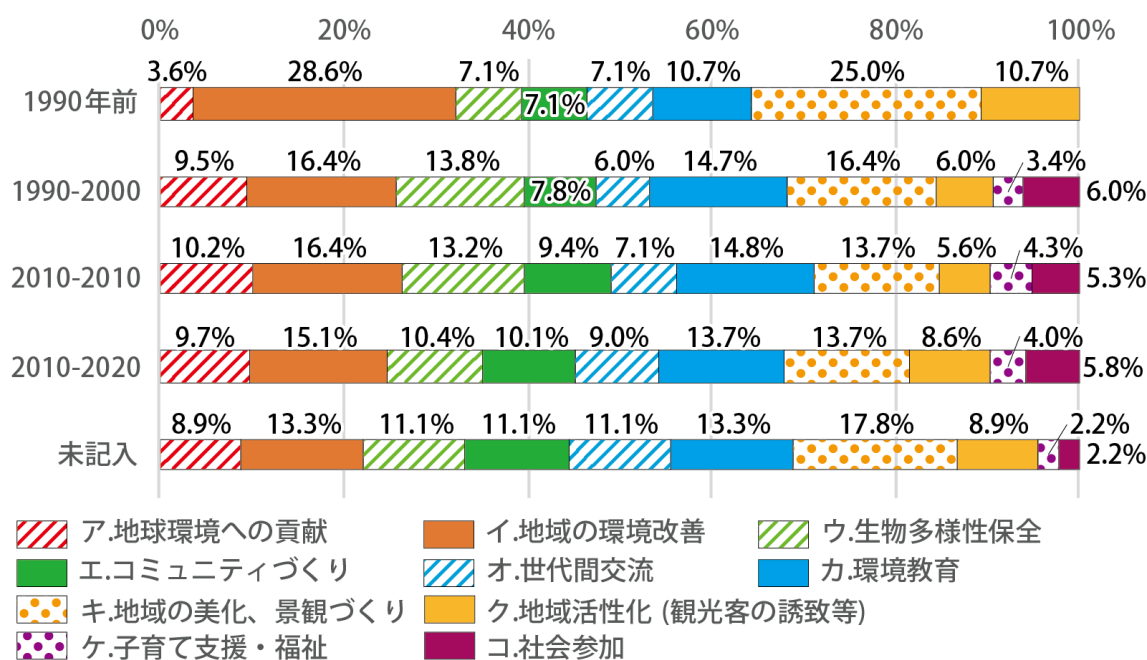
7) 社会環境の変化(活動開始年度別 活動目的)

活動の持続性に関する分析をする中で、社会環境の変化を把握することも必要と考え、活動開始年度と活動目的の関係性で分析を行いました。

その結果、「イ.地域の環境改善」、「キ.地域の美化、景観づくり」は、常に高い割合となっていますが、1990 年より前においては、「イ.地域の環境改善」、「キ.地域の美化、景観づくり」を占める割合がそれぞれ 25%以上と特に高いことに対し、年々これらの項目と他の項目の割合の差が少なくなってきました。

1990 年から 2010 年の傾向としては、「ア.地球環境への貢献」、「ウ.生物多様性保全」、「カ.環境教育」を目的とした活動が増えています。その背景には、1992 年の地球サミットによる気候変動枠組み条約や生物多様性条約への署名活動の開始等、身近な環境問題から地球レベルの環境問題へと視点が広がったことが影響していると考えられます。また、2002 年には、「持続可能な開発のための教育（ESD）の 10 年」が採決され、小学校においては「総合的な学習の時間」が本格導入され、「環境」に関する学習が実践されるようになりました。それにより、環境教育を目的とした活動も増えたと考えられます。

2010 年から現在までの傾向としては、コミュニティづくり、世代間交流などを目的とした活動が増加しており、昨今の関係性が希薄になってしまったコミュニティの活性化や、インターネットでは補いきれない交流が求められていると考えられます。また、地域でのコミュニティづくりをすることで、幅広い世代の交流が可能となり、共に地域（地球）の環境のため、次世代(子ども達)のために活動したい、という意識を共有することができれば、活動への参加者が増え、世代交代を図ることが可能となり、活動の持続性に繋がると考えられます。



図：活動開始年度別 活動目的

4. アンケート結果の総括

1) 活動実態の把握

今回のアンケート調査では、「みんなの森づくり活動」で支援する活動について、定性的、定量的にお答えいただきました。定性的なものとして、活動の目的、活動概要、活動場所の所有者、関係・連携団体との関わり(組織の種類、関わり方)、参加者の種類、年会費以外の収入の種類等について調査し、定量的なものとしては、面積、活動開始時期、年会費、年会費以外の収入(金額)、登録メンバー数、中核メンバー数、年齢構成、年間事業規模、年間活動回数、1 回当たりの活動時間、年間延べ参加者数、参加者の種類等について調査しました。定性的な回答に関しても回答いただいた 207 団体を母数にして割合等を出し、グラフを作成することで傾向を読み取ることができました。また定量的な調査の中では、助成当時、現在と 2 つの値を記載していただき、時間軸で変化を捉えることができました。

2) 「みんなの森づくり活動」による助成効果の把握

助成効果は、助成を受けて実施した活動期間中の成果と、期間が終了してからの効果について分けて質問することで、活動期間中の短期間の成果とその後継続的に活動が成長しているのかという点について考察することが可能となりました。各項目に 5 段階評価で達成度を記入してもらい、助成した団体の達成度の把握が可能となりました。

その結果、助成期間中において、95.2%(5 段階評価中、上位 2 段階)の団体が、活動全般を通じて、助成の成果を実感していると答えており、本助成に対する満足度が高いことが把握できました。また、助成期間後に関しては、82.6%の団体が、助成後も活動の年間計画を立て、計画的に進めているという結果となり、助成金によって基盤を整えることができ、その後の活動が安定して行われた団体が多いことが把握できました。

3) 活動における課題意識の把握

課題については、5 段階評価での回答と自由回答の両面から分析を行いました。どちらにおいても最も課題とされているのが、活動メンバーの高齢化、世代交代であり、92.8%(5 段階評価中、上位 2 段階)の団体が課題という認識を持っており、ほぼ全ての団体の課題であると把握できました。次に資金に関して課題としている意見が多く、86.5%(5 段階評価中、上位 2 段階)の団体が課題という認識を持っていることが把握できました。しかし、資金に関しては、会費の他、指定管理などの委託金や物販などで充実した団体もあり、団体によって差があることも把握できました。

4) 活動と「次世代を育む環境づくりと人づくり」との繋がりを把握

これまでの活動が、「次世代を育む環境づくりと人づくり」に繋がっているかについて、「当てはまる」と回答した団体が、64.7%と一番多く、次いで「やや当てはまる」が21.3%、合わせて86%の団体が繋がっていると認識していることが明らかになりました。

その理由としては、次世代を担うのは、現在の子ども達であり、子ども達への自然環境教育や子ども達がイベントに参加し、自ら学ぶ環境をつくるのが、環境づくり、人づくりである、との意見が多く見られました。既に実践している団体もありますが、実施していない団体からも、次世代（子ども達）への働きかけが、継続的な森林保全活動、里山保全活動に繋がっていく、と重要性を訴える声が続いていました。

以上から、今回助成した団体の活動は、「次世代を育む環境づくりと人づくり」に大きな繋がりがあることが把握できました。

5) 持続性のある活動の要因を把握

今回、持続性のある活動の要因を明らかにするためにクロス分析を行いました。まず、5年以上活動し、現在も活動を継続している団体を対象とし、その中で、年間延べ参加者人数が変わらないか増えている団体、助成期間終了後の成果の設問で「当てはまる、やや当てはまる」と回答した団体を「持続性のある活動」として抽出しました。

持続性のある活動とそれ以外で分析した結果、「関係・連携団体に関すること」が、持続性のある活動の要因の一つとして把握できました。具体的には、持続性のある活動の方が、助成期間後に関係・連携団体の数を増やしている傾向、また、教育機関や他NPO団体との連携が多い傾向が見られました。また連携内容としては、持続性のある活動では、維持管理活動への協力や活動時のお互いの会員の派遣を行っていることがわかりました。課題として把握した、活動メンバーの高齢化や世代交代を関係・連携団体と協力することで補っている可能性があると考えられます。

また、「年齢構成」についても、持続性のある活動の方が、高齢化の進みがやや遅く、また先ほどの関係・連携団体で見られたように、教育機関との連携が多く、子ども向けの活動も多いため、子どもとその保護者世代が会員になり、年齢層を下げている可能性があると考えられます。若い世代に活動に参加してもらう方法として、教育機関との連携も重要であることが把握できました。

最後に「年間延べ参加者数」、「参加者の種類」に特徴が見られました。持続性のある活動では、年間延べ参加者数が多い結果となり、その参加者の内容として大学生以下の参加者が多いのが顕著に見られました。やはり教育機関との連携等により、次世代(子ども)の参加が持続性のある活動に大きく起因しており、今後の持続的な活動にも大きな影響を与えていると考えられます。

「事業規模」に関しては、大きいほど活動の幅や継続性の確保につながるのはもちろんですが、会費以外での収入としては、指定管理等の事業委託等、公的助成金、

寄付金、謝礼金、民間補助金、自主財源（物販、イベント参加費）等が上がっており、全ての団体が共通して収入を増やすことは困難であることが想定できます。

これらの事より、なるべく多くの市民団体さんに同様に作用し、共通の課題解決の一助となる支援とするためには、以下のような情報発信・交流に関しての働きかけが必要だと考えられます。

- ①まずは市民団体個々について一般の方へ広く広報を実施すること。
- ②加えて教育機関や民間企業等に向け、信頼のできる情報発信を実施すること。
- ③さらには団体同士での情報交換や交流を実現することで、各団体で不足している知識やノウハウ、活動時の人員等を団体同士で流動的に補いあうこと。

総務省などにより「情報バリアフリー」が唱えられ久しく、WEB ツールが加速度的に普及する一方で、「みんなの森」の中核的メンバー層である高齢者層においては誰しもが等しくWEB ツールを扱えるとは限らず、関わり方の差、情報格差が生じています。しかしながら、WEB ツールの重要性や依存度の高まりは、今後も確実に進むことが予測されるため、WEB ツールを不得意とする方々にもWEB を通じての情報発信に挑戦するきっかけづくりや情報発信の支援が求められていると考えます。

5. 自由回答意見

アンケートの記述回答は以下の通りです。各設問中の記述回答の概要は、各設問の回答解説に記しています。

① 助成を受けて実施した活動期間中の成果について(活動を通じて実感した成果)

a. 活動全般を通じて、助成の成果を実感している

(助成金の活用)

- ・機材の購入により活動が効率的、以後の活動・会員拡大に有益となった。
(機具、道具(仮払い機、チェーンソー、防御服、子ども用ヘルメット)、動力機具の油、燃料代、タープ、シート、テント、長机、リーフレット、図鑑、ベンチや花壇のリニューアル)
- ・保管庫の改修ができ、作業が進んだ。
- ・新拠点が整備でき、効率的に作業ができるようになった。
- ・助成により、活動の基盤づくりができた。
- ・活動初期の助成金により活動を実施できた。
- ・活動資金が充足した。
- ・道路の補修ができ、作業が進んだ。
- ・助成金により、広報活動を行うことができ、教育機関との連携体制を構築できた。
- ・助成金により、植樹祭を実施でき、多くの子供達に参加してもらうことができた。
- ・助成金で竹林を開墾し、市民が親しむ場を作ることができた。
- ・助成金の金額が大きいことで、会員のやる気が向上した。
- ・遊休林野を活用した集落と連携した新ビジネスや新しい職業づくりの可能性が見えてきた。
- ・助成事業終了後も地域の里山を継続的に担う組織ができた。
- ・専門家に来ていただき、スタッフの知識が増えた。
- ・支援団体との絆が深まった。
- ・活動が評価されてきた
- ・事業が拡大している。
- ・東日本大震災により、活動の継続が危ぶまれたが、助成金により活動を継続できた。
- ・安定した活動計画を実施できた。
- ・助成で整備した「森」は現在も整備を進めている。雑木林の中の散策路を拡大整備、自転車通 路の整備、ツリークライミング対象木の管理、ベンチの設置、小湧水地の保護整備、ベンチの設置などを順次整備を継続中。現在もプレーパークとして整備を継続している。

(認知度の向上 広報活動の充実)

- ・新聞掲載やケーブルTV 放映により、知名度があがり、活動の参加者(会員、体験活動)が増えた。
- ・口コミにより、活動を知ってもらう機会となった。
- ・事前の予告記事を朝日新聞・千葉版に掲載され、また当日は地方新聞社2社から取材を受けるなどされるようになった。それにより、公園の知名度がアップした。
- ・企画が市報やテレビの取材を受けるなどし、広報の効果があつた。
- ・読売新聞全国紙に掲載された。国土交通大臣賞をいただき、参加者が増えてきた。
- ・活動を報道機関から取り上げられるようになった。
- ・地域や行政機関からの見方も変わり新聞等でも報道が増し、活動に対する高い社会的評価をいただいた。
- ・「花王・森づくり」の横断幕が、森づくりのアピールになっている。
- ・継続的美化活動に対し環境大臣表彰、水辺環境の保全と水資源の涵養に対し、国土交通大臣表彰のW受賞を得られた
- ・企業のCSR 活動の助成団体に認定していただいた。
- ・国・県・市から多くの賞を受賞した。

- ・行政から活動を依頼されるようになった。
- ・活動の成果が認知され、行政が動き出した。
- ・資金により広報活動、交流会を実施できた。

b. 緑地の維持・保全等に貢献できた

- ・雑木林の再生による、コミュニケーション林、学習林としての活用が可能となった。
- ・森林整備が進み、行政も動き出した
- ・里山・里庭を整理・整備することで、公園としてオープンした。
- ・里山の範囲を拡大できた。
- ・入山者が増えた。
- ・以前の森に再生された。
- ・250本のクヌギ・コナラの植林ができた。
- ・管理面積が拡大した。

c. 景観の保全・改善に貢献できた

- ・大都市の中に、5haの美しい里山景観を作ることができた。
- ・600本の桜を植えた。
- ・活動により、美しい森に変貌した。
- ・景観がよくなった。
- ・里山を桜で彩ることができた。
- ・地域が美化、活性化し、活動を継続している。
- ・桜を4000本植樹し、今も継続中。
- ・桜に対する評価が高くなった。
- ・棚田の景観が守られた。
- ・千本桜の達成に近づいた。
- ・アジサイを800本植樹、桜を200本植樹した。

d. 生物多様性の保全に貢献できた

- ・貴重種が復活した。
- ・埋蔵種子の発生が見られた。
- ・生物多様性の環境づくりに貢献できた。
- ・多様性の高い広葉樹林の造成の可能性が高まった。
- ・動植物の種類や個体数が増えた。

e. 子ども達の学びの機会をつくることができた

- ・自然と触れ合う機会が増えた。
- ・子ども達の環境意識を高めることができた。それにより、人間として成長がみられた。
- ・子ども達の自然環境教育の場を提供することができた。
- ・小学校の環境学習の場として提供することができた。
- ・放課後学童の一環として参加してもらうようになった。
- ・毎年環境教育を学校と提携できた。行政に信頼されてきた。
- ・多くの子供や親子、大学生の参加があった。
- ・保育園の子供達が訪れるようになった。
- ・小学校の出前授業(環境学習)を行うようになった。
- ・子育て関係団体の利用が増えた。
- ・小学校の総合学習の場として使用してもらうようになった。
- ・幼稚園、保育園、小学校等の遠足で立ち寄る場となっている。
- ・活動の自然観察会が、小学校の環境教育のカリキュラムとして実施されるようになった。

f. 介助など支援の必要な方の学びの場・交流の場の機会をつくることができた

- ・地域の福祉が向上した。
- ・地域のグループホームの職員や入居者の方との交流が増えた。
- ・各種老人施設の方が立ち寄り場となっている。車いすの方も来訪している。
- ・心身障害者の保護者の皆様から、参加本人に良き動きや農産物を自宅で一緒に食べるなどの行動（ノーマライゼーション）に変化があったとの言葉をいただいた。
- ・地域の方が福祉施設でのガーデン活動や講習会へ参加することで、たくさんの自然や利用者様と関わり、障害理解や地域の生態系の保護などを話し合う機会が増え、環境づくりをしていくコミュニティとなっている

g. 社会参加の機会が増えた

- ・市町村からの活動依頼が増えた。
- ・メンバーが増えた。
- ・子どもの教育、講演周辺の整備や観光、景観について行政に提言行動している。
- ・子ども達の父兄などのイベント参加が増えた。

h. 地域の賑わいが増した

- ・活動の場が新たな集いの機会となり、地域内外の方々とのコミュニケーションが増えた。
- ・市の土地をうまく利用・変化されたと表彰を賜れた
- ・地域の会員相互の親睦を深め、交流が盛んになった。
- ・樹林活動で地域の和が広がった。
- ・地域の人、子ども達も含め、活動を継続している。
- ・市とのパートナーシップに繋がった。
- ・住民が緑を楽しむようになった。
- ・憩いの場所が増えた。
- ・ウォーキングの場を提供できた。
- ・地域の方の交流が増え、関係が良好になった。
- ・地域住民から謝辞をもらっている。
- ・地域住民から、理解と感謝の言葉をかけてもらうようになった。
- ・市町村の方と交流できた。
- ・年間 1800 人の活動への参加者が訪れる森となった。
- ・街が活性化した。
- ・観察会への参加者が年々増加している。
- ・市民の来訪が増えた。
- ・地域から、応援の声/感謝の声、期待度・信頼度が増した
- ・所有者だけではなく、その地域全体で、地域にかかわる多くの人たちが関心を持つ機会が作れたことは、全体の意識の向上につながり、今後の活動の充実、継続・拡大につながった。
- ・伐採された
- ・間伐した常緑樹や竹が地域資源として利活用されるようになった。

② 助成期間が終了してからの効果について(変化の理由や変化した事項について)

a. 助成後も活動の年間計画を立て、計画的に進めている

- ・助成を受けるための作業の計画、結果の記録、金銭管理などが会の運営を行う上の基礎作りに役立った。
- ・助成を受け活動内容を具体化できた。
- ・約 7 年前までは、中期的視点を持たずに活動していたが、活動の目的、ミッションなどを整理し、対外的にも説明可能な形にしたため、対外的に組織としての顔を持つことができるようになった。
- ・活動報告を年次報告として、総会で作成するようになった。

- ・年間活動計画が円滑に進み、学校教育の充実できたが、会員の増加にはつながらない。
- ・助成後も当初計画通りの活動を進めており、事業規模は変わらない。
- ・当会は、最初の 10 年間で「植樹を通じ、自然を学ぶ日」として活動し、次の 10 年（現在）は「育樹を通じ」として樹木を育てる期間として活動しています。将来的には「活樹を通じ」として大きく育った樹木を活かしていく 30 年計画と長居スパンで事業を進めているため、国、県、市町村の協力のもと事業も認知されている。

b. 助成前に比べ、地域からの認知度が上がった

- ・新聞やテレビにて紹介され、地域外の方々、多く見学に来場、現在も 14 名の方に植樹を依頼される。毎年報道関係に PR をしています。
- ・継続して行うことにより、緑地の認知度が高くなってきている。
- ・樹木の生長と共に認知度は上昇していった。
- ・活動がマスコミその他を通じ、外部に情報発信される機会が増え、新規の入会者並びに公開イベント等での参加者増加に繋がった。
- ・様々な賞を受賞し、現在進める 20 のフィールド、23 のプロジェクトの殆どの活動が評価され、その他感謝状を頂いている
- ・継続した活動が支援者や支援団体からの信頼度・安心感を増している主な理由とを感じる。結果として、支援内容にも良い変化が見られる。(ex.支援額の増加)
- ・地域の情報誌やマスコミに取り上げられて、やりがいと充実感が出来た。
- ・「花王 K.K.のネームバリュー」が高く、行政や地域コミュニティにも認知され、活動の分野が大きく広がりました。
- ・他の市町村から育て方を指導していただきたいとの問い合わせがあります。
- ・より広く多くの人達をまねく、講習会ができ、認知度が上がった。それにより、より深く、活動にかかわれる人達が増え、活動内容が充実した。
- ・助成金にて実施した植樹祭が、市長・地元の行政区役員などの参加を得て実施したことが、マスコミ等により周知され、稲宮の森及び活動状況が周知され市民の関心が高まった。
- ・活動の継続によって、報道等を通じて地域社会の認知が上がった。
- ・花王の助成金決定（2017 年 5 月目録贈呈式）を長崎市に報告のために長崎市長（関係部長・課長同席）を表敬訪問し、助成決定内容の報告や長崎市の協力（いこいの里：あぐりの丘の無償借地）や今後の協力について依頼した。この模様が翌日の新聞や、地元テレビ局から放映され、多くの人にオーリーブ研究会の普及活動について PR することができた。また、市議会等でも取り上げられ、多くの人に感心を持ってもらうことが出来て、行政等との距離が縮まり、活動しやすい環境が整った。
- ・国や自治体、企業や公益法人などから助成を受けた実績は、その団体の認知度が上がり、社会的信用を高めることに役立っている。（松戸市内で豊かな森を管理している事例として取り上げられ、現地の環境調査した結果、2013 年に都市緑地法に基づく「特別緑地保全地区」の指定を受け、現在 1.7HA が将来にわたり保存されることになった。）
- ・森の整備を通して、市役所 近隣住民 会員同士の交流機会が飛躍的に増し、当団体の認知度が上昇している。
- ・少しずつマスコミ関係や官庁関係からの問い合わせが増えてきて上記の関係性が構築できて来たように思う。

c. 助成の後、事業規模は拡大傾向にある

- ・市との協働事業により、活動も大きく広がった。
- ・活動内容が変化したことに伴うものです、環境から地域作りに成長したことが要因となっています。
- ・助成後は、環境教育なども脱ゆとり等の影響もあり、下火となり、若い世代の関心も低くなっています。不特定多数の参加者を募ったイベントは、一時的な効果はあるが、継続的に続けるのは、活動メンバーの負担にもなり、事業的な効果には繋がりにくい。参加人数や活動メンバーが多いから良いというものではなく、本質的な活動ができるかどうかという視点で活動を捉え直した。環境の貴重さの把握を踏まえ、温泉街との連携による蟹殻プロジェクトや観光協会との着地型旅行の連携など、本当に良質な米づくりや環境型米づくりに理解のある県内外のオーナーが変わらずに米を購入し、評価をし続けてくれることで、活動費が安定的に入り、福井県立大学や福井大学との連携による新たな品種の開発等で、表彰されるなど、技術的・科学的なエビデンスや事業収支を見直しながら、量から質の向上を目指している。

d. 助成後、年間延べ参加者数は、増加傾向にある

- ・市内はもとより近郊からも訪問者が多い。
- ・活動メンバーは減少しつつあるが、イベントではたくさんの方に参加して頂いている。
- ・以前と比べて子供たちに接する機会が増加してきました。
- ・年々参加者数が増加傾向であったが、ここ数年は徐々に参加者数が減少傾向にある。自然体験を実施する団体が増え、選択肢が増えたこと、活動内容がマンネリ化していることが主な原因であると考えている。

e. 助成後、活動メンバー数は、増加傾向にある

- ・ボランティア講座を 20 年間行政と協力して継続し、会員を増やしている。
- ・助成後、活動参加者は微増したが、近年メンバー・住民の高齢化が進み、新たな活動メンバーが少ない。
- ・女性メンバーが少しずつ増えています。
- ・階段脇に掲示板を設置して、会の活動の広報に努めた結果、近隣住民の会への参加者が 4 名ほどあった。
- ・活動メンバーは多少増えましたが、高齢化は止まらず現在 71 歳です。何とか世代交代を図るべく活動を進めております。
- ・機材の充実は、会員の拡大に役立ちました。
- ・今までは会員資格は地域限定であったが、その範囲を広げたので遠方の会員も増えている。

f. 助成の後、活動内容が充実した

- ・新拠点が出来たことにより、全員が参加しやすくなった。活動場所への移動時間が短縮され、効率良く作業が出来るようになった。
- ・会員の意識が向上した
- ・助成金で必要用具を購入できたので、その後は、道具類も最小限の購入とし、会員の高齢化もあり、無理せず、楽しみながら活動しているので、ほぼ定着した。
- ・森の活動への助成金でチェーンソー、発電機、工作機械を買った。高齢化の会の会員の助成になっている。
- ・予算的に、機械購入・講習・保険等の充実。
- ・助成を受けたことは、ボランティア活動が 10 年間続き、現在も継続中であることの原動力となった事実が疑う余地がない。
- ・資材を提供して頂くことで、今までできなかった活動ができるようになった点は良かった。⇒次回に繋がらず単年度で終わるのが残念。
- ・助成によってその後の持続的活動が出来るようになり、充実した活動が維持できています。
- ・自走式草刈り機など機器、道具を揃えることができ、効率的に作業を行えるようになった。また効率が上がり、隣接の河川サイドの草原の草刈りなど整備範囲が広まり、森と草原が一体となり魅力が高まった。
- ・助成をしていただいてからは、この森をどのように活用するか、スタッフと話し合う機会が増え、昨年度からこの森で子ども達が遊べる行事を増やし、徐々にですが、この森が活用できてきていると感じています。

g. 助成後、外部の NPO 団体等や行政と交流が増えている

- ・助成後も他の団体の援助などで活動できた。
- ・地域や関係機関との連携などネットワークも広がっている。
- ・20 年近い活動への行政や他団体からの信頼が増した。
- ・小学校の教育とつながった活動は、PTA とともに継続している。大きな行事に地域参加を求めれば多数の参加がある。
- ・倶楽部員が高齢化で減少していく中、活動を維持していく上で大学や他の NPO との連携を充実させている必要性が高まり、その方向で進めていく中で、変化してきた。
- ・県、公益団体等からの支援、助成が得られた。活動に対する感謝状を受けることができた。村当局から森づくり用地に 1ha の提供と村民への啓発がすすめられた。
- ・上記のように官民一体となった 20 団体の連携がとれ継続している意識は大きい。
- ・県立自然博物館との共働関係が強化しました。
- ・日本さくらの会より 150 本のさくらを寄贈いただき、活動の増加と景観の保全、改善により効果が表れている。
- ・県や市が主催する、自然保全や環境関係の協議会等へのメンバー参加の依頼が増加している。

- ・群馬県や県緑化推進機構の皆様も気をかけていただき、各種事業にお呼びいただきました。また、率先した取り組みと、地域に根付いた活動により、団や指導員の各種表彰を受けるなど地道な活動が認められるきっかけとなりました。
- ・活動を精力的かつ継続的に実施し、それを広報することにより多くの企業、団体、行政などが我々の活動に理解を深め、協力や支援を申し出てくれている。
- ・市内の NPO 団体と連携した活動を実施したり、植樹活動を実施している他団体の活動に参加したりしている。特に今年度は岐阜県本巣町根尾の公民館との交流が実現し、国天然記念物・日本三大桜のひとつ「根尾谷淡墨桜」の実生の桜幼木の植樹を実施した。
- ・当法人の活動と実績が認められ、市役所との連携が、今まで以上にとれるようになってきたこと。

h. その他

- ・活動の結果は初期の目的を達成することができた。これらの活動を発信してさらに内容の充実を計りたいと考えているが、現体制ではその能力もなくなっている。
- ・作業は認知され、労ってくださる方々は多くおられますが、作業に参加される方は少ない。若い方々は働くことが必要な社会でボランティアには、参加できないのだと思う。
- ・維持管理の為に資金の確保が必要である。
- ・苗木が鹿の食害により被害があり、捕食の必要性が生じている。
- ・少子高齢化の時代にあって、当会会員の高齢化が進み、植樹等の地味な活動に若い人々が参加しなくなって来ている。会のスタッフの努力が足りないかもしれない。
- ・地域の活性化や自然環境の保全にはやはりある程度の金額が必要である。継続的に助成を受ける必要があるが、事務的に多忙となってしまう。長期的に持続可能な活動を展開するのはやはり難しい。
- ・申し訳ないが、上記「やや当てはまる」7 項目とも、助成がきっかけ、または主な理由とは考えにくいのが現実です。
- ・これらの活動期間中には、当会が身障者 6 人を受け入れて毎日この人達が大いに働いてくれ、予想以上に仕事が進んだ。今はこの人達が全員自立して社会へ出たので、その後の活動が小さくなっている。
- ・NPO 活動を終了したので、今後の維持をどうするか。次世代に引き継ぐ方法を考えるべきだ。
- ・官民の中に関心が増してきている。
- ・今までは労務費の支給できる助成事業はなかった。しかし、今年から「森林、山村多面的機能発揮対策交付金」にて 3 年継続事業にて森林 3.5ha を実施する。人件費 1 日 5000 円となる。
- ・助成後数年は参加人数も増えたが、団体内の高齢化や若年層の転勤などで会員数の減と中核メンバーの減により、活動数が激減した。
- ・行政の財政支援が減少してきたこと。”
- ・会員の年齢も上がってきたことで、年々の活動の内、重労働的なものができなくなっている。会員の高齢化を機械の導入により補っている。草刈り機や電動運搬機を活用して作業の効率化を図っている。
- ・同公園に訪れる人は平成 30 年度ベースで、推計約 12, 000 人程度で、助成前より年々増加しています。その主な理由としては、助成前は未開放のエリア（ふじ池及びトンボ池）があったが、そのエリアを全面的に開放したことなどが考えられます。
- ・里山活動は継続して行なう事が大切であり、活動を続けてゆくことにより地域から認められ、協力者や参加者が増えてゆくものと思います。里山は整備を止めてしまうと 1 年もたたないうちに荒れてしまう事でしょう。周りには手入れされず荒れてゆく里山がたくさんあります。手を出したい気持ちもありますが、結城里山の会の会員は現在 21 名で限られた労力ですので上げ過ぎてしまうと全てが中途半端になってしまいます。現在の場所を更に良くして多くの人達が訪れるように地道に進めて行きます。私達も年々齢を取ってゆきますし、体力も落ちてきます。里山活動に賛同する仲間を増やし、子供達やその父兄達が里山を楽しみながら大切さを理解し、里山ファンとして次の世代に育てゆく事、繋げてゆくことに力を注いで行きます。
- ・森の所有者の高齢化や相続問題に伴い、森の存続が難しくなっている。
- ・幼児から小学生のいる家族が会員の多くを占めているが、周辺の子どもの数が減ってきたため、家族で会員が減少している。

③ 専門家の指導や知見が必要だと思う具体的な事

a. 個人の情報になってしまうため、機構のネットワークによる文献・情報や講師派遣などの協力を得たい

- ・毎年、安全のための研修、外部講師による講演を通じて会員の技能レベルの向上を図っていますが、それを怠ると慢心や自己流が生じる恐れもあります。行政の協力を引き出すように努めていますが、行政の職員は人事異動が多く、知見・技能の蓄積が必ずしも高くないと感ずることがあります。現在は、会の幹事が個人的に得た情報から取捨選択的に講師をお願いしています。貴機構のネットワークにより文献・情報や講師派遣などの協力が得られればありがたいと思います。

b. 専門的な知識を必要としている

- ・毎年、安全のための研修、外部講師による講演を通じて会員の技能レベルの向上を図っていますが、それを怠ると慢心や自己流が生じる恐れもあります。行政の協力を引き出すように努めていますが、行政の職員は人事異動が多く、知見・技能の蓄積が必ずしも高くないと感ずることがあります。現在は、会の幹事が個人的に得た情報から取捨選択的に講師をお願いしています。貴機構のネットワークにより文献・情報や講師派遣などの協力が得られればありがたいと思います。
- ・林業に対し経験のない集団なので、専門的な指導が今後必要かと思う。（森の樹木のこと、管理の仕方について）
- ・専門家による活動場所や活動支援等を教えてほしい。
- ・活動場所の動植物の詳細な分類や生物の多様性を高めるための幅広い知識が必要。
- ・固有種、希少種の保護に際し、「持ち込まない」「持ち出さない」を基調とした活動を行っているが、希少種のニホンバラタナゴ育種の池で、その卵を狙う本メダカの増殖が見られる。ナラ枯れで荒廃した里山再生に向けた長期的ビジョンが求められる。
- ・この郊外施設での活動が今問題となっている地球温暖化、CO2 削減に具体的にどうリンクしているのか。目に見える形、数値化できるような団体、専門家のアドバイスや話などがあると良いと思っています。
- ・植物園に適した植物の育成
- ・今後、植林を行い、多層林にすることが急務である。具体的に植林の方法、苗木の選定など専門家から指導を受ける必要が生ずると考えている。
- ・植種の選定・維持管理の方法鹿の食害防止策
- ・マツ苗木育成について、従来、ショウロ(松露)菌接種による菌根菌の動きに注目してきたが、今後更にその効果が高められるような技術的指導を期待している。
- ・専門家が若者達の指導のための講義等を開催すると良いと思います。
- ・造園の専門性のあるメンバーはいるが、建築などの専門家がいらない。自然観察のスペシャリストもほしい。
- ・森林環境教育・森林 ESD について先進事例や手法を知りたい。
- ・安全講習の講師と開催
- ・自然を解説する際には、アカデミックな情報のみならず、地域の伝統文化の中で培われた知識も必要となるため、民族的な専門家の方の知見が欲しいと思う時がある。
- ・樹木医の専門的なアドバイス
- ・台風等の大きな被害もあり、その後の対策や病害虫が出た場合の対処方など。
- ・子どもたちへの環境教育において、より正しいことを伝えていくには、専門家の知識や指導が必要である。
- ・保全活動に対する反対の意見が少なからずあるため、専門的な知識が必要である。
- ・植物に関する知見が欲しい。特に子供たちへの教育に森林環境にてきた遊び、学習等の専門的な知見が欲しい。その理由は取り組んでいる我々のメンバーがいずれも専門知識に乏しいため。素人集団です。衰)
- ・「自然の保全」といっても、鳥、昆虫、植物、獣 etc の専門家によっても意見が異なり、会員の中にもいろんな意見があり、まとめることなどかなり難題である。しかし、決めて進めていくうえで、何かの権威 or 多数意見にすがるしかない状況か？と。
- ・緑化活動において広葉樹林の「専門家」は見当たらなかった。おられるなら指導を受けたい。
- ・組織運営の手法として、私達のような活動実態の団体には、どのような手法が適切なのか、いろいろ探っている状況。特に事務局員のモチベーションの維持については、学んでいきたい。
- ・都市緑地の特徴として民家に隣接しており、長年放置のため、樹高だけが高くなり、気象害を考えると危険、対処には専門家の技術支援が必要。
- ・植林事業と環境保全、景観創造の意義、効果を専門的立場で当局、村民の意識改革のために啓発をして欲しい。村全体の振興策にたいするアドバイス、計画、立案。

- ・我々の活動は、形を造るハードの面で成果を上げているが、これを PR し多くの来場者を呼びよせるソフト面の NOW HOW を持たない。そのための専門家、若しくは若い人の力が必要である。
- ・都市近郊の緑地の保全にあたり、生物の多様性と活動そのものも多様化しており、そのあたりの今後への指針が確立しづらい。どう方向づけるか課題となっている。
- ・活動場所に 2~3 年前から出沒するようになったイノシシ対策について
- ・危険に対する対処法、リスクマネジメントなどの点で必要不可欠だと思います。
- ・森に親しむ活動は、NPO 指導者が来ていただいた時、木の種類、実や葉についても子どもたちに直接話していただき、興味が深まった。森と対する新しい考え方を聞くことができた。
- ・近年、地域住民により社会との連帯や奉仕活動に関する意識の希薄化が進んでいる中で、ボランティア活動を推進するための方策・知見について知りたい。
- ・自然環境維持、自然そのものに対しての深い知識での、学習指導・体験指導者（若手）が必要。
- ・経営の専門家や運営の専門家にしっかりと入ってみたい。
- ・苗木育成のための接木、挿し木の成果が上がっていない。技術の習得が課題である。
- ・植樹の知識が劣っており、一度専門家の指導を受けた時に従来の考え方がまちがっていたことに衝撃を受け、考え方を變更し対応した。
- ・イベント内容で、自分達より特技がある人が身近にいる内容。
- ・樹木に関する知識をあげ、自分たちで作った森を維持するための管理方法を学びたい気持ちを活かしていきたいと考える。
- ・ナラガレについての専門家の知見が必要です。すでに被害が出てきています。
- ・伐採樹木の活用の課題において、当該樹木の葉、樹皮などの成分分析
- ・活動域内に棲息する微生物の活用
- ・自然環境の持続のために植生管理として、動植物に関するモニタリングを定期的、継続的に実施し、そのモニタリング方法や管理方法について専門家の助言などが必要だと思います。その具体的な一つとして、湿地環境や希少湿生植物用の保全・再生について指導を仰ぐこと。
- ・里山林（向山）の植生調査
- ・地質のことや生態系の専門家の知見をもっと学びたい。
- ・新規に活動に参加する人を募るアイディアや工夫の提案
- ・我々の間伐作業は、主に低木、細い木や真直ぐ上に伸びていない木（斜めに倒れている木）などを伐採していますが、太い木は伐採していません。残した太い木がより太くなれば我々の手には負えなくなると考えられます。そこで、花の咲く木や実の生る木を残しつつ、太い木の間伐など、総合的な間伐についての考え方を専門家に指導を受けたらどうかと考えます。
- ・指導については非常に必要だと思っています。団体活動については色々な課題がありますが、幅広い知見を持った方にアドバイスを頂けること重要です。芝桜のケースでは病害によって枯れたケースがあり、県方にも来ていただいて病気の原因などをお聞きして、カビで枯れていることを教えていただきました。
- ・森林内の植生や生物について専門的な知識が不足しておりアドバイザーが必要かと思われます
- ・森づくりには、現地の土壌や水分などの状況判断、その地に適した樹木の選択、長期間にわたる植栽後の雪害や害獣被害などの対策などが求められる。とくに長い経験を持つ地元の林業家のアドバイスは貴重。
- ・人工的ではない、自然植生豊かな森を創成することを目指しているが、どの程度自然豊かであるのか、植生、昆虫、野鳥、小動物など自然環境を専門家に実際に調査していただき、どのような整備活動を実施すべきかアドバイスをいただきたい。併せて、その結果データ、所見にて自然豊かなことを実証でき、外部に対して発信できる
- ・子どもたちや市民への活動を報告する魅力的な会やイベントを開きたい。会員外からの応援を期待している。
- ・大樹特に広葉樹の架かり木の処理などで専門家の指導が必要である。また、樹木調査はある程度助成金で実施できたが、草本類の調査が未実施で専門家の治験が必要と考える。
- ・環境教育分野全般について専門的な知見が必要な分野ですので、樹木・排出ガス・宇宙など各分野でスタッフの派遣や講師派遣の相談窓口などがあり、紹介の仕組みまでができていると指導員や学校も助かると思います。
- ・荒れた山林の保全方法、地球温暖化対策として里地里山でできること等
- ・大学の教授から専門的な保全作業についてガイドラインが出たことは、保全を進めるうえで有意義でした。その指針のもとに、活動計画を進めています。
- ・専門家の指導がないと、作業や管理が自己満足で終わり、安全や効率などの改善が進まない。

- 当会の会員は樹木の伐倒に関する知識と経験はあるが、植樹・植栽に関する知識と経験が不足していると思う。今回の花王助成では、植樹・植栽の知識と経験を積むことが必要と感じている。次世代への引き継ぎが期待できそうな小学生を対象にした植樹イベントは初めてのことで未知のことばかりであるが、自然が好きと感じてくれる小学生を育てたいとの思いがある。特に、苗木のことに關しては種苗共同組合の専門家に伺って、目から鱗の様相だった。また、植樹の時期については人間の活動の都合ではなく木の都合に合わせなくてはならないという。更に、林内で育つ野草に関するにも同様に、野草が育つ環境を重視しないといけない。
- 植物の保護（特に希少植物や群生植物について）と整備の仕方は、現在は植物に詳しい先生に聞いたりして行なっている。作業機材の手入れは、現在は機材に詳しい会員を中心にしてその指導で担当機材の手入れや保種点検を行なっている
- 病害虫に傷つけられた樹木や、古木となったものの手当ては慎重にやらなければならないが、会員の中には詳しい知識を持った人がいないので、専門家の指導をいただいて適切な処置をした方が良いと思う場合が多い。
- 公園内の動植物の実態把握の調査や維持方法等、専門家の知見が必要と考えている。
- 専門家が里山保全や、地域の自然環境保全が必要であるという科学的根拠、明確な理由を行政や市民に広く、わかりやすく普及させてほしい。特に、谷津、斜面林、水田の保全など生物多様性を重視したまちづくりが今後の課題になる。その必要性を進めていく専門家が少ない。また、目先の効率にとらわれ、50年先、100年先を見通した現在のまちづくり対策が必要であり、まちづくりの専門家がいない。人口減少、税収の減少を踏まえ、地域の農業や経済をどうしていくか、さらに残すべき自然をどう利用し、保全していくかが、今後の課題となる。
- 今後、継続して活動して行くためには、この森の豊かな山野層の保護・管理技術、および低湿地帯の水生生物（ヒキガエル、ホタル等）の保護観察活動の必要があり、そのためには長期間に亘る専門家の指導や知見を是非必要といたします。
- 馬を使った森づくりを実施しているため、馬搬の技術を継承など専門家の指導が必要だと感じる。
- 森全体の健康診断、樹木や草花の維持管理策などの適正な計画書の作成が必要と考えている。
- 植樹場所の環境調査、セミナーや講習会などの実施、巨老木の保護・育成
- 森林の管理方針に対する専門家のアドバイスや「ガンピ」の育成に関する専門家のアドバイスは必要。
- ①桜の病害虫に対する駆除や消毒の方法、種類、時期等の知識。肥料についても同じように種類や適時など効率的な方法。 ②桜が大きく生長したことに対する整枝活動や剪定の時期、方法等。 ③支障木伐採における伐採の作業要綱、注意点。
- 里山の維持管理における下草刈り、樹木の伐採などにおいて、生態系、植生、森林環境に対する知識、技術など多くの専門家の支援が必要です。又、間伐材の活用などにおいて、製材技術、木工技術など、専門技術者の支援が不可欠です。
市民の森での子供たちの体験イベントには、プレイワーカーなどの支援が必要です。
- しだれ桜の枝の選定や支柱の設置等のアドバイスや高いところの作業になるので専門家が必要になる。
- ボランティア活動の運営ノウハウ(桜の育樹技術については、樹木医を頼りにすることもできるが、会員の実務によつての育樹ノウハウが醸成されてきた。除草での薬剤使用については見識が異なり、桜が枯れることもある。総じて、桜の会員同士での「桜の育樹管理」の技術にバラツキがあり、会員相互の意見交換や共通認識も必要と考える。
- 樹木医等に相談できる窓口が必要だと思う。
①ナラ枯れ被害等に対処する方法
②エドヒガンの実生の育て方
③台風等で倒れた倒木の処理及び萌芽再生の実施方法等”
- 動植物の調査での識別、分類。森林作業の技術の取得。
- 植物の専門家による管理指導。育成木や伐採木の選別方法、森の育成方法など、苗木の育て方など専門家の指導が必要だと感じました。
- 生態系を考えた間伐の仕方、間伐材の廃棄の仕方、活用の仕方、目たての仕方や木の倒し方を読み取る力、木の組み方やロープワーク等、専門的な方の指導と知見が必要である。継承していかない弱さが、学校での活動にはある。幸い、本校は大学の付属なので専門的な立場の方がおられたから、専門的知見が得られやすかったという利点はあったと思う。
- 土壌の水質検査や植栽した苗木のモニタリング調査などは、機材の選定も含めて有識者による指導の必要性を感じる。
- 自然観察などの場においてはその知識が必須。

- ・樹林地帯を間伐することや、植樹することは単純ではなく、一定の技術を要する。すなわち樹木の伐採には、伐採をおこなうべき樹木と、そうではない樹木の区別が必要である。
- ・植樹の知識が必要。陽光桜、アジサイの植樹に際しては一応今までの経験で実施しているが、本来専門家のアドバイがあればもっと有効に対処ができるのではと思う。
- ・野生生物の知識。フィールド内には多くの野生生物が生息しており、クマタカやギフチョウなどの保護すべき希少な野生生物も生息していることから、その保護のためには専門家の指導や知見が必要。
- ・自然体験活動や環境学習を進める上で、プログラムづくりや安全管理を含め専門家の指導や知見が必要。
- ・活動の方向性や活動内容への助言や指導（専門家の科学的根拠に伴う指導がないと、声の大きな人物の思い込みによる考えで保全活動が進み、本来の目標を達成する取り組みからかけ離れたものになる恐れがある。）
- ・森や里山の保全活動が、連帯化し継続していくには、まちづくりという発想が欠かせません。私達の活動が、日本の里山を活かした環境保全都市の誕生をめざすランドデザインを提示でき、具体的な活動をうながせるような知見が必要です。
- ・どのような森にするか目標像の設定。（天王山の利用及び利用目的について）
 1. 小学生の環境学習の場としての利用について
 2. 伐採した竹林のモニタリング ～植生の変化を追跡・記録する～
 3. 竹林伐採地における管理施策が植生にあたる影響について
- ・技術の習得、安全対策の習得。（チェーンソー等の機材）
- ・高所作業車等の特殊機械の操作。

c. 行政が指導や知見を示さない

- ・過去、あまり積極的でなかった行政の担当部署が現在、協力的になってくれたが、その指導や知見をあまり示してくれない。また、「植樹」という方法を転換し、「実生法によるエノキ・ムクノキ林の再生を試みようとしているが、自らが試作して知見や方法を得ようとしている。

d. 行政の指導を受けている

- ・当会は素人の集団のため横浜市環境創造局主催の研修会等に積極的に参加、知識の向上や体験を行っている。引き続き、研修会参加や栗間家の指導を受け、知識、技術面の向上を図っていく必要がある。
- ・市の専門家から、指導、協力、アドバイスをいただいております。
- ・里山なので樹木の種類、生物関係には限りがあり、植林や萌芽更新について行政と打ち合わせ中。
- ・いつも必要です。団体発足時は京都府の技術指導を受けていました。また関係団体の研修などは積極的に参加していました。ただ、途中入会の会員や若い世代の方々の研修は必要です。機会あるごとに関係団体の研修など積極的に情報収集して学ぶ機会を得ていきたいと考えています。

e. 定期的に樹木医にお願いしている

- ・樹木の消毒と生育方法 樹木医の方に毎年来場いただいている（※令和元年は非常に暑く、多くの木樹が枯れる。水分吸収の件）
- ・樹木医など専門家の意見を聞きながら、管理者と打ち合わせを行っている。
- ・桜の病害にこまっていて、樹木医にみてもらっている。（テグス病）

f. 専属の専門家がいる

- ・私は樹木医であり、仲間達の指導に当たっています。
- ・会の結成当時より植物生態学の泰斗広井敏男先生の指導に基づき活動をしてきており、フィールド作業では特に困らない。
- ・花桃の知識、研究で有名な、前大学教授の先生が、当会の発足の時から、会員として協力し、最近は無料で、花桃の苗木年間 100 本以上提供下さり、更に専門的に指導下さり、会員一同感謝しております。
- ・現在の会長は林業の専門家であり、里山の保存、育成に関しては、問題なく活動が続けられる。
- ・土木会社、造園会社も会員であり、特に必要ない。
- ・私達にとっては大阪府内で唯一の「昆虫館」との協働活動でした。やはり、「地域に活動域を持った専門家」の助言が長続きする活動のポイントだと実感しています。

- ・チェーンソーや刈り払い機を使用するためには、取り扱い資格を取得する必要がある。そのために神奈川県木連などが行っている研修会に参加して取得している。間伐などの技術や知識は会員の中に専門知識を持った者がいるので必要はない。
- ・福井県立大学によるコシヒカリの大粒米「ピカツンタ」の開発協力により、ピカツンタで醸造された大吟醸酒がイギリスで受賞されるなど、直接的ではないが、間接的な実験協力で新しい品種の開発に寄与している。
- ・一般社団法人あわら市観光協会の蟹がらプロジェクトや温泉野菜ピクニックとの協力・連携を通じて、「もりみち米」のブランディングができ、温泉と農村の連携のストーリーやコンテンツづくりに寄与している。
これらは、会のメンバーでもある福井大学教員や福井県立大学と活動メンバーの農業者との連携により、環境活動から、科学的なエビデンスや旅行商品やオリジナル商品の販売におけるマーケティングなどにより、本質的に優良な商品や事業が生み出されたといえる。指導や知見というより、専門外の方野であっても、プライベートな立場で活動に取り組む中で、他分野との連携につながり、多分野への展開ができるような活動の積み重ねが自然と発生したといえる。
- ・前職の仕事上の関係から一応、森づくりの基礎知識は持っていると考えていると考えています。一般市民の声は傾聴したいと考えています。
- ・本会の名誉顧問（前、理事長）は植生に関する専門家で科学委員会の委員も務めたので専門知識はある。国立公園・世界遺産内の植生回復事業なので、今後もどのようにして世界遺産の価値保全を実現していくかは、小笠原諸島世界自然遺産地域科学委員会が定めた「管理計画」、「アクションプラン」に示されている内容と整合が取れる必要があり、管理機関や関係団体との許可・連携も欠かせない。そういう意味で専門的知識がないと活動の企画立案はむづかしい。
- ・普段の活動には、特に不要と感じますが、イベントなど多くの皆さんが集まり、専門的な分野については専門家の指導が必要だと感じます。当団体では、松枯れの専門知識を持つ「松保護士」や、鳥類に詳しい専門家など、会員のなかに専門的知識を持つ人材を引き入れています。
- ・当団体には森林育成や植物分類学の専門家が会員として存在しており、指導や知見は時に必要でない。
- ・当活動には、ガーディナー、植木屋、農家、市民活動コーディネーター、等々、多彩な専門知識を持つ方々が在籍しておりそれぞれの専門知識を惜しげもなく提供していただいている。ミーティングや作業そのものが新たな知識の習得、学習の場となっている。園芸種、農作物の管理方法、土作り、堆肥作り、等々をご教授いただいている。

g. 専門家の指導を外部に依頼している

- ・「前期山村多面的」交付金によって後嗣及び技術指導を受けながら事業を拡大していく。講師料、労務人件費もOKです。
- ・現在、当法人に於いては催行事業にもよるが、専門家の指導は必要により仰いでいる。
- ・木々の手入れ簡抜、伐採等高所作業は専門職でないと危険が伴うので助成金を使用して専門職に依頼しました。
- ・オリーブ栽培は初めての経験者が多く、また、農業等からの転作などには専門的な知識が重要と考えている。我が研究会には役員として本職の植木屋経験者や長崎市の農業センターとのつながりもある。様々な会員の相談にも乗るためには知識や経験が重要だと考える。
- ・森林を管理するにあたり、入込者や隣接者に被害を与えた場合の対応や、ボランティア参加者の事故への対応など、森をめぐるリスク管理の専門的知見が必要である。古い蔵や門については、地元の建築士の指導を受けて建物の構造や材質の調査、補修・保存方法などのアドバイスを受けている。
- ・アセビ伐採調査について専門家の助言を得て、専門誌に論文も掲載しています。今後も長期的に森の再生力を継続調査することが課題になっています。類例の少ない調査活動ですので、とりまとめの段階で専門家の指導も必要です。
- ・日々の活動の中で刈払い機やチェーンソーの操作が自己流に陥る傾向が見られます。専門家から定期的に指導を受け事故防止の一助として行きます。勿論、自己研鑽の向上のためにも協会員自身で安全教育の重要性を認識して定期的に座学、現場講習会等を励行しています。
- ・当研究会は、学術的研究成果を見ることが必要なために、既に、3名の研究者と連携して調査に関わっている。
①里山環境（樹木の健全度など）、②里山に暮らす野生動物と獣害対策 ③里山資源を地域農業に活かす取組を行っている。これらを報告書にまとめて、行政に提出し持続的な健全な社会に生かす。
- ・成果の欄でも書きましたが、思った以上に成果が見られない時に、専門家の協力をいただいたことにより、グンと良い成績が上がりました。毎年、参加され、去年自分が植樹した苗が成長している記録を取るのを楽しみにしているお子様たちの喜ぶ姿を見て、専門家にご協力いただいたことに必要性を強く感じました。

h. 専属の専門家の高齢化が課題である

- ・公が植栽した緑は環境への重要な役割があり、美しい景観もみせてくれる。一般住民が専門家の指導や知見を学び、地域の緑化の管理育成をすることも極めて重要である。公民共に温暖化防止につながると思う。会の講師も高齢のため活動を進めるのに厳しいことも多くあった。

i. 専門家により地域性が失われることへの懸念

- ・専門家が入ることで正しく、美しくなる利点はあるが、逆にそれによって、地域らしさが失われてしまうことに懸念する。
- ・統治だけの問題ではないが、里山森林の管理のやり方には依然として定説はなく、伝統的な薪炭林の維持管理ではなく環境林としての森林管理のあり方について専門家をまじえてつくりだしていくのが大きな課題である。

j. その他意見

- ・20年間モニタリングも継続して行っているが、この間の評価と今後の課題、方向性をみていただきたい。
- ・地元の参加意識を毎回どう高めていくかが課題である。
- ・保全活動には、参加者が多いが、環境調査、普及啓蒙事務局への参加者が少なく、子ども、女性、若い人への活動範囲をひろげる必要あり。
- ・森林保全整備が海産物を取り巻く環境改善に繋がっている、ということについて、「古くから伝えられている先人の知恵」以外の科学的な実証がなされていない。
- ・活動の目的と手段の乖離が見られることが多く、植樹が目的化し、樹林の出現に繋がっていない。
- ・沢の源頭部が以前は池であったが今は落ち葉や土砂が堆積し、水面がほとんど見えなくなった。このままでは虫はじめ水生動物が絶滅して仕舞うのではないか。
- ・自然体験活動は、その必要性から子ども主体の遊びをメインとした活動で、子どもたちが創造性・感性を発揮する場であると捉えている。我々はその能力が発揮できる安全な活動の場を提供しているが、安全管理に関する知見が求められるが、現在のところ大きな代とはなっていない。

④ その他、活動を継続する上で、見えてきた課題などについて

a. 今後の活動において、若手会員の導入方法・育成および世代交代は、課題である

- ・人材の確保が困難です。自然の観賞、観察などは関心が多いですが、自然環境の保全・維持に従事する意思は弱いです。民間企業、学校等アプローチも難しいです。
- ・会員の高齢化により活動が厳しくなってきた。年々活動量も減少、次世代への交代が一番の悩み。
- ・若者達が里山再生活動に対して、あまり興味関心が薄れてしまっている事。
- ・情報化の進展が激しく、価値観が変化して来ているのか、若い人々が少なくなって来ている段階で、現在の会員の高齢化も進み、若い会員の増員と未来に向かって指導的な役割を担う人材の確保に苦慮しています。
- ・脆弱な NPO では、地域環境保全は極めて難しい。会員の拡大が最大の懸案であるが、現実問題と会員の高齢化も深刻な問題である。
- ・教育を志す女子大生の参入が思うようにいかない。何か良い方策を検討したい。
- ・会の継続維持の問題。働き方改革、定年延長、年金受給年の繰り下げ等の懸念等離職年齢が高くなり、会員の大部分が後期高齢者になりかねない。
- ・会員入会者数が増えていかない、活動、組織の継続などに問題が出てくることは必要で、現在タスクチームを作り体制づくりをスタートさせた。
- ・人材確保が重要課題です。
- ・10 年を迎えた活動の継続には活動を支える会員の増加、及び、特に若手会員の加入をいかにして進めるか、また、現在の環境にマッチした新しい知識、技術者の育成による活動内容の充実を図る。
- ・ボランティア活動を個人で長く続けることは、これからは、なかなか難しいのではないかと思います。地方では若い人、子どもが少なくなっています。
- ・我々の活動メンバーは発足当初（1990年代）は50代、60代が中心であったが、その後メンバーの入れ替わりなどがあり、30年後の現在は70代が中心となっている。後10年もしないうちに多くが80代となり、体力的にもまた状況判断においても難しい状況になると考えられる。今の活動を維持するためには、我々の活動

をPRして、後を引き継ぐ若い方をもっと増やすことが緊急の課題である。又それに伴い、技術の継承も課題である。

- 将来的な事務局を運営するスタッフの確保。
- 我々サポートクラブの活動日は平日ということから定年退職者が主要メンバーで、新規加入される方も近年の定年延長の影響により 65 才以上の人が多いのが現状です。サポートクラブとして今後も長く活動が続けていくためには、若い人の加入は必須であり、若い人に参加してもらえ工夫が必要と考えています。
- ボランティア活動は暇とお金のある人しかいません、若い人は仕事が忙しくまた家庭サービス等々ボランティアどころではありません、歳よりでも裕福で健康な人が当クラブを支えております、何処も同じですが会員に若者がいないいたがって後継者が居ないのがこの活動のネックとなっており消滅も時間の問題です。
- 活動する「場」「人員」「資金」の確保が重要な課題である。北海道でも荒れた林地や山林が数多くあり、手をつけられずに荒廃が進んでいる状況がある一方で、活動できる場を探している団体がある。企業としても何かやりたいと思っているトップがいる一方で、人手不足で計画通りに進められないボランティア団体がある。これらを目的や技能も含めた能力に合わせてマッチング、あるいは橋渡し、情報提供できる組織があれば、将来的にも活動が「安定」してくるのではないかと考えている。
- ボランティア団体として、設立 20 年になり、後継者がほぼなく、会員の高齢化が進んでいること。これから先当会以外での手入れは心配される。ただし、市の所有地であり、今後は行政の手での充実を期待しています。
- 行政面や学校などで責任者（担当課長や学校長）や担当者が変わると関心に温度差があり活動に影響が出る。
- 町の人口減少の中で、会員の確保や活動メンバーの増強が非常に難しい。
- 「楽しいイベントに参加したい」という人は多くいるのに「一緒にイベントを企画する」とか「入会希望する」人は決して多くはない。どうしたら会員を増やせるかは会の最大の課題である。そして長く活動を継続するためには、次世代の会員の増加が必須である。環境学習に力を入れてきたが今後はそれに加えて小中学生に森林整備を体験してもらう機会も増やしたいと思うが、その際に安全の確保をどのようにするかが課題である。
- 地元以外の団体の支援で活動が継続して来た実態であるが、一過性の面もあるので基本は地元中心であるべきだということ。具体的には、会員増（とりわけ若い世代）が課題である。
- 会員の高齢化。壮年層が多く、活動と仕事の両立が難しい。
- メンバーの高齢化が進んでいる。都市住民などの力を借り、交流人口を増やすことで問題解決を図る仕組み作りが必要だ。
- イベントへの参加者が地元の場合は関係者のみ。外部の参加者が多数を占めて関係者以外の地元の参加者が少ない。
- また、花王栃木事業所（市貝町）からの参加者も 1 回に数名程度と思ったほど増えていない。
- 助成事業終了後も活動が継続できるよう、地元の参加者を開拓、固定していくのが課題である。

b. 今後の活動において、活動資金の確保は、課題である

- 活動を継続させるためには、「助成期間の継続」しかありません。
- 助成終了後、将来にわたって継続可能なものにするための財源の確保
- 安定した活動資金を準備すること
- 自主財源の確保も大きな課題だ。
- 活動を収益事業に結びつけ、持続可能な事業展開をはかることも課題。
- 間伐材の利活用などで運営資金が調達できるようになればよい。
- 会費の徴収が難しいこと。
- 外部、賛助団体からの助成金、支援の拡大が必要である。
- 自然を相手の活動は、一機に完成させることはできない。我々が目標とする姿に成るには、これから 10 年は必要である。何れにしても、若い(60 代で OK)力と、継続的、資金確保が課題である。
- 老樹木が増大化傾向、伐採費用が多額となっている。大型クレーン車などが必要(専門業者要)
- 問題点としては当自治会では資金面と思われる、100件近い集落なので自治会費からの負担は困難であるため、行政が何らかの支援をしていただければと考えます。
- 森づくりの活動は、森を造るだけでなく、手入れや手入れで発生する木材の伐倒・搬出、製材、利用、木材を利用した建設におよび、多くの専門家の参加が必要になる。このため、専門家に支払う謝金の確保が今後の大きな課題である。
- 市の緑地への予算が年々減少しており、木々の老木化、病虫害、風害による枯木の増加に対する処理が遅れてきている。来園者への危険が増すことになっている。

- ・自然体験活動を実施する団体が地域に増えたことで、参加者数が減少する傾向にある。そのため、会費・参加費も減少傾向にあり、運営する際の人権費や道具などの維持費の確保が課題となっている。協議会の中で、地域の企業などに協力を得られないか模索している。
- “・活動のための資金の調達とスタッフの高齢化に伴う確保及び事務所管理費、機械器具の更新費用が不足しているのが現状です。薪・炭の販売、支障木等の伐採作業収入及びイベント参加費収入などで管理費、事業費をまかなっている。機械器具の更新費まで資金保留ができていないのが実情のため資金確保が課題となっている。

(例)

伐採木等の破砕機(チップ-機 10 年経過) 3 百万円/台(更新費用に寄付金募集中)

チェーンソーの更新(15 台 6 万円から 8 万円/台(一部助成金を充当) ”

- ・地域の方々に森づくり活動をしていただく中で、植樹は最適の活動で比較的容易であるが、地拵え等の事前準備と植樹後の下刈り等の育樹活動が最も重要で、骨の折れる活動である。経費的にもここに多くを必要としている。

c. 今後の活動において、活動場所の確保は、課題である

- ・活動場所や参加者の減少

d. 今後の活動において、技術や知識の習得は、課題である

- ・技術や知識の取得。世代交代。
- ・多くの人が参加して楽しく作業することは大切だが長年に渡り続けていくことがより重要である。そのために安全性や作業内容の周知の仕方が難しい。
- ・マツ苗育成、並びに植樹活動を通じた得られたノウハウを、環境活動(教育)特に小中学生への教育に役立てられるプログラム作成の必要性が課題として見えてきた。
- ・植えた桜が 10 年以上に育成し、沢山の花をつけるようになって、ナラタケ病で枯死するものも出ています。また養苗し、植えたヤマユリや植えたミズバショウがイノシシの食害を受け全滅するなど自然のこわさを感じています。
- ・里山としての保存、育成と学習の森(特に子供たちに対する学習の場として)としての育成に課題がある。
- ・森の作り方(あり方)で意見調整が難しいことがしばしばみられる。
- ・活動にチェーンソーなどの機材を利用するので、効率的な機材の使用法などを学ぶ必要性を感じている。助成金により高価な機材を購入できているので、なおさら機材の使用法の習得は課題である。また活動が大掛かりになるにつれて、小幡緑地側から求められる課題も変化してきている。つまり、間伐地帯の規模拡大や、伐採する樹木の高度化である。その変化に対応することも課題の一つである。

e. 今後の活動において、団体のマネジメント手法の習得は、課題である

- ・種々行事に対する参加等の協力は得られるが、団体をマネジメントする立場での幹部要員が見当たらない。会員数の増加とともにお互いの価値観と共に、意思統一が難しくなる嫌いがある。
- ・1,「人・物・金」が安定的に確保できること。2,会長職、会計、運営委員等、責任ある役職になる人が少ない。3,交通費(ガソリン代含む)、昼弁当、飲料水等、参加の為に諸経費の補助が必要”
- ・自然の環境とビジネスのマッチングとバランスによる持続可能な組織運営。
- ・古いメンバーのこだわりと新しいメンバーの問題意識の間にけっこう乖離が見えてきている。それを埋めるのは、話し合いなのか、時が解決していくのか迷っている。
- ・花王助成金のおかげで環境教育や生物の専門家とつながることができ、スタッフの環境教育に関する知識も上がりましたが、スタッフにはそれにあった対価がはらえてなく、NPO を運営する上での経営の専門家の協力が必要である。でないと若い世代に活動を引きつげない。
- ・リーダーの養成が今後の重要な課題である。
- ・企画・運営に携るスタッフ会員の充実を図らないと活動の継続が難しくなってくる。
- ・会員が多くなり、色々な人が関わってくると、運営が難しくなる。会員を増やすことも、活動するうえで重要ですが、思いを同じとする中心となる会員以外は、準会員?参加者として数回参加する中で、正会員にするなど対策も必要かと思います。せっかく軌道に乗って色々な取組をしようとしても、
- ・野外での刈り取り活動など現地活動を取りまとめるリーダーの育成(世代交代)、会の運営を統括するとともに各種手続き、書類事務を執り行う運営人材を確保することが不可欠。生物多様性保全に関する市民団体活動は高齢者中心にならざるを得ないため、10 年程度で担い手が交代できる仕組みが求められる。また、現役世代が参加しやすい環境を整えることも不可欠である。”

f. 今後の活動において、他の団体や地域との連携は、課題である

- ・市の保存樹木は、毎年の管理や、又、周辺の草取り、草刈り、などの活動は、地元の自治会との協同作業で進めるための協定を取り交わす必要がある。
- ・近隣の教育機関との連携が大きな課題。(公立の小中学校は環境教育の実践に驚く程消極的である。)
- ・街の活性化対策と連携した植樹活動でないとだめ、ただ木を植えているだけでは新しい人材が入ってこない。
- ・他団体や、活動をしていく中で出会った方々とお互いを生かし合い、発展させてゆける、何か新しい道がみつければ、と思います。
- ・環境や景観を守る活動は純粋にボランティアだけで継続して維持していくには、その活動をリードしていくリーダーに大きな負担がかかる。環境や景観は直接的にすぐには困らないことが多く、行政の立場では経済優先になりがちで、後回し(優先度が低く)対応される。いかにして行政と連携し、行政の方針計画の中に組み込み、その中で、行政の手が十分回らないところを補填するような形で活動できるようにするか?その手腕が問われる。
- ・地域の学校や幼稚園・保育園などとの連携が進まない。
- ・今回の助成での対象場所は地域の方からの申し出もあり、町の有力者との連携で決めた。

助成が終了する3年後頃には、以下の様な課題に直面すると感じている。

- (1) 次に取り組む森づくりの活動場所の確保。候補地の選定と将来像を描きつつ、長続きする森づくりが求められているが、候補地の選定・地主との協議・近隣土地所有者との調整など課題があると思われる。
 - (2) 現在取り組んでいる雑木林の保全活動(下草刈り・除伐等)は毎年数回行わないと元の鬱蒼とした雑木林に戻ってしまう。対象区域を拡大すると年々作業領域が拡大して手が回らなくなる懸念がある。
 - (3) 森の保全活動の担い手となる人材の育成が無いと、元の雑木林に戻ってしまう。町の公務員や、企業勤めの方々等が定年を迎えた時の活動場所としての受け皿を・・・と思うが、なかなか実現が難しい。
 - (4) 雑木林・竹林の整備は当会でも請け負うことを始めた(無償ではガソリン代・機器購入等が不可)が、地元造園業者との住み分けが難しい。一步誤れば、会の存続にかかわる事態を招きかねない。
- ・都市の中に自然環境を復活させることの重要性を行政の緑政に反映させるために何をしたらいいかが課題である。
 - ・まちづくりや地域づくりは市民の要望や地域性を考慮しながら桜の会と市民、行政、各種機関が一体となり継続的に取り組む必要性を実感。
 - ・みんなの森の発展的な継続活用のために大学などの教育・研究機関との連携を模索している。

g. 今後の活動において、他の団体との交流の場を作ることは、課題である

- ・当団体は助成対象活動の他にもう一つの小学校で同様の活動を行ってきましたが、会員の減少、高齢化により、2021年以降は対応不可能と判断し、2020年度を最後に同活動を終了し、他のボランティア団体に引き継ぎ予定です。この経過を通じ、同じ地域での同種ボランティア団体同士の交流がこれからもっと必要と感じた。

h. 今後の活動において、活動に対する地域社会の理解・支持は、課題である

- ・この山林の将来性について荒廃の状況から植林を行い、多層林として育成していくことが急務と考えられる。植林が行われないかぎり森林としても機能を失い、市街化区域の森林であるために宅地造成などに開発されてしまうおそれがあると思われる。植林をして若返りをしない限り、この森林の将来性はない。
- ・環境問題に対する法的な基準、決まりが古く、急速に進む環境の悪化に対応しようとする市民活動をしばりつけている。
- ・地域全体のより深い協力をいただくこと

i. モチベーションの維持は課題である

- ・会員同士の懇親会をもっともつことも必要である。
- ・自然再生の良さを感じつつ、環境保全の難しさを感じている。1つ課題を解決しても、また課題がでてくる。
- ・現在、小学生から一緒に活動しています。体力的な面でもサポートはもちろん、活動を継続する為の、モチベーションを保つためには、どのような働きかけが良いのか、常に模索しています。
- ・山積みする小学校課題、職員の異動、助成金補助の終了等の中で、高いモチベーションをもって、以前と変わらない活発な活動を継続することは難しい。
- ・活動を継続するためには、活動の楽しさや社会的意義の体験などが不可欠で、これらの成功体験が、次の取り組みに向かわせると考えられます。このため、日常の活動は、会員間のコミュニケーション、活動課題の共有が

不可欠であります。また、活動成果を確認するためにも、情報発信が不可欠であり、ホームページやフェイスブックなどの活用が必要と思います。里山の維持活動には、器具を含め多くの費用が必要となっています。特に、大規模敷地(約 14ha)を維持管理するためには、機械化する以外無く、多くの維持費を必要としています。しかしながら、これに必要な資金を自らが稼ぎ出すことにはボランティアとしては困難で、社会的支援体制が不可欠と考えています。このため、地域の企業との連携や市との協働体制の確立に取り組みたいと考えています。”

j. 外部から活動が認められることは課題である(評価・認知度)

- 人材育成や PR などが必要で、フェイスブックなどを利用している。
- 公園及び当 NPO の認知度を向上させ来園者の増加につなげること。
- 今回の私どものプロジェクトでの「里山づくり」という概念が、まだ柏原市の行政や市民のなかでも理解されていないという現状にあると思われます。柏原市立玉手山公園では、シルバー人材センターに委託して、土の上へ落ちた葉っぱの除去に一生懸命になっています。専門家の方はそれを見て、「市は無駄なことにお金をかけていらっしゃる。葉っぱはいずれ腐葉土になっていくもので、木のまわりには落ち葉があってもいいのだ。これでは木も弱ってしまう。」と嘆かれます。まずは、今とりくんでいる「玉手山フィールド」で確実な成果をあげることにより、里山づくりの趣旨・意義をもっと市民のなかへ啓発していけたらと考えています。2 年目からは少しずつ子どもや市民にも公開と市民参加を企画できるように進めていきたいと考えます。
- 優良な商品や活動のコンテンツができたが、周知には至らない。理由として、活動で生み出されたブランド米は、活動にちなむ一部の理解者の中で消費され、不特定多数に周知する必要性が欠けている。また、活動メンバーが 30~60 代と中年にさしかかり、SNS による発信意欲が低いため、広く周知していない。インスタ映え等でのフォローではなく、実際に、県外から飛行機や自動車を持ち継いで、現地に足を運んで、ともに活動し、年間の米を購入してくれる方もいる。定住や農業体験による観光など、第 2 のふるさととしての県内外の方々とながりたい。
- 活動の内容を広く市民に理解してもらえる広報活動が重要で、特に若者に理解してもらい参加を促す為には、健康的で充実した生活の維持と豊かな生活環境を確立していけるよう、自然やみどりと親しみ、自然の恵みを享受できる環境づくりが大切であるという事を伝えていかなければならない。
- 稼働年齢が高くなっているのは、ボランティア活動団体の共通の課題であり、ボランティア人口の減少である。その中でも積極的な活動が魅力があると PR することで関心を高めており、やはり活動の魅力を実績を通じて PR するしかないと思う。

k. 専門家の指導や知見は必要である

- 活動も 3 年目でガーデンの管理をすることについてはほぼ順調に推移している。障害者支援施設の利用者、スタッフとの連携は活動日(GP 活動は土日開催、利用者の活動日は平日)の違いから一部の利用者、スタッフにとどまっている。土日は介助でつけるスタッフも少ないので、今後工夫が必要。作物の植え付け、収穫等を平日利用者が作業として行っている。集まっている方々が、専門知識もある方が多く、今後市民活動のグループの立上げ、育成ができるようなスキルを身に着けた人の育成等ができるのではないかと考えている。”

l. その他意見

- 活発な活動にはものづくり系の活動を時々行うことが効果的である。
- ボランティア参加で出来ることと出来ないことなどの線引き
- 活動の対象は最上級の 6 年生が主体ですが、1 年間で卒業してしまい、せめて 2~3 年間の継続的な活動が欲しいと思う。
- 森と付き合う内に見えてきたことは、この地の自然を生かすことが最強だということです。風や虫や鳥が運んでくれた草花や木に出てもらい困るもの、そこには合わないものをとらせてもらうのが、一番自然を荒らさないことがわかりました。そして、災害の時、草や実は食料に茎や枝は燃料に、草地はトイレになります。土があれば必ず植物が出、根が土を流さず、暑さ寒さを和らげます。日本中に広まっている全てあったものを取り除き、買った草花を植える花壇づくりは多様性をなくし、自然を破壊するやり方だと思うようになりました。
- 対象森林の管理ー除草に年間多くの労力を必要とする。
- 小中学生への啓発活動の強化。
- 環境教育の強化(学校の理解と教師の意識、協力)
- 苗代の寄付(郷友)への啓発活動
- 現代社会のかかえる問題の中にゲーム障害、スマホ依存症など室内生活が多くなってきました。子ども達が自然と親しみ、外気に触れる重要さが増している今こそ、里山や里海を生活の中に取り入れることが重要に思います。

- ・今までは人件費の出せる助成事業はなかった。令和の時代となって今までのような助成事業では若い方の参加は不可能となる。若い人も現状では居住者がいなくなる。
- ・小学生の参加は多いが、中学生から上になると、学校行事等もあり、参加する子が急に少なくなる。この途切れが環境活動を遠ざける原因にもなる。
- ・会員の若返りを図るため、地元に進出している企業を「企業の森づくり」会員に加入促進し、企業の社員参加による森づくり活動を実施、本年度は新たに加入した企業の社員の参加を得られたことにより、社員参加の活動が会員の若返りに繋がることを期待する。
- ・植栽してからも、シカの食害を防止する対策に多くの時間と手間が必要だった。
- ・台風による大径木の中折れ被害が多発している状態で、より難しく、人手を要する作業が伴う片付け作業に追われている。そのため、より以上に担い手の確保と機器類の補充と保守に備えた資金調達を図ると共に森林内にドングリ苗を植樹し進めている森の再生への取り組みを更に促進していくことが必要と考えている。
- ・本格的な森の整備活動は順調に進んでいるが、既整備林も下草刈りや枯れ始めた樹木の伐採等を継続していかなければならない。そのため、整備面積の拡大はどうしても制限せざるを得ない現状がある。
- ・自然相手の事業（オリーブ樹の生育）には自然災害や、環境に左右される部分が大きい。折角、3年以上育てて苗木も2年連続の台風被害により、約半分の樹木が倒木した。特に成長すればするほど風の抵抗が強く、どちらかといえば、朝植えのオリーブ樹は倒木の可能性が大きい。結実化を期待していただけにショックも大きいけど、日本全国に被害をもたらす台風は仕方がないのかも知れない。これで生活している人のことを思うと嘆き悲しむのも大げさすぎる。自然相手の事業は計算通りに行かないことを痛切に感じた。
- ・森林を管理する際、台風などの災害により隣接地に被害を生じさせた場合の補償に大きな不安がある。それを防ごうとすると、樹木などの高さに制限を加え、樹木の位置を隣接地より離れてさせるなど、生物多様性を目指す森林に大きなダメージをもたらす
- ・学校や公園等の公共のスペースへ植樹する場合、学校・行政の自己資金で行なう活動は少なくいのちの森づくり友の会の寄付金をもとに活動を行なっている。集められる寄付金は限られておりまた、植樹を望む学校や公園も多くはない。また、潜在自然植生理論での植樹をお願いされて実施した学校でも、校長先生が交代すると学校の方針も変わる。木が大きくなると困るので剪定して小さくして欲しい等の要望もある。樹種の選定の仕方は今後の課題と言える。
- ・子供は好奇心や探索への行動を生まれつき保有していると思っています。私どもが行う事業は遊びを通して自然を体験し、身体的・精神的・社会的に成長していくものと考えています。しかし現在の置かれている環境は昔と違い、習い事やゲームやテレビなどの視聴による間接体験が増え、少子化による遊び仲間の希薄、遊び場と成る空き地などの自然がある環境の減少により、遊び空間が失われていると感じています。このような現状を少しでも改善できる活動を目指していきたいと思っています。
- ・間伐や保全活動は この近年のナラガレや台風被害で、ものの見事にその成果を白紙に戻ってしまうということを経験した。この25年間いったい何をやってきたのだろうか、、、という、人間の自然環境へのアプローチの小ささを思い知った。でも、そうであったとしても子どもたちと共に、その体験は本物の体験として刻まれていくものだろうと確信している。裏山クラブ卒業生たちが、大人になっても集まってくることにそれは現れているように思う。なにもかもうまく行くという成果主義で私たちの活動を進めている訳でもない。子どもたちの成長にとって、何が大切な体験なのかが私たちの焦点なのであるから。思うようにいかないことを学び取ること共に、微妙なバランスの上に成り立っている環境というつながりはいったん壊れてしまい、人為が入ってしまった後の荒廃からの回復はとてつもない労力が必要なのだという学びは、将来を担う子どもたちに大切な視点を育んだと思っている。
- ・1. これまでがむしろに様々な人、手段、内容で、事業を進めてきたが、今後は、これまで学んだ経験を活かして、ターゲットを絞り、効果的に活動を進めていくことが課題だと思っています。そのためには、これまでとおなじ内容の活動が無償ではなく有償で実施するために、今度開業する宿泊施設を使って、有償の体験アクティビティに仕上げる必要があると思います。
- ・これまでミズナラやブナを中心とした森づくり活動を行ってきたが、持続可能な森林を整備していくためにも、ミズナラやブナ以外の自生種も活用した活動を行う必要性がある
- ・①第1回では、大勢の児童や保護者が集まり、第1回～4回まで大きなイベントや森づくりも出来たが、大学からの「食中毒」発生を危機クレームなどもあり、継続は無理となった。大学側の解放がどこまでできるのかが課題である。②農福連携および竹粉の製造や農業塾（人材育成）により、大学生などの若い力を借り、NPOの方々の指導・協力で事業がスムーズに行うことができた。お互いに未来の地域持続を考え、行動し前に進めなくてはならないこと。
- ・生物多様性の3つのレベルによって、植栽地の環境にあった樹林が出現する方法をとり、侵略的外来種の草木を抑えるため、専門家を現地に呼んで指導、協力は必要不可欠であり、森作り全体を通した考え方と技術を身に着

けることを今後の課題とし、また、少しでも多くの親子に興味を持って参加していただけるように、PR を広げていきたいと考えています。

⑤「次世代を育む環境づくりと人づくり」と活動の繋がりについて(理由)

a.「繋がっている」に「当てはまる」と回答した団体

- ・里山の保全、森林の維持管理・再生の方法を次世代に伝えておく必要がある。継続することによって維持されていく。その結果が環境づくり、人づくりに繋がる。
- ・緑豊かな自然の中で、豊かな心を育てる活動はみんなの協力が必要であると感じてもらいながら、いのちの大切さを理解してもらう。
- ・私たちの命は山や緑が産み出す水の循環によって支えられ、ありとあらゆる命にも支えられている。生物多様性を願い、生き物たちを愛することが地球環境をよりよい方向へ導いていくことになる。人類はすべての生き物たちと共生する地球家族であると思う。
- ・生活の身近な場所に緑豊かな環境を創造するためには、みんなの森づくり活動が大切である。
- ・「人づくり」はボランティア活動と重要な関係にあると思う。ボランティア組織では「いつでも自由に楽しく参加できるよう門戸を開いておく。また活動の成果には誇りを持たせる」と言ったことが大切と思う。
- ・子ども達の緑化活動の体験が、「人づくり」に繋がる。
- ・人づくりは、小学校の段階から、行われねばならない。活動の事業に小学生を(保護者を含め)参加させ、将来の活動に繋げていきたい。
- ・自然生態系の重要性を学習することによって、生命の大切さ、生物多様性、自らの存在意義を感じる事が可能である
- ・いかなる事業も「ひと・もの・かね」3要素から成り立ちます。この3要素のどれかが欠ければ事業は継続して行きません。人づくりはどの組織にあっても永遠の課題です。
- ・森づくり活動に参加した小学生が中学生や高校生になりボランティアとして再び森に戻ってきてくれるなど、次の世代へ森づくり活動の大切さが引き継がれている。
- ・子ども達向けに、植樹と育樹のイベントをしている。
- ・校庭全体を使って毎月自然観察会をやっていることで、子どもと保護者の自然体験を増加している。
- ・小学生の環境体験学習を支援している。それは、次世代に継承されると確信している。
- ・県内各地の学校や子ども会活動に招いていただいて「体験教室」を実施している。
- ・高校生が主体の環境づくりを行っているため。
- ・子供たちや学生たちが、中心的動きをしている。
- ・公開イベント等において里山での自然観察や自然遊び、木立の伐採や植樹体験を通じ、親子で自然環境保護の大切さを学習する機会を多く提供してきた。
- ・野菜づくりや植物の手入れ等の作業を地域ぐるみで行うことで、ここで育った子供たちは自然環境、農業、コミュニケーションの大切さを実感している。
- ・小学生対象の活動ですが、自然、森林の重要性、環境の意味は実感してもらえたと感じる。このことが、将来にもつながると思う。我々の活動が保護者、教職員にも認知してもらえたことも将来につながる。
- ・地元の小学校や緑の少年団との活動を通じて、環境づくりの心は繋がっていくと思います。
- ・環境問題の解決のためには次世代の育成に力を入れなくてはならないのに、現在の日本の市民社会はそこが大幅に欠落しているという認識を持っていて、次世代育成と若者の社会参加を最重要課題だと認識しているので、常にそこを意識した活動をしているため。
- ・教育委員会や地元の小学校と協力して林業体験を年 3 回程度実施しています。林業体験では実際に森の中に入り、間伐の大切さを教育すると共に山の手入れをする楽しさを体験してもらっています。
- ・学校現場に於いて不足する専門分野に対するノウハウ、指導者、資金をNPOが補完し、子ども達に緑を大切にする感性を育む。
- ・現在、行政での施策は一般的には経済優先、環境は二の次の判断がなされている。子供の時から、環境が一番、その環境のなかで経済を考える、人は自然の中の生き物の一つであり、自然の恵みに生かされていることを感じる大人に成長してほしいと考えている。森での自然環境を活用した環境教育やイベントなどで森が好き、森に興味を持つ、自然に興味を持つ、自然が好き、自然を大事にする大人になるとなっていくことを期待している。

また活動参加メンバーは自然環境を守る活動を継続することで、その保全がいかに大事であるかを理解するようになり、周囲にも影響与えることができるようになる。

- 当法人は子ども向けの森林教室を開催し、また森林整備活動を行っている。
- 助成を受けた活動には、小学生・高校生・大学生も参加している。また、小・中・高校の先生も参加している。
- 緑地の自然の中で実施する各種活動には、地域の小学校児童たちにも参加してもらい、植樹・昆虫採集・野鳥観察・ザリガニ捕りなどを開催する一方、次世代に繋がる環境整備として、ミズバショウの種まき・ヒガンバナ球根植付け作業などを体験してもらっています。
- 幼児から小学生を中心とした家族会員の子どもたちは一旦活動を離れても、大人になり親になった段階で、クラブの活動が継続していれば、また、戻ってくることを期待している。
- 学校のクラブ活動で取り組んでいるところがポイントだと思っています。ですが、これが他の学校でもできるかというと、まだまだ学校という社会ではハードルが高いと言える。だからこそ、私たちの活動が、子どもや地域を変えていくのだという、講演の機会をつくっていくのもまた使命ではないかと考えている。
- 閉鎖的になりがちな障害者施設の敷地にコミュニティガーデンを作ることによって地域の大人や子供が自由に出入りし、施設のあり方、障害への理解を考える場になっている。福祉施設や公共的な施設等でちょっとした空間をガーデンとして活用したいと考えている事業者は潜在的に多いと想定している。予算の確保、人手の確保、継続的な管理等で踏み切れないのが現状ではないか。当園の活動を通じて、手の付けられていない空間を、事業者や地域の人々の手を借りガーデンに変えることができる人づくりを目指している。

b.「繋がっている」に「やや当てはまる」と回答した団体

- 活動は継続しているものの、市民への認知や協力や自治体などの支援体制が不十分である事など、継続的活動が可能な体制の構築が必要である。
- 森の整備により環境づくりはある程度できているが、次世代を育む人づくりは全くできていない。
- 活動に参加している幼稚園児、小学生、大学生に将来自然環境の保全に関心を持ってもらいたい。
- 残念ながら若い世代（60歳以前）の参加者が微小なので直接的に「人を育てる」機会がもてない。
- 次世代を育むための環境づくり→子供達が自然に親しめる環境として、今では毎年、多くの学校の遠足コースとなっている。しかし、会員の高齢化が進み、若手の会員を増やし、その育成が課題となっている。
- 私達の活動は、環境づくりと人づくりであることには違いない。しかし、胸を張ってそういいきれぬ確信はない。

c.「繋がっている」に「どちらでもない」と回答した団体

- ボランティア団体はどこも高齢化しており、一方次世代を担う小学生も減少しており、今後の活動の継続性の点で機具を抱えている。
- 関心をもっていても仕事や自分の趣味に時間を取られてしまう。
- イベント参加者はいるが、スタッフとして参加する人ができて来ない。
- 当地域には、高齢者の住宅が多いため
- 山での作業であり、草刈り機やチェーンソーを使用した作業が多く、一般の人が参加しにくい。
- 社会環境の変化で70才前半まで働く人が多く参加しにくくなっている。
- 高齢化を防ぐため、無理に勧誘しても若年者は乗ってこない。年金受給年齢までは働く必要があり、ボランティアどころではないというのが現状です。
- 入れない森から入りたくなる森になっていると思いますが、若手会員が増えないのでそこがマイナスです。
- 前身のNPO組織は、地域の小学生を中心とした緑の少年団を結成し、活動や遊びを通じて緑や自然の大切さを感じてもらったが、現在の会の活動は子どもたちの参加可能な時間帯と合致せず、地域の保育園児と遊び感覚で花植えや水やりを行っている。
- 高校生や大学生がスポットに参加はあるが、壮年層は、平日は活動が難しく学生は授業等の一環としての利用の場合参加日程が組みづらい。

d.「繋がっている」に「やや当てはまらない」と回答した団体

- 子育て世代には、子どもの学業に対して経費が掛かりすぎ、ボランティアまで余裕がないように思います。
- 近隣の皆さんは落ち葉で困るとかの不満が多く、私達がボランティアで清掃していても感謝の言葉があまり聞かれない。
- 自分達の財産は自分達を守るという意識が希薄

- ・活動が素晴らしければ人が集まる訳ではない。心で賛同しても行動するかは別。
- ・これまで、ボランティア団体に任せていることから、後継者は不在で今後は行政の手で取り組むことを期待しています。
- ・そう思って活動しているが成果が上がっていない。
- ・町有林の自然に次世代は関心を持ってない

e. 「繋がっている」に「当てはまらない」と回答した団体

- ・後継者が見つからず、検討しているが、課題が多い。

⑥「次世代を育む環境づくりと人づくり」に対して企業に求めること、もしくは市民一人一人にできることについて

a. 企業に求めること

- ・職員の異動により継続性が充分でない活動を、異動があっても継続できるよう社内改善すること。
- ・企業内の人員が一時的にでも現地に出向くこと。
- ・花王(株)のような企業が増えるとよい。
- ・企業のCSR事業など盛んに活動を行っていると思う。
- ・企業はもっと積極的に環境のCSRを考えて実践すべき。
- ・環境づくりについては、AI自動車、再生エネルギー、プラゴミ等を事業者も考える時代にきている。
- ・企業による経費や知識・技術の支援が必要である。
- ・「みんなのまちをきれいにしよう」「みんながあゆむ道をきれいにしよう」と呼びかけ、企業としても活動することが必要。
- ・企業は便利や効率性を優先するのではなく、小さな生き物たちの気持ちや視点をたえず忘れず、目先の経済性ではなく共に幸せに共生できるスタンスや経営は大きな視点を持って、社会に貢献して欲しい。私たちは地球上にくらす生き物にはすべて存在意味があることを知りたい。
- ・企業が働く人々を不安定な雇用を拡大している。安心出来る雇用形態が必要のように思います。若い人の生活の安定・充実がなければ、ボランティアまで手が廻らない。
- ・大人はもちろん子供までが参加できるような事業はありそうでない。技術・安全を共有できるアイデアが欲しい。
- ・今問題になっているCO2を出さないことや、オール電化の症例をひかえてもらうこと等だと思う。
- ・企業は、社員達に緑豊かな環境づくりに貢献する事を指導し、豊かな地域づくりのためとしたい。
- ・企業には市民活動からの求めに応じて、社会貢献を進めてほしい。
- ・企業で積極的に地域の実情をリサーチする。(現状分析)
- ・企業は仕事以外に自然の大切さをアピールして欲しい
- ・コマーシャルなどを通したコンセプトのプロモーション、活動への寄付/助成、社員研修へのプログラム導入、お母さんの育児支援と環境づくりを合わせた事業
- ・企業には日本の森林を守る事業と街に緑を増やす対策を期待したい。
- ・地球温暖化に起因する森林・農地の荒廃、マイクロプラスチックの対策は、緊急課題と考える。企業が未来のために、次世代を担う子ども達のために、今どうあるべきか、真剣に考え、行動に移す必要があると思う。
- ・行政または企業とボランティアがうまく連携できること、それには行政・企業のリーダーシップが必要である。
- ・企業に求めることは「継続性」。担当者が変わると企業の姿勢が変わるようでは、真剣なお付き合いはしにくい。
- ・企業は収益を上げる事が第一であるが、納税と共に社会に還元(寄付等)するという認識が必要であり、又、要求される時代になりつつあると思う。
- ・環境美化運動の助成
- ・資金の提供
- ・社員のボランティア参加への支援
- ・どのような組織活動にも、ヒト・モノ・カネの資源は必要です。企業はその社会的責任を果たすため、利益(カネ・モノ)の一部を社会に還元すべきだと思います。
- ・環境教育や森林保全に関して、小学生にも分かるような教材を提供して欲しい。

- ・SDGS やソサエティ 5.0 など、持続的な環境開発や先端的技術革新が進む中、スクリーンタイムの増加等により、次世代の多くは、便利さを享受する一方で、自分の頭や体で考え、体験し、失敗や経験の中から自ら対応する能力の低下を懸念している。企業は利便性・経済性の追究を第1義とされるが、本来の自然体験や農業体験からしか得られない五感や問題発見能力、問題解決能力を経験する場を花王の助成では提供してくださっている。活動が高齢化する中、経験や活動そのものが消滅する危機感があるが、次世代バージョンの体験・経験+科学・技術で、未来の課題を解決していく試みが必要だと思う。そのためには、高齢者の知恵や経験を継承し、先端技術や科学技術へと繋げ、実質的に経済的に、厚みを持った取り組みへと繋げることが必要と考える。敷いては、農業ビジネス、森林ビジネスとして、結果的に森林や農地の保全、国土の保全、第1次産業の雇用の確保につなげる視点で取り組んでいる。
- ・かつて60歳での定年制が70歳まで延長されつつあり、人材の確保が難しくなっている。60歳以上の社員の休日を3日/週にして、1日はボランティア活動に振り向けさせて欲しい。
- ・企業に求めたいのは、社員を上記のような行動に移せるような教育やあるいは時間を与える機会を作ることでしょう。現役の時から地域の活動団体に関心を寄せ活動に参加することが、例えば人事評価に一部加わるような制度とか、自社製品で環境づくりに貢献できそうなものがあれば、モデル地域あるいは団体を作りその商品の活用効果をPRするとか常に経済活動と結び付けたタイアップを考えるような、活動があればいいと思います。
- ・企業に対しては、まず社員の長時間労働（残業、休日出勤）を是正し、社員が自由意志でプライベートで地域活動に参加出来る環境を整えることを望む。その上で、社員に対して市民団体の活動に関する情報提供や、活動に参加するきっかけとなるイベントの開催をお願いしたい。会社のCSR活動等で実施する場合は、パートナーとなる市民団体に活動を丸投げにせず、主体的に取り組むための体制を社内に整えてほしい。

b. 市民一人一人にできること

- ・講座や活動体験イベントへの参加、会へ入会して活動へ参加する、活動資金の寄付
- ・市民は月に一度はボランティア活動をする事、等を強制ではなく、自由意志で動けること。
- ・自然を享受し、譲られていることの認識啓蒙が必要であり、あらゆる啓蒙活動。
- ・空地や休耕田に子ども達と一緒にいろいろな花等を植える
- ・市民による身近な環境整備の活動
- ・どこのボランティアも定年後の世代ばかり。私も現役時代にはボランティア活動には一切関心がなかった。現役世代が参加しやすい仕組みが必要と思う。
- ・きっと次世代の人達がこの資産を使って新しい何かをつくってくれるものと思っている。
- ・まず立ち上がって、自分が活動を起こすこと。身近な自然から学ぶことが沢山あるという事実に触れることで、ものの見方が変わる。親子で自然に触れることを目的に、外に出る機会を増やすキャンペーン等があれば良いと思う。
- ・地域の里山を愛する努力が必要。地域の自然環境を大事にしていく教育をしていかなければ続かない。
- ・森は生物多様性の宝庫であり、生き物との付き合い方を参加者とともに学ぶこと。
- ・自然大切にする気持ちを持つこと。
- ・環境づくりの大切さを伝え続けること。
- ・活動のノウハウを身につけると同時に、如何にして相手との関係を深めるかに力点を置いたコミュニケーション能力の向上が各人に求められると思う。
- ・価値観の共有化
- ・自分達の住む地域に誇りを持ち、消極的になるのではなく、前向きな取り組みを継続することで、地域に変化が生まれるのではないかな。
- ・人が社会生活を豊かにするほど、自然が失われていく現状を認識し、人と自然とのバランス、調和を図るために必要な行動に取り組むこと。
- ・定年延長になっても、ボランティア活動に参加しやすい環境づくりができると嬉しい。健康年齢が高くなり、ボランティア活動にも参加できる高齢者づくりが大切。
- ・啓発活動が参加者拡大のためには、寄付金、支援の対象を広げて行きたい。
- ・市民も子どもの頃からまず参加する事から始めさせ、将来の奉仕の精神を育てる事になる。
- ・里山の利用(自然とのふれあい)について小中学校との連携が必要。若い20代の人達が取り組めるような(ボランティアではなく)運営ができれば、もっと発展する活動に繋がると思います。
- ・市民に対しては、もっと情報発信をして、会員数を増やし、森を育ててもらいたい。森の維持作業には、もっと多くの人手が必要です。

- ・自然に「感謝」することを体現する活動が、ひいては、個々人の幸せづくりにつながるものと考えます。具体的には、樹を植え、育て、森づくりを行うこと。その活動が、豊かな海をつくること。その恵みを、私たちは、有難くいただいていること。こうした、生態系の循環が、自らの健康につながり、幸せづくりの要素を構成していることを理解することができると思います。”
 - ・全ての人々がSDGsを理解して欲しい。
 - ・日本の環境団体が高齢化しているのは、環境活動が仕事になりえていないからだと考えています。環境に関して意識のある若者が、仕事になるなら喜んで働きたいが、そうっていないので、仕方なく一般企業に就職せざるを得ないという現状があります。それを変えるためには、有給スタッフがしっかりいる環境団体をもっと増やさなくてはならないと考えています。そしてそのためには寄付文化を醸成しなくてはならないと考えています。なので企業や市民に求めるのは環境団体への寄付です。人件費に充てられない助成金ではなく、人件費にもあてられる寄付がもっと当たり前のように進めば変わると思っています。
 - ・市民も、地域の自然は地域で守るのが当たり前となるよう、地域の自然環境に関心を持ち、自分でできることは何か？各自自分で考えながら行動する。特に子供達の模範となるよう、子供を連れて出歩く際には、例えば、常にマイゴミ袋持参、落ちているゴミは回収する、或いは、樹木や庭など自然環境を大事にしている住宅など見かけたら、いいね！とか紹介する等、子供達にも関心を持たせる。
 - ・先進国では少子高齢化が進み、日本においても人口の減少が続いています。第一線を後輩に譲り自由な時間が増えた人たちが自然の中で有効に時間を活用したいと考えている人たちが多くなりました。これからは少し頭を使い、少しは身体を使って、少し社会のために役立てれば健康的で、すばらしい人生が過ごせることと思います。その方法として近隣の小幡緑地公園で生き物の観察や希少植物の保護・保全などを仲間と一緒に楽しんでは如何でしょうか。
- 小幡緑地公園の湿地には国内では絶滅が危惧されている植物や昆虫が生育しています。これらの生物は人間が守ってやらなければ確実に絶滅します。企業もできる限り地域の公園や森づくりに社会貢献をすることが求められています。”
- ・未来を担う子供達は大切に育てなければなりません。安全に育てることは大事ですが過保護にしては何にもなりません。家の中でスマホやゲームばかりでは先が心配です。自然の中で友達や仲間と伸び伸びと遊び学ぶ事はコミュニケーション力を高める事にも役立ちます。親に対しては変化の激しい現在で仕事に追われる毎日でしょうが子供達と一緒に自然の中に飛び込み一緒に楽しむ事が大切だと思います。自分が忙しくて参加できなくても子供達だけでも自然に触れさせることが大事だと思います。企業にお願いしたいのは 活動を続ける仲間たちが安心して活動をつづけられるように機材や設備面での充実化のため、また チェンソーや刈払い機などの機材を使用するため講習面での費用や保険でのカバーなど資金的な支援をお願い致します。大きな金額を使って大々的に活動している団体もありますが、私達は継続して行なってゆく資金があれば十分に活動は続けられます。
 - ・現状を認識して頂くこと
 - ・地球環境の悪化防止への取り組み。一人一人が出来る範囲でやれることは、多岐に亘ると思いますが、日頃の生活のなかでの気づきがなければ一歩踏み出せません。大それたことでなく、現代生活のなかで使用するエネルギーの無駄を一人一人が削減努力する事で、塵も積もって山となる可能性があるはずだと思います。ほとんど全量輸入せざるを得ない原油の量を削減する小案です。各家庭で毎日出る植物性の生ゴミを 1 個のバケツの中で土に戻す「コンポスト」の導入を広域で出来ないでしょうか。生ゴミに重油をかけて燃やしている現在、濡れた生ゴミ 1kg に必要な重油の量は直ぐに計算出来ると思います。如何に市民を巻き込むかの方法として、小学生達の家庭にバケツを配布して生ゴミ削減大作戦を展開できれば、爆発的には浸透しない現状のコンポスト活動を市民参加型のメジャープログラムに押し上げることも可能ではないかと考えます。
 - ・地域の環境は地域住民が主体となって継続的に担っていくこと、そんな地域の文化を次世代に繋げていくことが大切なことと思います。

⑦ 主催者のサポートや関わりについて期待すること

a. 助成金の用途

- ・助成金の使途が竹伐採などを外部へ発注することを制限していること。竹伐採は多くの労力を要することから、外部事業者任せで作業が進む。
- ・助成金の使途が森づくり植樹だけでなく、管理費や整備費等でも援助がほしい。
- ・助成金を人件費にも利用できるようにして欲しい。
- ・機械器具への助成制度を創設して欲しい。
- ・対象費目の緩和を望む。

- ・モチベーション維持のため、助成金を親睦会の費用にも使用できるようにして欲しい。
- ・チップー、軽トラックなど大型機械購入費の助成（目的別助成）をお願いしたい

b. 支援内容について

- ・企業内の「人(従業員)」が活動に参加してほしい。交流したい。
- ・定期的な視察をしてほしい。
- ・助成金は少なくとも良いので、息長く支援してほしい。
- ・このような助成を継続して欲しい。
- ・専門家のアドバイス、他団体の取り組み内容、各県の緑化事業の紹介などをしていただき、色々な知識を取り入れたい。
- ・指導員不足を補うための育成プログラムの充実や、事業をやりたいけどノウハウが分からない団へのスタッフ派遣のような人材サポートがあると嬉しい。
- ・ビジネスについて教えて欲しい。情報交換もしたい。
- ・「花王・みんなの森づくり活動助成」プレートよりも、活動を広報できる仕組みが欲しい。活動内容をメディアで紹介してほしい。それがモチベーションに繋がる。
- ・助成後の様子を伝える場として、このようなアンケートのように”その後コーナー”のようなものがあると嬉しい。
- ・その事業の10年後のあり様を報告できるスライド写真や報告書を助成団体等に資料配布すれば効果的ではないかと思う。
- ・より広い範囲へのPR等をもっと担って欲しい。日本全国の点の活動を面に広げて行く役割を担って欲しい。
- ・情報共有のため、地方での講演会やシンポジウムの開催をお願いしたい。
- ・各種情報（薪ストーブ所有者・野外活動志向者・社会貢献企業など）の情報を里山活動とリンクする専門家もしくは外部者でつなげてもらえれば助かる。
- ・活動には若いボランティアの確保と、植林などに必要な苗木・花木の購入資金などが重要。国、地方公共団体、企業等から助成金の交付と理解がない限り、ボランティア活動はできない。
- ・若者が興味を持てるような体験の場が欲しい。
- ・小中学校への啓発もお願いしたい。

c. 提出書類・報告書について

- ・助成の為に提出書類、又報告書の作成が難しかった。簡素化して欲しい。
- ・実施報告書で求める書式をウェブ上に用意してほしい。

d. 意見

- ・日本の里山のため、みんなの森づくりがさらに拡大する事を期待する。
- ・荒廃する緑地の調査状況や現状について、知りたい。
- ・活動の立ち上げ時に、この助成が大いに助けになり活動の励みにもなって現在に至っている。
- ・感謝している。
- ・アンケート結果を情報共有して欲しい。

⑧ ご意見、ご感想等

- ・引き続き支援をお願いしたい。
- ・感謝している。
- ・随分詳細なアンケートでみどりのまちづくりグループは助成を受けてから随分になり当時の資料を引き出すのに大変だった。もしこのような調査をされるならば資料の保管期限を明確にしていきたい。
- ・植栽に限らず、ビオトープ整備でも可として生物多様性保全を目的にかかげてほしい。
- ・それ相応の条件を満たしたボランティアに対し、中長期的な財政支援を行い、専門家、有識者等によるレベルアップを計るよう指導・育成を行い、各地に拠点をつくることを望む。

- 活動資金を初年度に助成してほしい。
- このようなアンケートで活動内容を問いかけてもらい感謝している。
- アンケート結果をHPなどで共有して欲しい。
- 今まで多くの助成を頂いて来ましたが、この様に数年後の姿を比較した比較アンケートは初めてである。このアンケートを書いている内に多くの気づきを与えてくれた。活動過程の検証を通して①企画立案が適正であったか②準備を含めて予定に沿って進める事が出来たか③予期せぬ問題が起きた時にどの様に対処で出来たか④反省点を含めて結果はどうであったか⑤他のプロジェクトの参考になったか。等々普段は通り過ぎがちな事に気づかせてくれた。
- 有料でも構いませんので、今まで花王さんの助成をいただいた人たちとの同窓会などの交流会などを開催してみるのはいかがでしょうか。あるいは、ポータルサイトを作り、各団体のイベント情報をあつめた、交流サイトも有効かもしれない。

6. 参考資料

① アンケート調査依頼書

アンケート配布時に、送付したアンケート調査依頼の文書は以下の通りです。

令和元年 12 月吉日
花王・みんなの森づくり活動助成を 受けられた団体の皆様
公益財団法人都市緑化機構
「花王・みんなの森づくり活動助成」に関するアンケート調査へのご協力をお願い
拝啓 時下ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。
この度、皆さんにこれまでご参加いただきました「花王・みんなの森づくり活動助成」の取組が 20 年目を迎えました。皆様の日々の活動並びに本助成事業へのご理解ご協力によりこれほど息の長い事業となりましたこと、改めて厚く御礼申し上げます。
既にメールでもお送りさせていただいておりますが、この 20 年という節目に、これまでのみんなの森づくり助成事業を振り返り、皆さんからのご意見を頂戴することで、さらなる助成事業の発展を図りたいと存じます。
つきましては、これまでの参加団体様皆様にアンケートを実施させていただきたいと存じますので、別紙回答用紙にご記入のうえ、令和 2 年 1 月 14 日(火)までに、公益財団法人都市緑化機構 花王・みんなの森づくり担当 (minnano-mori@urbangreen.or.jp)にご回答賜りたく、お願い申し上げます。
なお、回答内容につきまして、後日、担当者より直接ご質問させていただくこともあるかもしませんので、お含みおきいただきたく、併せてお願い申し上げます。
敬具
※ご回答頂く前にお読みください。
◎当アンケートで得られた個人情報については、研究目的にのみ使用され、ご回答頂きました内容に関しても、回答者様が特定される形で開示・提供をすることは致しません。
◎お忙しいところ恐縮ですが、回答はメールに添付させていただいた Excel フォーム、もしくは同封のアンケート用紙にご記入の上
令和2年1月14日(火)必着
にてメールでご返信、もしくは同封の返信用封筒にてご発送下さいますよう、よろしくお願い申し上げます。
《送付・お問い合わせ先》
(公財)都市緑化機構 花王・みんなの森づくり担当 小松・伊藤 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 3-2-4 田村ビル 2 階
電話 : 03-5216-7191 / FAX : 03-5216-7195 / e-mail : minnano-mori@urbangreen.or.jp

② アンケート票

各団体に配布したアンケート票は以下の通りです。

整理番号

「花王・みんなの森づくり活動助成」に関するアンケート調査

〈ご回答方法とお願い〉

- ・ 質問や項目をとばさないよう、お気をつけください。
- ・ どうしても判断しにくい場合は、最も近いものを選択してください。
- ・ 西暦2019年12月現在としてご回答ください。

★ご記入者さまの情報をお教えてください。

ご回答内容の確認を必要とする場合に使用させていただきます。

(連絡先は公表しません)

活動団体名				
担当(記入)者 氏名				
ご連絡先	住所			
	電話		FAX	
	E-mail			
	団体 Web アドレス ※お持ちの もののみご 記入下さい	ホームページ(URL)		
		Facebook (URL)		
		Instagram (URL)		
		Twitter (アカウント名)		
その他				

★助成を受けた期間を教えてください

第1回目	西暦		年	～		年
第2回目	西暦		年	～		年
第3回目	西暦		年	～		年

以下の質問にお答えください。

1. 活動団体の基本情報についてお答えください。

1-1. 活動団体名(助成を受けた時と変更がある場合は、当時の団体名)

1-2. 助成を受けた事業名(団体名と別の事業名がある場合)

1-3. 団体代表者氏名

1-4. 活動目的についてお答えください。

1-4-1. 活動目的をお書きください。

1-4-2. 以下の選択肢のうち、貴団体の活動目的に当てはまる項目の口に「1」をご記入ください。(複数可)

☐ ア. 地球環境への貢献

☐ カ. 環境教育

☐ イ. 地域の環境改善

☐ キ. 地域の美化、景観づくり

☐ ウ. 生物多様性保全

☐ ク. 地域活性化(観光客の誘致等)

☐ エ. コミュニティづくり

☐ ケ. 子育て支援・福祉

☐ オ. 世代間交流

☐ コ. 社会参加

1-5. 活動概要をお書きください

1-6. 助成対象となった活動の主な活動場所と面積をご記入ください。

また、所有者として当てはまる項目の口に、「1」をご記入ください。

活動 場所	都・道	市 町 村	所有者	☐ 公共	☐ 個人
	府・県			☐ 企業等	☐ その他
	(名称)			面積 m ²	

1-7. 上記以外の活動場所がありましたら、活動場所と面積をご記入ください。

また、所有者として当てはまる項目の口に、「1」をご記入ください。

活動 場所	都・道	市 町 村	所有者	☐ 公共	☐ 個人
	府・県			☐ 企業等	☐ その他
	(名称)			面積 m ²	

1-8. 現在の活動状況についてお答えください。

1-8-1. 当てはまる方に、「1」をご記入ください。

☐ ア. 活動を継続中 ☐ イ. 活動を終了・解散

1-8-2. 「イ. 活動を終了・解散」とお答えの場合、その理由をお教え下さい。

1-9. 活動開始時期をお書きください(西暦でお答えください)

もし、活動が終了されている場合は、活動を終えた時期をお書きください。

西暦 年 ~ 年まで

1-10. 収入についてお答えください。

1-10-1. 年会費(/人)をお書きください。 年会費(/人) 円

1-10-2-1. 年会費以外の収入はありますか。

当てはまる方の口に、「1」をご記入ください。

☐ ア. ある ☐ イ. ない

1-10-2-2. 「ア. ある」とお答えの場合、年会費以外の収入の詳細をご記入ください。また金額(/年)をご記入ください。

年会費以外の
主な収入 金額 円/年

★助成当時と現在についてお答えください。
(複数助成年ある団体様は最終助成年に関してご記入ください)

1-11. 他団体との関わりについてお答えください。

1-11-1. 関係・連携団体の種類についてお答えください。

関係・連携している全ての団体の口に、「1」をご記入ください。

■助成当時

- | | |
|---|--|
| ☐ ア. 公共機関(市役所等) | ☐ カ. 他NPO等市民団体 |
| ☐ イ. 森林組合 | ☐ キ. 中間支援組織(NPOセンター等) |
| ☐ ウ. 教育機関(幼稚園～中学校) | ☐ ク. 病院・福祉施設 |
| ☐ エ. 教育機関(高校～大学) | ☐ ケ. 自治会・町内会 |
| ☐ オ. 研究機関 | ☐ コ. その他 |

■現在

- | | |
|---|--|
| ☐ ア. 公共機関(市役所等) | ☐ カ. 他NPO等市民団体 |
| ☐ イ. 森林組合 | ☐ キ. 中間支援組織(NPOセンター等) |
| ☐ ウ. 教育機関(幼稚園～中学校) | ☐ ク. 病院・福祉施設 |
| ☐ エ. 教育機関(高校～大学) | ☐ ケ. 自治会・町内会 |
| ☐ オ. 研究機関 | ☐ コ. その他 |

1-11-2. 上記に挙げるような関係・連携している団体の数をご記入ください。

助成当時 団体 現在 団体

1-11-3. 関係・連携団体との関わり方についてお答えください。

関わり方で、当てはまる項目の口に、「1」をご記入ください。

■助成当時

- | | |
|--|---|
| ☐ ア. 推薦協力 | ☐ カ. イベント協力(開催運営・参加) |
| ☐ イ. 事務手続き協力 | ☐ キ. モニタリング等の調査協力 |
| ☐ ウ. 専門家による指導協力(定期) | ☐ ク. 維持管理活動への協力 |
| ☐ エ. 専門家による指導協力(一時) | ☐ ケ. 活動時のお互いの会員の派遣 |
| ☐ オ. 機材や材料の協力 | |

■現在

- | | |
|--|---|
| ☐ ア. 推薦協力 | ☐ カ. イベント協力(開催運営・参加) |
| ☐ イ. 事務手続き協力 | ☐ キ. モニタリング等の調査協力 |
| ☐ ウ. 専門家による指導協力(定期) | ☐ ク. 維持管理活動への協力 |
| ☐ エ. 専門家による指導協力(一時) | ☐ ケ. 活動時のお互いの会員の派遣 |
| ☐ オ. 機材や材料の協力 | |

★下記の項目の数値をご記入ください。

1-12. 登録メンバー数 助成当時 人 現在 人

1-13. 中核メンバー数 助成当時 人 現在 人

1-14. 中核メンバーの年齢構成

	40代 以下	50代	60代	70代	80代 以上
助成当時					
現在					

← 各欄に
← 人数を
記入

1-15. 年間事業(予算規模) 助成当時 円 現在 円

1-16. 年間活動回数 助成当時 回 現在 回

1-17. 1回あたりの活動時間についてお答えください。 時間/回

1-18. 年間延べ参加者数 助成当時 人 現在 人

1-19. 参加者についてお答えください。参加している全ての項目の口に、
「1」をご記入ください。

■助成当時

- | | |
|--|--|
| ☐ ア. 小学生以下(0～12歳) | ☐ エ. 社会人(60歳以下) |
| ☐ イ. 中学生・高校生 | ☐ オ. 60歳以上 |
| ☐ ウ. 大学生 | |

■現在

- | | |
|--|--|
| ☐ ア. 小学生以下(0～12歳) | ☐ エ. 社会人(60歳以下) |
| ☐ イ. 中学生・高校生 | ☐ オ. 60歳以上 |
| ☐ ウ. 大学生 | |

2. 「みんなの森づくり活動」の助成効果についてお答えください。

2-1. 助成を受けて実施した活動期間中の成果についてお聞きます。

「1. 当てはまる」～「5. 当てはまらない」までの5段階で、最も適当と思われる選択肢の口内に、「1」をご記入ください。

	1. 当てはまる	2. やや当てはまる	3. どちらでもない	4. 当てはあまりはまらない	5. 当てはまらない
2-1-1. 活動全般を通じて、助成の成果を実感している	☐	☐	☐	☐	☐
2-1-2. 緑地の維持・保全等に貢献できた	☐	☐	☐	☐	☐
2-1-3. 景観の保全・改善に貢献できた	☐	☐	☐	☐	☐
2-1-4. 生物多様性の保全に貢献できた	☐	☐	☐	☐	☐
2-1-5. 子ども達の学びの機会をつくることができた	☐	☐	☐	☐	☐
2-1-6. 介助など支援の必要な方の学びの場・交流の場の機会をつくることができた	☐	☐	☐	☐	☐
2-1-7. 社会参加の機会が増えた	☐	☐	☐	☐	☐
2-1-8. 地域の賑わいが増した	☐	☐	☐	☐	☐
2-1-9. 具体的に貴団体が、活動を通じて実感した成果をお書きください。					

2-2. 助成期間が終了してからの効果についてお聞きます。

「1. 当てはまる」～「5. 当てはまらない」までの5段階で、最も適当と思われる選択肢の口内に、「1」をご記入ください。

	1. 当てはまる	2. やや当てはまる	3. どちらでもない	4. 当てはあまりはまらない	5. 当てはまらない
2-2-1. 助成後も活動の年間計画を立て、計画的に進めている	☐	☐	☐	☐	☐
2-2-2. 助成前に比べ、地域からの認知度が上がった	☐	☐	☐	☐	☐
2-2-3. 助成の後、事業規模は拡大傾向にある	☐	☐	☐	☐	☐
2-2-4. 助成後、年間延べ参加者数は、増加傾向にある	☐	☐	☐	☐	☐
2-2-5. 助成後、活動メンバー数は、増加傾向にある	☐	☐	☐	☐	☐
2-2-6. 助成の後、活動内容が充実した	☐	☐	☐	☐	☐
2-2-7. 助成後、外部のNPO団体等や行政と交流が増えている	☐	☐	☐	☐	☐
2-1-8. 上記の変化の理由や上記以外に変化した事項についてご記入ください。					

3. 活動における課題意識についてお聞きします。

「1. 当てはまる」～「5. 当てはまらない」までの5段階で、最も適当と思われる選択肢の口内に、「1」をご記入ください。

	1. 当てはまる	2. やや当てはまる	3. どちらでもない	4. あまり当てはまらない	5. 当てはまらない
3-1. 今後の活動において、若手会員の導入方法・育成および世代交代は、課題である	☐	☐	☐	☐	☐
3-2. 今後の活動において、活動資金の確保は、課題である	☐	☐	☐	☐	☐
3-3. 今後の活動において、活動場所の確保は、課題である	☐	☐	☐	☐	☐
3-4. 今後の活動において、技術や知識の習得は、課題である	☐	☐	☐	☐	☐
3-5. 今後の活動において、団体のマネジメント手法の習得は、課題である	☐	☐	☐	☐	☐
3-6. 今後の活動において、他の団体や地域との連携は、課題である	☐	☐	☐	☐	☐
3-7. 今後の活動において、他の団体との交流の場を作ることは、課題である	☐	☐	☐	☐	☐
3-8. 今後の活動において、活動に対する地域社会の理解・支持は、課題である	☐	☐	☐	☐	☐
3-9. モチベーションの維持は課題である	☐	☐	☐	☐	☐
3-10. 外部から活動が認められることは課題である（評価・認知度）	☐	☐	☐	☐	☐
3-11. 専門家の指導や知見は必要である	☐	☐	☐	☐	☐
3-12. 専門家の指導や知見が必要だと思う具体的な事がありましたらお書きください。					

3-12. その他、活動を継続する上で、見えてきた課題などがあればご記述ください。

4. みんなの森づくり活動では次世代を育む環境づくりと人づくりを目指しています。

この「次世代を育む環境づくりと人づくり」と活動の繋がりについてお聞きます。

4-1. 「1. 当てはまる」～「5. 当てはまらない」までの5段階で、最も適当と思われる選択肢の口内に、「1」をご記入ください。

	1. 当てはまる	2. やや当てはまる	3. どちらでもない	4. 当てはまらない	5. 当てはまらない
4-1-1. みなさんの活動は、「次世代を育む環境づくりと人づくり」に繋がっている	☐	☐	☐	☐	☐

4-1-2. 前の質問で、そのように回答した理由をご記入下さい。

4-2. 「次世代を育む環境づくりと人づくり」に対して企業に求めること、もしくは市民一人一人にできることは何だと思えますか。

4-3. 「みんなの森づくり」活動への評価・要望についてお聞きます。

4-3-1. 市民活動に対する助成で重視している点をお教えてください。

もっとも適当な項目の口内、「1」をご記入ください。

☐ ア. 金額	☐ エ. 専門家による指導の有無
☐ イ. 助成期間	☐ オ. PR等外部への活動内容の発信
☐ ウ. 事務の簡易さ	☐ カ. 助成金の用途

4-3-2. 主催者のサポートや関わりについて期待することはありますか。

★最後に、全体を通して、ご意見ご感想等あればご記述ください。

お忙しいところ、ご協力誠にありがとうございました。